



新宿発  
320号

# 「9条世界会議」に参加して

憲法九条の改悪を許さず、  
アメリカの世界戦略に奉仕するための軍隊をなくそう

「9条世界会議」

9条世界会議に取り組んで

「握手」は「武力」を遥かに超える

体で動かす9条、9条で動かす体!

「シンボルとしての9」

「9条世界会議」に辿りつくまで

痛感したメディアへの期待 一国際自主企画「憲法9条とメディア」を開催して

いままた浮かび上がる「靖国」の闇 9条世界会議「9条・ヤスクニ・歴史と和解」シンポジウムから

憲法9条世界会議、参加者あふれる 一場外でも演説、異例の幕開け—

9条世界会議に行ってきました

9条世界会議に参加して

命を大事にしあえる世界に 一9条世界会議に参加して

9条と世界

「世界」会議だから出会えた!

「9条世界会議」を終えて、考える

人間存在の度しがたさと9条

イラク支援ボランティア

ドイツで広がる「9条」の輪

戦争を廃絶するための9条世界宣言

核不拡散(NPT)再検討会議準備委員会に対する9条世界会議の声明

G8に対する9条世界会議声明

2008年 反サミット運動

大学と運動の交差する地点から言葉を G8対抗国際フォーラム

反サミットキャンプに見たゼネストの情景

コスタリカ通信 「軍隊のない国」から

窓 「自衛隊イラク派兵は憲法九条一項違反」と宣言した名古屋高裁4・17判決

土屋 公献

松村 真澄

小澤 久

いちだ まり

安藤 博

成瀬 慧

綿津 靖子

丸山 重威

古川 美佳

岩垂 弘

浮田 久子

松本 和美

春田 朋子

鈴村 彩

保坂 治男

古川 博資

成瀬 政博

高遠菜穂子

木戸 衛一

資料

報告

入江公康・白石嘉治

栗原 康

笹本 潤

田巻 紘子

この ひろい宇宙に  
たったひとつの地球

その大きな地球に

たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

この ひろい宇宙に

たったひとつの地球

たった一度きりの人生だから

思い切り

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の奥まで深く息をし

ああ 生きていてよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

〈あごろ〉 人と人の出会うひろば

〈あごろ〉 人と人の共に生きるひろば

# 憲法九条の改悪を許さず、 アメリカの世界戦略に奉仕するための 軍隊をなくそう

土屋公献

去る五月四日から六日にかけて、千葉県で幕張メッセで「9条世界会議」という、大規模な集会が催されました。ここにはノーベル平和賞の受賞者の方が見えて、非常に立派なスピーチをやってくれました。初日の全体会には一万数千人（うち三千人は会場から溢れた）の聴衆がおられました。私もこの集会に行き、次のことを話しました。

「日本は、世界に一つしかない立派な憲法、誇るべき憲法九条を持っていながら、大きな軍隊を持っている。これはおかしい、矛盾している。この矛盾の解決は、九条をつぶすか、自衛隊をつぶすか、どちらかありません。数十年の経験から、自衛隊というものが自国を守るためのものではなくて、アメリカの世界戦略に奉仕するための軍隊である、ということが、皆さ

ん十分わかってしまっている。今さはどう言いわけしようと、実績が示しております。このわかつている段階で、世界の人びとが集まって『9条世界会議』をおこなった。もはや圧倒的に九条のほうが大切で、軍隊のほうがいいことが、人びとの意志であることがはっきりしている」というような内容です。

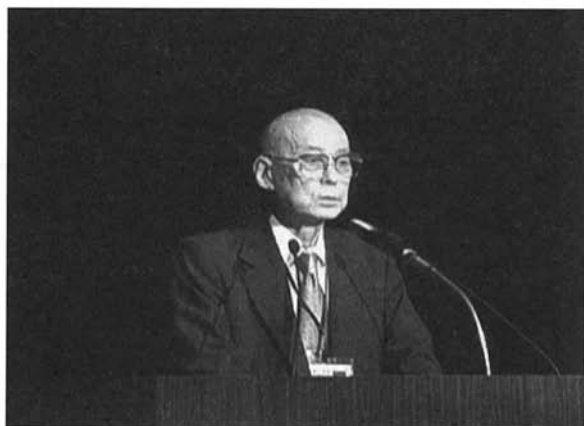
もはや九条は世界的存在となっているのです。

自衛隊は、日本を守るためではなく、アメリカの世界戦略を守るための軍隊であり、とくにアジアをターゲットにしています。アジアはもともと日本が侵略して非常に大きな迷惑をかけた国々にです。それを敵にまわすようなアメリカの動きにたいして、日本の軍隊がお手伝いをする、これは、とんでもないことです。

東京造形大学教授の前田朗さんが書かれた『軍隊のない国家』によれば、軍隊のない国家が、第二次世界大戦の前は七つだったのが、現在二八に増えている。こういう趨勢から見ても、日本は誇るべき憲法九条を持っていながら、大きな軍隊を持っているのは矛盾しているのであって、軍隊をなくしていかなければならない。これまでは、軍隊を持たないのは「たんなる理想」とされていたが、この理想が現実化してきている。

実際に軍隊のない国々には、ほとんど弱小国ですが、それぞれの国の歴史や事情によって、その道を選んだのでしょうか。共通して言えることは、周囲の強弱すべての国々にの国際信義に頼っているからです。弱小国がさらに自信をもって軍隊のない現状を保つには、日本の憲法九





「9条世界会議」であいさつする土屋公献氏  
(シュレー大学映像プロジェクト作製『土屋公献—平和と人権を守る弁護士』より)

条と同文の憲法を取り入れるべきです。そのような憲法を持つ国にたいして不正な野心を抱くことは、国際社会が許さないはずです。もちろん強大国も同様の道へ進むべきです。

いま大切なのは、日本は決して仮想敵国をつくらないこと。とくにアジアと仲良くすること。

仲良くすれば、戦争はなくなる。

仲良くするためにはどうするか。かつての戦争で彼らにたいしておこった大きな罪を清算することです。歴史を正しく見つめ直すこと。これをしないで「未来志向でいこうじゃないか」と呼びかけるのはゴマカシです。正しい歴史をはつきりと認識し、その歴史に立って、現在を・将来を見つめ直す。そしてそれにふさわしい行動を起こす。これが正しい平和への道です。恒久平和を築く道はただ一つです。これをいよいよ実現できる時代が近づきつつある。

力を合わせて実現しましょう。

(弁護士・元日本弁護士連合会会長)

# 平和の思いをこめて実現！

三日目、まとめの総会  
元イラク兵、カーシム・トゥルキさん(左)  
と、元米兵、エイダン・デルガドさんが  
肩を並べた



ピースボートによる ダンスチームのパフォーマンス



オープニングパーティ(前夜祭)で交歓する  
世界41か国から来日したゲストたち  
(幕張メッセのレストラン「NOA」)



広島から幕張メッセまで1200キロ  
を71日かけて歩き通した「9条ピ  
ースウォーク」の若者たち、そして  
日蓮宗妙法寺のお坊さんたち

# 9条世界会議 2008 年



超満員となった全体会 会場の幕張メッセ・イベントホール



全体会で行なわれた音楽ライブ  
「9ALIVE」  
年代を超えた来場者が、総立ちに  
なり、音楽に酔った

初日全体会 会場に並ぶ長蛇の列



写真提供：  
9条世界会議 実行委員会



## 320号 「9条世界会議」に参加して

### 目次

|   |        |    |
|---|--------|----|
| 憲法九条の改悪を許さず、アメリカの世界戦略に奉仕するための軍隊をなくそう            | 土屋 公献  | 1  |
| 「9条世界会議」  | 松村 真澄  | 8  |
| 9条世界会議に取り組んで                                    | 小澤 久   | 11 |
| 「握手」は「武力」を遥かに超える                                | いちだ まり | 19 |
| 体で動かす9条、9条で動かす体                                 | 安藤 博   | 24 |
| 「シンボルとしての9」                                     | 成瀬 慧   | 35 |
| 「9条世界会議」に辿りつくまで                                 | 綿津 靖子  | 37 |
| 痛感したメディアへの期待——国際自主企画「憲法9条とメディア」を開催して            | 丸山 重威  | 41 |
| いままた浮かび上がる「靖国」の間 9条世界会議「9条・ヤスクニ・歴史」「和解」シンポジウムから | 古川 美佳  | 44 |
| 憲法9条世界会議、参加者あふれる——場外でも演説、異例の幕開け——               | 岩垂 弘   | 48 |
| 9条世界会議に行ってきました                                  | 浮田 久子  | 52 |
| 9条世界会議に参加して                                     | 松本 和美  | 61 |
| 命を大事にしあえる世界に——9条世界会議に参加して——                     | 春田 朋子  | 68 |
| 9条と世界   | 鈴木 彩   | 73 |
| 「世界」会議だから出会えた——                                 | 保坂 治男  | 75 |
| 「9条世界会議」を終えて、考える                                | 古川 博資  | 77 |



|   |           |     |
|---|-----------|-----|
| 人間存在の度しが大ざと9条                             | 成瀬 政博     | 80  |
| イラク支援ボランティア                               | 高遠菜穂子     | 83  |
| ドイツで広がる「9条」の輪                             | 木戸 衛一     | 87  |
| 【資料】戦争を廃絶するための9条世界宣言                      |           | 93  |
| 核不拡散条約（NPT）再検討会議準備委員会に対する 9条世界会議の声明       |           | 100 |
| G8に対する9条世界会議声明                            |           | 102 |
| 【報告】二〇〇八年「反サミット運動」                        |           | 104 |
| 大学と運動の交差する地点から言葉を G8 対抗国際フォーラム            | 入江公康・白石嘉治 | 108 |
| 反サミットキャンプに見たゼネストの情景                       | 栗原 康      | 111 |
| 詩 同盟                                      | 堀場 清子     | 120 |
| 「コストリカ通信 2 「軍隊のない国」から                     | 笹本 潤      | 124 |
| 窓 「自衛隊イラク派兵は憲法九条一項違反」と宣言した名古屋高裁四・一七判決     | 田巻 紘子     | 126 |
| 岩手から 未明の激震に驚く                             | 伊藤エミ子     | 134 |
| 沖縄から                                      | 桑江テル子     | 136 |
| 新潟から 中越震災から四年目の山古志                        | 押見 操子     | 138 |
| 〈台所の科学力〉第4話 足もとから科学しよう（微生物と仲良くしてステキな暮らしを） | 松崎 早苗     | 146 |
| 読書室 「軍隊のない国家 27の国々と人びと」                   | 矢野 秀喜     | 154 |
| 「不在者たちのイスラエル 占領文化とパレスチナ」                  | 中野真紀子     | 156 |
| TOPICS                                    |           | 158 |
| 会と催し                                      |           | 167 |
| あじろのあじろ                                   |           | 198 |

# 「9条世界会議」

松村 真澄

二〇〇八年五月四～六日、千葉（幕張メッセ）、大阪、仙台、広島にて、「9条世界会議」が行われた。

四一か国、一五〇名以上の海外参加者を含め、三万人以上が参加し、戦争放棄をうたった憲法9条の持つ多様な意味を話し合った。

これは、9条の理念を世界へ広げようと活動してきた〈グローバル9条キャンペーン〉と、日本の軍事化に反対する国内市民運動の融合ともいえる。

主催の「9条世界会議」日本実行委員会は、六〇以上の市民団体、労働組合、研究者、一般ボランティアで形成され、二〇〇七年一月から、この大規模なイベントの準備を行なってきた。

幕張メッセでは、一目目、マイレッド・マグワイアさん（北アイルランド／一九七六年ノーベル平和賞）や、コーラ・ワイズさん（アメリカ／ハーグ平和アピール）による基調講演はじめ、多彩なアーティストによる音楽ライブなどで盛り上がり、二日目には、「紛争予防」や「核問題」、「持続可能な未来」など、さまざまなテーマのシンポジウムで意見交換が行われた。

マグワイアさんは、「日本は唯一の被爆国として、悲惨な原爆体験を基に、世界中に核兵器がもたらす苦しみや被害を訴え続けてほしい」。そして「9条は全世界にとって重要なもの。紛争は、話し合うことで解決できる」と訴えた。

イラクから参加した元兵士のカーシム・トゥルキさんは、家族や友人を失った戦争の経験を語り、

「軍隊は国民を守ると教えられたが、そうではなかった。非暴力こそ、人びとを守る最善の方法だ」と発言。

アブグレイブ刑務所の虐待を目の当たりにし、その後、兵役拒否をした元米兵のエイダン・デルガドさんは、「9条は国際的な問題。同じ道を歩いて行こう」と決意を示した。

日本には、七千以上の「9条の会」がある。戦争経験者、その意志を継いでゆく人びとが、各地で活動し、比較的年齢層が高い。とりわけ、政府の改憲指向（軍隊保持を合法化する動き）が激化した二、三年前からは、「9条を守らなければならない」という悲壮感さえ感じられた。

しかし、今回の「9条世界会議」の参加者は、「9条の会」＋一般市民＋若者＋子ども＋海外参加者から成っていた。9条の理念を引き継ぎ、未来へつないでいく新しい世代を、強く惹きつけ、従来存在した「9条を世界へ」という言葉に現実性を与え、「世界は9条を選び始めた」ことを確認させた。そして、「本当に胸を張って9条を世界の人びとに差し出していくことができる」と、実感した人が増えたに違いない。

### 事務局を担って

私は、「9条世界会議」に足かけ三年、関わってきた。キャンペーン部に属し、富士市（静岡）や久喜市（埼玉）など、各地の「9条の会」に呼んでいただいて、「9条世界会議」の話をしたり、小学校や大学に向いて出前教室をしたりした。各集会でグッズを頒布させてもらい、多くの人びとにお世話になった。事務局では、国籍・年齢、さまざまなスタッフやボランティアのみなさんが、夜遅くまで作業した。私は、素晴らしい仲間と、タフで充実した時間を過ごした。

一方、この一年の間には、改憲の手続き法案が強行採決されたり、防衛庁が省になったり、インド洋での給油を再開したり、「日本」の体制に、かなりの変化があった。原爆投下は「しやうがなかった」という政治家まで登場した。こういうたぐいのニュースは、すぐに全世界を飛び回り、海外の友達から、「日本は、アメリカについて行くんだね」「アジアの住民としては、怖いものを感じる」という便りが届いた。彼らが受け止めるニュースの中の「日本」には、政府だけではなく、日本の市民も含まれている。世界が日本社会に注目していることを実感した。

私は、どれほど多くの人びとを集めることが可能なのか、不安だったし、激務のためにこの会議の意義を見失うこともあった。しかし私たち市民が、「武力を掲げて世界に侵攻するアメリカ政府」に、ついていく意志は全くなく、「対話を掲げて世界の人々と付き合いたい」という気持ちでいることをアピールするために、多くの人びとと幕張メッセに集まることの重要性を思った。

そして当日、予想以上の人が集まったことに、心から感動した。

当日、会場にお入りいただけない方がたがいたことは、厳しく反省し、心からお詫びしたい。

その後、不手際というおしかりを受け、何をすべきか考えた。そして、今後の企画で、このようなことが起こらないよう、細心の注意を払うと同時に、この「9条世界会議」の成果をまとめたDVD【9条世界会議のDVD】と公式報告書【9条世界会議の記録】を紹介し、最終日のまとめの総会で採択された「9条世界宣言」を活かしていくことを約束したいと思っている。

\*【9条世界会議のDVD】ならびに【9条世界会議の記録】はこちらでお求めいただけます。

<http://shop.whynot9.jp/>または 03-33363-7697 (担当: 松村)

〔9条世界会議〕日本実行委員会 事務局



# 9条世界会議に取り組んで

小澤 久

二〇〇八年五月四～六日、幕張メッセ、大阪、広島、仙台で開催された「9条世界会議」共同代表 池田香代子・翻訳家、新倉修・国際民主法律家協会、吉岡達也・ピースポートは、海外から四一か国、地域から一五〇人を超える参加者を迎え、幕張二万人、大阪八〇〇〇人、広島一二〇〇人、仙台二五〇〇人の、のべ三万人を超える人たちの参加で、別掲の宣言文を世界に発信し、大きく成功した。

私は、日本のうたごえ全国協議会・音楽九条の会として、当初から実行委員会に参加、会議・プログラム委員会のメンバーとして、最終的には全体会の企画・進行スタッフとして関わった。

この「9条世界会議」の取り組みから見えてきたものを、主に幕張メッセを中心に、レポートする。

幕張メッセでは、全体会をはじめ、シンポジウム、フォーラム、パネルディスカッション、ワークショップ、自主企画、9条ライブ、9条シネマ、展示販売ブースが、いずれも超満員の盛況で、まさに多彩で豊かな取り組みとなった。

イベントホール（七〇〇〇人収容）で開催された全体会には、一万二〇〇〇人が参加。三〇〇〇人が、会場に入れない状況も生まれた。三部構成の全体会は、第一部の最後に「ねがい」と「第九」の大合唱を配置し、第2部では、スピーチと音楽・パフォーマンスを交互に、第3部は、「9ALIVE」と称して、UA、FANKIST、原田真二、加藤登紀子らが出演するコンサートとして企画した。

予定の時間を九〇分もオーバーし、出演者みんなで歌うイマジンのフィナーレは、夜の十時三〇分にもなったが、最後まで多くの参加者が残り、最高の盛り上がりの中で終了することができた。

会場に入れなかった方がたを対象に、急きょ野外集会も開催され、メインスピーカーのマグワイアさん、ワイスさんも参加し、大熊啓（東京のうたこえ）のギターで「We shall overcome」の大合唱で締めくくられた。

日本山妙法寺のお坊さんらを先頭に、広島から東京までを歩き通す9条ピースウォークも、誰もが気軽に参加できるスタイルで取り組まれ、多くの参加者を得た。

若者の姿が目立ち、これまで9条についてあまり考えていなかったという参加者も、たくさんいたことも、大きな特徴である。

私がこの取り組みの情報を得たのは、二〇〇六年六月のバンクバー世界平和フォーラムに参加した時である。バンクバー9条の会主催の交流会に参加、そこで「9条世界会議」の事務局団体となるピースボートのスタッフや、国際民主法律家協会の弁護士たちと、名刺交換をしていたのである。

年が変わって、二〇〇七年、「9条世界会議」の実行委員会の呼びかけがあった際に、日本のうたこえ全国協議会から小沢が、また、音楽九条の会としても、複数の実行委員を出すことにした。また、センタープロダクションが、制作・ディレクターとして関わり、東京労音、音楽センター、センタープロなどの音楽九条の会事務局メンバーは、アーティストのプロデュース、第九合唱団事務局、ねがい合唱団事務局、ライブハウスプロデュース・ディレクターなど、重要な役割を果たした。この取り組みを通じて、新たにオーケストラの事務局からも音楽九条の会に加わっていただけたことも、うれし

い出来事であった。

当日の舞台進行スタッフには、音楽九条の会、東京・関東のうたごえ、東京労音などから八〇人がかかり、裏方の仕事をこなした。

この「九条世界会議」の成功は、参加者に大きな確信と希望を与え、また、世界の国ぐにの中で、武力によらない紛争の解決を模索している人びとに、あらためて九条（のような考え方）の持つ意義を確認できるものとなった。メディアの取り上げ方は、まだまだ少ないとはいえ、これまでのこの手の集会の報道から見ると、間違いなく露出が増えている。

また、さまざまな市民団体、労働組合、文化団体、弁護士団体と個人が「九条を大切にしたい」という一致点を大切に共有し、成功させたことの意義も大きい。

これらの成功をもたらした要因を、企画・運営と参加者組織の両面から、考えてみたい。

実行委員会は、「さまざまな団体個人が一堂に会して」ということもあり、当初は、どこかギクシヤクシしたところも見られたが、取り組みが進むに従って信頼感が高まり、一つの目標に向かって共同してつくりあげていく喜びを感じることができた。何より、事務所で黙々と作業するピースポートやボランティアの若いスタッフの姿を見ると、われわれおじさんたちも、ひと肌もふた肌も脱がなくては、との思いが大きくなったのかもしれない。

企画も運営も、白紙の状態から始まった準備は、さまざまなチームが立ち上がり、時間を経て、そ

のチームが再編されていくという、私の今まで関わったイベントではあまり考えられない運営体制で進んだ。

企画でも、組織でも、大切にされたのが、「参加型」の姿勢である。手を挙げ、意見を出せば「では、その部分をお願いします」というノリは、一見、あぶなっかしきもあるのだが、言い出しつべの責任で、進まざるをえない。ここでも「参加型」が貫かれたと言える。

企画についていえば、「世界会議」と言っても、話を聞くだけではどうなのだろう。たとえば「ねがい」や「第九」といった大合唱、アーティストの演奏なども配置したもののは？」という提案。「ブースを充実させてミニステージでパフォーマンスも?」「シネマの部屋」「ライブの部屋」もできるといいね」「広島から幕張までパレードしたいと思うけど、どうだろう?」「岩波ホールの協力で実写版『火垂るの幕』の試写会ができないだろうか」などの企画提案が、ことごとく実現していった。自主企画や、展示ブースの申し込みも、日を追うに従い数を増し、調整に悲鳴をあげる状況も生まれた。

前述したバンクーバー世界平和フォーラムの開会集会が、まるでコンサートの合間にスピーチが入るというプログラムを見て、日本でもこういうものかと思っていて私としては、力の入れ方が違った。文化企画は、最近少しずつ改善されてきたとはいえ、客入れと送り出しというような扱いで、ほぞをかむ思いをしてきた経験をお持ちの方も多いと思う。この「世界会議」のシーンを、多くの人に見て、感じてもらうことができたことは、今後のさまざまな運動に与える影響は大きいであろう。

二〇〇六年に「がんばれ9条―弁護士と市民が集う第九コンサート」を成功させた若手弁護士たちが中心になり、「9条世界会議」で、あの感動をもう一度と提案された「第九」の企画も、経費やオ

オーケストラの日程の関係で断念せざるをえない状況が、一度はあったが、川崎哲（ピースボート）事務局長の、「こういう企画が参加組織のエネルギーになる。最後まで可能性を追求してほしい」との後押しも受け、音楽九条の会としても全面的に協力する体制をとり、実現できた。テナーのソロを、元最高裁判事がつとめたのも、話題となった。

「ねがい」は、今、世界をつなぐ平和の歌としてひろがり、「9条世界会議」にぴったりの企画として提案し、オーケストラレシヨンの監修と当日の指揮を、池辺晋一郎先生（音楽九条の会代表呼びかけ人・9条世界会議呼びかけ人）にお願ひし、快諾をいただいた。

「ねがい合唱団」の公募にも、多くの方がたが応じ、新宿では、地域の9条の会の人びとが、「どうせ参加するなら、『ねがい』を歌って」と、独自の練習会もやつての参加、ということも生まれた。「第九」の練習会にも、うたごえメンバー中心に数度にわたって出かけ、貴重な練習時間を割いていたとき、一緒に歌ってもらうことができた。

当日は、インターネットで世界中と「ねがい」でつながる活動をやっている「ねがいコネクション」の長田寿和子・横山基治両先生の努力もあり、ケニヤのゴードン、イランのマリアム姉妹、アメリカのディナさんらも、参加が実現した。第2部のゲストでもあるウクライナのナターシャ・グジーさんも加え、それぞれが母国語で歌った、オーケストラと九〇〇人の大合唱は圧巻で、超満員の参加者の大拍手を得た。

「第九」を歌った弁護士さんが「本番で『ねがい』を歌ったら、もうグズグズになって、あんなに練習した『第九』がボロボロになっちゃった」と「恨んで？いた」との話も聞いた。何となく、先生と一緒に参加した学生が、「ねがい」と「9条」には、はまってしまった、ということも、生まれた。

ピースボートダンスチームのパフォーマンスも含め「参加型音楽」は、集会そのものを成功させる力となった。

第2部では、津軽三味線の高橋竹山、チエルノブイリ原発事故の被害者でもある歌手ナターシャ・グジー、アイヌ民族の踊りA IN U R E B E L S、沖縄出身の歌手、普天間かおり、そして、ゴスベルの第一人者、亀渕山香&VOJAと、世界会議呼びかけ人でもある湯川れい子率いる東京女声合唱団のジョイント企画が、各国から参加者のスピーチや、高遠菜穂子・雨宮処凛さんらが参加する「イラク・アメリカ・日本」のトークセッションなどの間に配置された。音楽・パフォーマンスと、スピーチ・トークが交互のプログラムは、参加者を飽きさせることなく、右脳と左脳をバランスよく活性化し、相乗効果を生み出した。

第3部の「9 A L I V E」は、若者に認知されているアーチストに、最後までこだわりをもった。「9条を守ろうとしている人たちだけが集まっても、ダメなんだ。これまでそんなことを考えてなかった人も参加できるようなものに」という、主催者の姿勢が、この企画に表れた。

UAの出演は、最後まで見えなかったのだが、彼女の出演が決定したことが、若者中心に参加組織が広がった一因ともいえる。妊娠中の彼女が、あえて体型がくつきり見える衣装を選び、命をばくくむ思いを「9条世界会議」で語り、歌うシーンは、大きな感動を呼んだ。公式の場では初めての妊娠発表を、翌日のスポーツ報知が報じている。このコンサートを目当てに、全体会の最初から参加していた若者が、「これまで考えていなかったけど、9条って、考えてみなくちゃね」と会話していたと

いう話を聞き、主催者の思いは、確かに実現したと確信した。

主催者も想定外の、三千人が溢れる参加者組織も、この世界会議の注目点である。

前日まで、五〇〇〇人か多くて七〇〇〇人かと読んでいたため、溢れた場合を誰も考えていず、遠方からの参加者も含め、会場に入れない人を生み出したことについては、実行委員の一人として、心からお詫びしたい。

団体に参加（動員）目標を割り当て、点検していくやり方ではなく、あくまでも自主的な「参加型」を貫いたからの現象でもあるのだが、何より最後の一週間で参加を決めた人が多かったということも、一因である。

一方、「9条世界会議」があることは知っていても、内容がよくわからないし、参加目標の割り当てもないし、参加したものでどうか迷っていた人びとが多かったのも、事実である。紙の媒体よりSSS中心の発信に、とまどいを持ったこともある。しかし、この想定外の参加者を実現した一番の要因は、9条をめぐる世論の変化と、七〇〇〇を超える「9条の会」の存在。六〇年以上にわたり憲法を守り活かすために奮闘してきた諸団体の運動と、9条を守ろうという人たちだけではない、参加者をとという発想と企画が一体となったところにあるのだと思う。「既成の運動を乗り越えた」との評価をする論者もいるようだが、一面的であろう。ただ、「動員型」ではなく「参加型」に、という発想と実行力については、今後の企画にも、大いに活かしたい。

ひとつ、おもしろいエピソードがある。事前の宣伝で、四月一日のエイプリルフールに新聞の号

外を装って「9条世界会議」を知らせよう、というキャンペーンの提案があつた際に、何人かの経験豊かな人びとから、善意ではあるが中止したほうがよい、という意見が寄せられた。「9条を快く思っていない人びとに、攻撃の材料をつくる」「世界にはウソという文化が通用しない国もある」「地道な宣伝と組織を黙々とやるべきだ」などなどである。

わたしは、「若者の発想とエネルギーを応援します。9条があつてもユーモアが通じない社会では暮らしたくはありません」と、エールを送った。

結果は大反響である。共同通信社が写真付きで配信。多くの地方紙の紙面を飾った。日本のうたごえ全国協議会の若い事務局員も、新宿の行動に参加したが、「号外―号外―」と叫ぶと、我も我もと、新聞を取っていき、あつという間に、さばけてしまった。こんな駅頭宣伝は、初めて」と、興奮して報告していた。若者の発想と行動力に拍手である。

「9条世界会議」は、多くの成果と教訓を残して終わった。

しかし、9条をめぐる情勢は、決して安心していられるものではない。「世界会議が三万人を超える参加者で成功した」とは言っても、「たかが三万人」とも言える。しかし、この取り組みに参加した若者たちが、自分の言葉で、「9条」を世界に発信していく取り組みも始まっている。「されど三万人」でもあるのだが、なによりも「9条を考える」一点で広がった共同の取り組みは、今後のさまざまな運動に、大きな確信を与えた。

私自身、ここで得た経験と、文化の力への確信、新たな人びととの出会いを財産に、今後、がんばっていききたい、と決意している。

（日本のうたごえ全国協議会）事務局長（音楽九条の会）



# 「握手」は「武力」を遥かに超える

いちだまり

それは合コンから始まった——私の場合

バブル全盛の学生時代ならいざしらず、合コンのお誘いに少々戸惑った三年前秋。

集まった顔ぶれは、いずれも核問題にかかわるNGOの関係者たちだった。ほどよくアルコールも回ったところで、〈ピースポート〉のK君が早口で言った。「二〇〇八年に憲法九条をテーマにした、一万人規模の世界会議をやるつもりなんだ」

やや唐突な感じもしたが、「へえ、いいじゃん。そのときはぜひ、参加させてよ」などと口走った（気がする）。私の平和運動は、いつだってノリが優先だ。二度目に9条世界会議の構想を聞いたときに、私はあるうことか「協力するよ」と言ってしまった（らしい）。「ただし、一参加者として」と、言うつもりだったのだが……。私の人生は勘違いが多い。

## 文化祭的パフォーマンスチーム

四、五〇人が参加する実行委員会では、大づかみな方向性は議論するものの、具体的な動きは、つくれない。間もなく企画、財政、広報など、作業グループが発足し、私はプログラム委員会に所属す

ることになった。網羅する範囲は広い。そこで全体会および分科会の担当と「その他」に分けられた。石塚早恵さんをチーフに、ライブハウス、シネマ、ブース、ピースウォークなどを担当するパフォーマンスチームの誕生だ。

コンセプトは「9条をひろげる」。世界会議としてのクオリティは保ちつつ、ヘビーで多言語の会議で疲れた参加者が、ホッとしたり、笑ったり、リラックスして参加できる場をつくろう！文化祭のノリでいいじゃんー Why not 9? (9条でいいじゃんー) というのが、メンバーのコンセンサスになった。だから終始、「ランチャタイムを兼ねたプログラム」や、「コーヒーを飲みながら参加できる企画」はできないか、と模索してみたり、最寄り駅から会場まで、ストリートパフォーマンスでジャックできないかとか、会場近くの海浜公園でキャンプはできるのかとか、同じ敷地で開催されるイベントの客が、「うっかり」参加できる隙間はないかとか……アイディアという名の妄想が百出したのだった。

### 今だから言える、苦しみの日々

「映画が好き」という理由のみで、私はシネマの担当に。しかし予算はない。確保されているのは部屋と設備だけだ。作品選定の基準も、「内容が『9条的』で、かつ、ほぼ無料で使えるもの」というハードルの高さだった。さらに、長編をじっくり観てもらうのではなく、会議の合間の息抜きもかねて、三〇分程度の作品をというしぼりを自らに課してしまった。そのうえ、公募の自主企画などが出揃うにつれ、会場や時間の調整に難航し、シネマは午後からの開映になった。

パズルのようなプログラム調整と自分の仕事の合間を縫って、プロデューサーに会い、映画会社

足を運んだ。「映画はフィルムで観たい」という哲学も封印し、DVDの試聴を続けた。  
そして六作品に決まった。泣く泣く落とした作品があるのは、言うまでもない。いや、本当に泣くのは、それからで、日本語以外の配慮が必要なことから、日英の内容紹介も、つくることになった。どどん追いつまれていくなかで、さらに自らの首を絞める企画が持ち上がった。

## 『火垂るの墓』プレミアム上映

故黒木和雄監督には、私が所属している「平和博物館を創る会」でも、短編『ぼくのいる街』を撮っていた。その黒木監督の生前の企画で野坂昭如原作の『火垂るの墓』を、長く助監督を務めていた日向寺太郎さんがメガホンをとるという。七月に東京・岩波ホールで封切られるため、五月上旬の「9条世界会議」は、いいタイミングだということから話が進み、プレミアム上映会が決まった。日向寺さんも岩波ホールの担当者も、仕事を通しての知人でもあり、私がこちらも担当することになった。しかも舞台挨拶には、主演の子役・吉武伶朗君、畠山彩奈ちゃんに加え、映画美術の巨匠・木村威夫さんが駆けつけてくださることになった。宣伝と鑑賞者の募集、独自の広報が発生し、大量の作業を背負いこむことになってしまった。言い方を変えれば、「9条一色」の、充実の日々となった。

## そして当日 9条シネマ

五月四日の『火垂るの墓』は、大盛況。実行委員会から、出演者と観てくださった方へ、歌「ねがい」

をプレゼントし、命を慈しむ気持ちで、場内は温かい空気に包まれた。

明けて五日のシネマである。「忌抜き企画」のはずが、「忌つく暇もない9条シネマ」となった。とにかく人、人、人……。ふらりと立ち寄ってふらりと出てもらうことしか念頭になかったため、入れ替えは不可能。というより、誰も動こうとしないのだ。それどころか、どんな人が増え、通路をつぶして椅子を補充し、スクリーン間際の床にも座ってもらったのだが、それでも、びっしりと立ち見である。熱気で空気が薄くなったのでは、と感じるほどだったが、体調を崩す方などが出なかったのが幸いだった。

熱気は人数のためだけではなかった。最初の上映作品『戦争をしない国日本』では、片桐直樹監督が、「9条世界会議に集った人びとに勇気をもらった」と激励し、参加者が拍手で応えた。「テロリストは誰？」では、立ち見で見づらい人のために、きくちゆみさんが、急きよ、弁士のように字幕を読み上げながら熱く解説をした。西谷文和さんの『イラク 戦場からの告発』では、場内がすすり泣きで包まれた。私の会の作品で、東京大空襲のアニメ『君知ってる？首都炎上』、そして元兵士が、日本軍の加害事実という戦争の事実を告発する、日中友好協会のドキュメンタリー『泥にまみれた靴で』では、涙のため息で、さらに室温が上がっていった。協会には「作品紹介のしおり」の印刷でお世話になり、上映後に作品解説もしていただいた。

途中、人の列をかきわけてなんとか外へ出て驚いた。部屋の前から近くの階段の下まで長蛇の列なのだ。「映画の分科会」とか「映画で考える9条」とか、並んでいる方が、それぞれ独自の名称で呼んでいるのも聞こえる。背ざめつつも、感激で胸がいっぱいになった。

最後の作品は、呼びかけ人でもあるジャン・ユンカーマンさんの『映画 日本国憲法』。制作・配給の㈱シグロからは、英語版のDVDを、海外ゲストへのお土産としてプレゼントするという、サブラ

イジングな協力も得ていた。上映後、ユンカーマン監督の挨拶に続き、別のシンポを終えた班忠義監督も、「9条は誇りです」とスピーチしてくださった。

しかし、反省も多い。ご存じのように、全体会では入場できない方が三千人もいらした。不手際や、読みの甘さを率直に謝りたい。シネマについても、「ホっとする」作品というには緊張感に満ちたテーマで、事実を直視するドキュメンタリーばかりとなった。六作品すべて通して観た方も相当数おられたが、終了後には「観たいと思っていた作品が観られてよかった」「ぜひ地元の集会でも紹介したい」「希望を持てました」と声をかけていただいた。

## ハグ（抱擁）と握手と

この二日間、どれだけ握手をしただろう。初めて会う人や、一緒に泣いたり謝ったりした仲間とのハグも数えきれない。それは、これまでの私の中にはない経験だった。

ロビーで、いくつもの車座分科会が生まれ、階段の踊り場で、ブースやミニステージでも、さまざまなパフォーマンスが展開されていた。顔見知りには会えば、その友だちの友だちとも、握手を交わした。

たくさんの方の通訳ボランティアに助けられて生まれたハグもあった。けなげにひたむきに裏方作業をこなす、たくさんの方のステキな仲間とも知り合えた。

結局、「武力で平和はつくれない」というのは、「握手は武力をはるかに超える」ことなんだと思う。これまでも、きつと目にしてはいたはずだけど、私は9条世界会議で「9条」という希望をみつけた。大好きな映画と握手をとおして――。

（平和博物館を創る会）

# 体で動かす9条、9条で動かす体！

安藤 博

人間、何年たつてもあまり変わりません。が、「変わらないようで変わる」ものでもあります。

失言辞職の閣僚のように、「指名した段階では適任だった」と首相が言う、その任命の日から五日で、「ひとが変わって」しまう例もあります。

わたくしも、「9条世界会議」に関わった一年ほどの間に少し変わりました。駅構内の雑踏などで配られるティッシュペーパーや、ちらしの類を受け取るようになったことです。

「未亡人紹介」「すぐ借りられる」など、ろくでもない広告がほとんどで、以前は見向きもしませんでした。それを、すぐゴミ箱ボイであつても、とにかく受け取るようになったのです。ほかでもない、二〇〇八年五月初めの「9条世界会議」のために駅頭などでチラシ配りをした、そのとき群集の大方から受けた、にべもない拒絶が、ひどく堪えたからです。

少しもつともらしい能書きを加えれば、それが「9条世界会議」の目指したことにつながるからです。

つまり、「平和的手段で平和を求めようとする」日本国憲法第9条の理想を、内輪のお念仏から世界に広げていくことです。「9条」は、自分だけでは護れない。9条だけでは護れない。「ピンク広告」であれ、宗教活動の宣伝書であれ、日本国憲法第9条集会のチラシであれ、もうもの、渡されるものは、なんでも受け取るに如くはなし。自分がそうだったように、渡そうとするひとには、とにかく伝えたい、訴えたいという気持ちがあるのだから。「渡されたものなら、なんでも」と、ここを開く

ことから、非暴力平和の世界が創られる」——こう言ってみると、たいした変わり方かもしれません。  
**雑用が世界を救う！**

「世界会議」に関わったのは、端的に言って偶然です。

「非暴力平和隊・日本」(<http://www5f.biglobe.ne.jp/~npi/>)という団体の事務局長をしていて、各種の平和活動につながりがあること。また「市民立憲フォーラム」という、憲法に関する小グループ(<http://www.citizens-i.org/kenpo/>)のメンバーとして、「平和」「人権」などに関する討論、提言(<http://www.citizens-i.org/kenpo/paper050401.html>)を行なってきたことなどから、「世界会議」の実行委員の一人となったのです。

「実行委員」とは、少し偉そうですが、実行したのは、要するに雑用です。この会議のことを、できるだけ広く多くのひとに知らせて賛同金を集め、Tシャツ、缶バッジなどの「9条グッズ」を販売。そしてチケット売りをするからです。二〇〇七年の夏からは、毎週木曜日の夜二時間ほど、実行委事務局のある東京・高田馬場のピースポート事務所で、ポストカード、缶バッジなどを、各種の市民団体集会などに出かけて売るのがに備え、九枚、九個の語呂合わせでそろえて袋に入れたりする作業を、五、六人のメンバーでしました。

「あーらアンドウさん、一枚足りないわ」と、テレビ工場などのアセンブリーライン末尾でチェックをしているような仲間の女性が睨みます。他のメンバーに比べてカードをそろえたりする作業のスピードがずっと遅いのも悔しいけれど、「年をとると指先のアブラがすくなくなるんだって」とあつ

けらかんに言ってくれるのが、さらにこたえます。

「これなら、『多い少ない』の間違いがない」と思ったのは、缶バッチ九個を九箇所の貼り付け場所の決まったボール紙台紙に取り付ける作業です、これをしながらふと出たひとことが、また悪かった。「これ、老人ホームに持つていつて、ボケ防止作業にやらせるといいね。誰でもできそうだから」と言うのに、チェック係がびしりと決めつけます、「アンドウさんの、ぼろぼろ外れちゃう」。「ああ、なにをやってもだめなんだな」と嘆いてみせれば、ついに止めをさされます、「いいのよ、そうやってがんばってくれてるだけで、みんな元氣が出るんだから」

この雑務はしかし、冗談ではすまない、なかなか深刻なものなのでした。実行委員会メンバーとして、人集め・カネ集めの責めを負っていたからです。

「世界会議」開催予算は、当初以下のようになっていました。

・会場借り上げ料 二六〇〇万円、海外などからのゲスト旅費 一一〇〇万円、通訳料 一二〇万円、印刷費 三五〇万円、広報費 三〇〇万円、人件費 六三〇万円など、合わせて五七五〇万円の支出を、賛同金（一口が、団体一万円、個人二〇〇〇円） 三二〇〇万円。カンパ 四〇〇万円。グッズ販売収益 六八〇万円。入場料（一人一〇〇〇～一五〇〇円） 一三〇〇万円など、を合わせた収益の合計でまかなう。

二〇〇八年二月の実行委員会では、いよいよわれわれ四〇人ほどの実行委メンバーそれぞれに、一五〇枚のチケット（各日、前売り一枚一〇〇〇円）が渡されました。自民党議員のパーティ券と同じです。ひとたび受け取ったら、居酒屋で一旦くちを開けた焼酎ビンを返せないのと同じく、もう返す



ことはできません。「しつかり売ってこい」ということです。

問題は、都心からかなり遠い幕張メッセの大会場に、一万人を集めるという目標に合わせて、人集めができるかどうかです。長渕、桑田のコンサートではない、「憲法」です。旧来の「護憲派」の枠を大きく超えて、憲法をひとつと思いかねない若者なども引きつけられるようにと、実行委の主要メンバーは、そのためのイベント企画などに知恵をしまりました。

実行委に名を連ねる自分には、「財政責任」が負わされています。つまり、グッズ販売などがもくろみどおりにできず、たとえば二〇〇〇万円の赤字が出れば、それを約四〇人の実行委員で、約五〇万円ずつ分担して埋める責任がかぶってきます。「そうになったら、もう夜逃げです」と、平和活動団体などでちょつとした講演をするような機会があると、その終わりに、こうした「泣き」を入れて、賛同金集めを試みていました。

わたくしは、海洋植物学者でもあった昭和の天皇の、記憶する限りで一つだけの良い言葉、「雑草という植物はない」を思い出し、「雑用という用事はない」と念じて雑務に精を出していました。「雑用」なしには、どんなに高い理想も実現しようがないからです。「雑用が世界を救う」と自らに言い聞かせつつ、しかし「缶バッチ一個二〇〇円をいくら売ったところで、一〇〇〇万はおろか、一〇〇万円にもなるまいな」と、心の中かなりの赤字を覚悟しながら、五月四日の開会の日を迎えました。前日の三日の夕刻、来場者に会場入り口で渡すプログラムなどをそろえる作業を、四〇〇〇部になったところで「もう十分だろう」と打ち切っていたからです。来場者は、「多く見ても三五〇〇人ぐらいか」という、くらくら予想だったのです。

## 大誤算の大盛況

意外や意外の大盛況となったことは、新聞などで広く伝わっているでしょう。

「世界会議」ホームページに、大盛況は以下のように報告されました。

「五月四～六日、幕張メッセで開催された『9条世界会議』には、のべ二万人を超える人たちが来訪しました。初日の全体会には一万二〇〇〇人が参加し、三〇〇〇人が満員のため入場いただけませんでした。二日目の分科会には六五〇〇人が参加し、当日券完売のため五〇〇人が入場できませんでした。三日目のまとめ総会には、三〇〇人が参加しました」

この大誤算に基づく大盛況の理由を、わたくしたちはいまだに測りかねています。全国（東京、広島、大阪、仙台）で、来場者三万三九〇〇人（うち幕張では、四、五日合わせて三五〇〇人が入場不能）といっても、「様子見」のような特殊な目的を持った人を除き、「改憲派」までを引き込んだものではなかったでしょう。しかし、旧来のいわゆる「護憲派」、つまり前日三日の憲法記念日集会和連荘、（れんしやう）するような人びとだけではないことも、確かだったでしょう。もう少し広い、「9条」に関する「浮動層」ともいえるべき部分を、かなり引き付けることができたのです。会場を見渡した感じでは、それは、若者、中高年者双方です。

ひとつ言えることは、「9条」護憲のためだけではなからうということです。違憲判決まで出たイラク戦争加担を日本政府が続行していることのような、憲法に直結する事柄だけではありません。自民党内でも「残酷な姥捨て」と強い批判を呼んだ「後期高齢者」の医療制度や、道路利権につながるガソリン税問題などに関して、政治への不満・不安が広がっていることが、「9条」を護持し世界に

向けて広げていくというこのイベントへの共感につながったのでしよう。二〇〇七年来の、建築構造手抜きや食品の産地偽装などの企業悪がいまだに跡を絶たずにいるなかで、エネルギー価格高騰により各種の生活物資が値上がりしていることなども、政治への「怒り」に上乘せされていたでしよう。そうしたさまざまなことに対する不満・怒りをぶつけるシンボルとして、「9条を世界に」が空前とも言えるほどの人の流れを生み出したのではないでしようか。

もちろん自民政権に対する鬱積したものが、その中心だったでしよう。それは、二〇〇七年秋の参院選に現れた反自民の潮流につながっているに違いありません。

「憲法9条の世界化」以前の、日本の政治・社会状況に対する不満・不安・怒りを借景として、主催者の予測を超えた大盛況を勝ち取った、とすればその最大の貢献者は、「後期高齢者姥捨て」制度を導入したことなどで、いまでは自民党内でも「負の遺産」をあらさまに言われるようになった、純ちゃん、小泉政権でしよう。

とはいえ、憲法9条を改変しようとする勢力は、表面上浮き沈みしても、極めて根強いものです。「世界会議」での「9条世界化」に向けての高揚をよそに、いつでも政治的に浮上する可能性があります。改憲勢力を、「兵器産業利権につながる者」「右翼・軍国主義者」などと、限定・単純化するのは、大間違いです。すぐ隣に住んでいる善良な人たちの中に、しっかり根を下ろしているはずです。

「9条」が唱える「戦争の放棄」「非暴力の平和」は、下手をするとそうしたひとたちの持つ「世間の常識」から上滑りした独りよがりにも陥る危険さえあるのです。

選挙と同じく、9条の「浮動層」も、一つ状況が違えば改憲に振れていくでしよう。有事法制や改憲のための国民投票法制定を強く後押しした「北の脅威」は、言い古されてこのところ緊迫感も褪せ

ています。しかしたとえば「または核実験」といった悪さを「北」が敢行したりすれば、「幕張メッセの感動」は、一時の華やきに終わり、一転、「9条」を「現実離れの空論」とする流れが勢いを持つでしょう。

インド・米国の原子力協力協定に関連して、核不拡散条約(NPT)に加わらず、核実験を強行(一九七四年)したインドに、原子力関連物質輸出を解禁する例外措置が、原子力供給グループ(NSG、日本など四五か国)の総会で決まったことも、「世界会議」三万人の高揚に水を差すものでしょう。これで、北朝鮮、イランの核開発阻止は、まず望み薄です。米国がこの総会決定を強く後押ししたのは、詰まるところ、軍事力増強を急ぐ中国を「背後」から牽制するため、インドの核保有を事実上認知して連携を図ったのでしょう。核拡散が、かくして動かし難い流れになったという判断から、日本の「核保有」を模索する動きが、外交・安全保障問題のプロの間では強まりつつあるのです。たとえば、「非核三原則」のうちの「持ち込まず」を崩し、米国との核兵器共同利用を図るようなことです。

### お詫びの毎日

二〇〇七年一月二十九日の第一回から数えて一二回目の実行委員会が七月三〇日に行なわれ、実行委を解散しました。この時点で、開催費は収支とも当初より一五%ほどふくらんでいたことが明らかにりましたが、幾分の黒字になっていました。夜逃げは、めでたく免れることができました。

締めくくりの申しあわせ事項に、「二〇〇九年末までの間に『9条世界会議』の第二回を開催することはしない」とあります。これは、「満員につき入場お断り」にまで至った大盛況に図に乗ったか

のように、「来年は後樂園ドームで五万人集会」といったデマが飛んだのに対するものでした。

ただ、「世界会議」が一発の打ち上げ花火ではなく、「次」をまともに考えられるだけのものであったことも確かでしょう。「次回は、今回同様、オリンピックの年、つまりは四年後に、日本国外で。日本の国内法である9条が、真に世界の共有財産として平和を創るために活用されるよう、たとえば朝鮮半島を南北に分断する非武装地帯で、軍人も含めて世界のあらゆるひとが集うことができるように」と、わたくしは願っています。

それはともかく、夏にかけて、わたくしたち実行委メンバーは、御礼というよりお詫びに追われました。「会場ががらの恐れ」を繰り返しては切符を買っていただいた「狼少年」の咎とがに加え、一部は「チケットを持ちながら入場お断り」という「詐欺」の罪です。貸し切りバスを仕立てて遠方から来場した団体や、沖縄からの人の中にも、この酷い仕打ちを受けた方がいました。

わたくしは、自宅近くの教会の神父・牧師様と信者の方たちに、お詫びをせねばなりませんでした。「世界会議」実行委員になった二〇〇七年の初めから、にわかには自宅近くの教会で毎月集会を開いている「市川宗教者の会」という会に加わりました。そこで、心優しい神父・牧師様、そして人徳高くひとを集める力のある信者の方がたにおすがりして、地元の憲法集会での「世界会議」キャンペーン、グッズ、チケット売りと、大変にお世話になったのです。

ここの神父様は、俗世の俗人であるわたくしよりずっと前から、ずっと熱心に、人権擁護・平和・憲法の活動に携わってこられた、その方面ではよく知られた方です。それがアダとなりました。「憲法で幕張に一人、そりゃムリでしょう」と、「消息通」だけに、わたくしを含めた実行委メンバーの大方が内心恐れていたのと同じ悲観的見通しを「宗教者の会」の集会のたびに言っておられました。

「世界会議」当日は、昼ごろ信者の方たちと会場近くのＪＲ駅に着かれ、「開会には間があるし、どうせガラガラだろうから」と、駅前で牛井を食べてこられた、その一行が、いまだに実行委一同身も細る思いがする、あの「満員につき入場お断り」を食らわせた約三五〇〇人のなかに入ってしまったのです。

## 「9条ダンス」

九月も終わり近く、久びさに世界会議のグッズ売り同志と一緒になりました。ピースボートのダンス・チームが、「世界会議」直後に出発した「ピースボート地球一周の船旅」に参加し、ベトナム、パレスチナ、アイスランド、米国（ニューヨーク）などで、「9条」アピールのパフォーマンスや署名集めなどをしてきました。その報告会と、三日間の「世界会議」を二時間の映像にまとめたDVDの映写会とを兼ねた東京都内の集まりでした。国連が決めた「国際平和の日」のイベントでもあったのですが、強い雨にたたられたこともあって、参加者は、あまり多くありませんでした。つまり集会参加者は、二五人ほどのダンス・チームと、受付でDVDや刊行されたばかりの「9条世界会議の記録」などを売るわたくしたち「世界会議」の「残党」とを合わせた数には及ばない程度でした。

しかし、「9条グッズ」販売などのキャンペーン活動をリードし、「マッスン」の愛称で親しまれてきた松村真澄さんは、「ピンチ」が予想されていた二〇〇八年初めから春までと同じように、この日も、にこやかに、このややさびしいイベントの司会をしていました。

DVDは、「リョウジ」と皆が呼んでいる若者が凄腕を発揮して編集したものです。彼は強い雨の中、

表に出て、入り口のわかりにくい会場への案内役をしていました。リョウジの凄腕は、「世界会議」の会場設営にも発揮されていました。こうした若者たちが、会議の成功を下支えしていたことに、改めて思い至ります。

ダンス・チームの若者が、ダンスを演じた後、口ぐちに言います、「これまでは9条なんてあまり知らなかった」と。そうしたメンバーたちが、どうしてダンスで「9条」を世界にアピールできるのか。ダンスには違和感の方が先に立つ旧世代のわたくしにとって、「9条ダンス」は、理解を超えるものでした。ただ、ともかくも体を動かして、世界のあちこちで「9条」をアピールしてきたことは確かです。

わたくしが「9条」について知っていることは、彼等より多いでしょう。たとえば「9条」には二つの項があり、そのうちの第一項はバリ不戦条約（一九二八年八月）をなぞり、「他の手段による政治の延長」としての戦争で利を図ろうとする侵略戦争などを国際法上「非」としたものであること、したがってその内容は特に新しいものではないこと、だから自民党の「新憲法」案でもこの第一項には手をつけていないこと、世界史価値を持つのは「戦力の不保持・交戦権の否定」を謳った第二項であって、「自衛隊を『自衛軍』に」とする自民党改憲案はその改変を目指していること、他方で、米国は日本の戦争協力をより踏み込んだものにさせることを望みながら、しかし、いわゆる「護憲派」の多くが言うように改憲（条文改廃）自体を必ずしも求めておらず、これまで同様のなし崩しで「集団的自衛権」を実質的に行使させて、軍事連携を強化しようとしていること——こうしたことを、米国の軍事・安全保障の専門家との接触なども通じて知っています。

しかし、知っていても、それで「9条」が活きるように自分の体を動かしているかといえ、実際の

行動はいかにもとほしいものでしかありません。「世界会議」に関わった一年は、いわば特別でした。終わってみれば、なにか遠い過去の出来事のようにです。自民党を含め、政界が差し当たり「憲法どころじゃない」状況で、改憲への緊張感が薄れていることから、こちらもたんなりしまった感があります。

ノルウェー生まれの〈平和学〉リーダー、ヨハン・ガルトウングさんが「日本の平和活動家たちは、憲法9条を枕に昼寝をしてきた」と、憲法関係の集会で言うのを聞いたことがあります。この夏の長崎原爆の日には、わたくしの自宅近くの公民館で講演をした朝日新聞記者、伊藤千尋さんが、「護憲」という言葉は、大嫌いだ」と言うのを聞きました。コスタリカと日本は、同じように「戦争放棄・軍隊は持たない」の憲法を持ちながら、憲法のあり方、憲法に対する国民・市民の取り組み方がまるで違っていることを力説した後の言葉です。「サッカーでもなんでも、護ってるだけじゃだめでしょう。護るんじゃないくて、コスタリカのように憲法を使う、活かすんです」——伊藤さんの近著、『活憲の時代 コスタリカから9条へ』（シネ・フロント社刊）の題名にある「活憲」です。

偶然ではあれ、日本が世界に誇れるほとんど唯一の生きている遺産、「9条」を世界に向けてアピールする大集会に関わったのであれば、その成果を活かす務めがわたくしにはあるでしょう。なにができるか。

「入場お断りの大盛況」という「事件」を除けば、マスコミに十分には伝えられずに終わっている「世界会議」の歴史的成果、特に「9条世界宣言」などの重要文書 (<http://www.wbhyot9.jp/sb/log/eid43.html>) を、遅ればせにせよ広く伝えることを、先ず考えます。(93ページ資料参照)

そうしたことによって「9条」を自分で動かし、ひるがえって、自分が「9条」の理想で動かされるようにしていきたいと思います。

(千葉県市川市 ジャーナリスト)



# 「シンボルとしての9」

成瀬 慧

私の父 成瀬政博が、9条のシンボルキャラクターとして描いた「キュート」（名前は後に公募でつけられた）の構想は、私の兄の子どもが生まれたときに閃いたらしい。父にとつては初孫で、生まれたその日、空には虹がかかっていたらしく、それを見た父は「未来の子どものために」という想いの中で、「9条」「虹」「子ども」というキーワードが結びついたようだ。

その後、私が「9条世界会議」の広告デザインを進めていくなかで、色彩のキーワードとして黄色が付け加えられた。私の中では、ギリシャの映画監督テオ・アングロプロスが、マルクス主義時代から離れていく時期の作品群にみられた、「象徴としての黄色」がイメージされていた。

「9条」というのは、非常に厳格な態度を持っていて、文面だけを提示すると、「戦争を二度とするな」という短い宣言であり、それは宗教的な教示にも見える。ここが「9条」の優れた面でもあり、やっかいな面でもある。やっかいというのは、人びとに「9条」というものを伝えていくときに、「教え」を投げかけるような素振りを、我われが回避できないからである。そもそも「9条」の本質は、「教え」ではなく、「想い」のほうが大きいはずなのだが、憲法という共同体的な厳格な約束ごとの中に挿入されている現在、そこに「想い」という感情的なものは排除されている。これは、国の約束事

として成立した「9条」の良い面であり、避けがたい限界でもある。

第二次世界大戦後、一つの明確な想いが日本を占めていたことは、確かだと思う。つまり、「この悲惨な現実を二度と繰り返したくない」という想い。それはやがて、憲法という国の約束ごとに吸収されることで、地位を確立することになるのだが、憲法が個人の「想い」までも存続させてきたわけではない。むしろ時代を経た国家にとっては、個人の悲惨であつたろう過去を、「9条」によって代弁してますよ」ということを示す国内向けハリボテ装置にすぎない、と言つてもいいのではないだろうか。さらに諸外国に向けても、日米軍事同盟的な素振りを見せつけている状態で、「9条」もありますよ」といったところで、やはりハリボテ状態である。もはや、「9条」が設置されているこの国家を信じることはできないし、そもそも「9条」の本来の力をむき出しにできない以上、国家装置としての「9条」のあり方も疑問になつてくる。

そういった意味で、「9条世界会議」での広告キャンペーンでは、国家装置的なものから、個人へ還元していくような流れで「9条」を捉えなおせないかと思ひ、広告を作り続けた。

個人がシンボルとして「9条」を掲げつつ、国の装置として機能すること——。この二つのバランスがない限り、「9条」の本質が現実にもみ出しになることはない。そのバランスを見直すことが、キュートに課せられた使命ではなからうか。キュートが持っている「9」は、大して重いものではない。それは楽器にもなるし、花にもなる。個々人がなんらかの想いを伝えるための一つのシンボルとして存在する。「9」が国家から離れ、人びとのもとでさらに成長していくことが、本当の力になつていくのではないだろうか。

（「9条世界会議」アートディレクター）

# 「9条世界会議」に辿りつくまで

綿津 靖子

昨年の春、「9条世界会議」が、日本で開催される」というリーフレットを手にしたとき、「すごい！ やったァー」と、私は思わず歓喜の声をあげておりました。

ここ数年、「九条の会」が、静かに、ジワジワと、そして、時には燎原の火のごとく、日本中に広がっていくことに力強さを感じておりました。と同時に、以前はタブー視されていた改憲論が勢いを増していることに不安をいただき、全国にある「九条の会」が一斉行動をとり、無関心層に働きかけ、世論を喚起できるような大きなイベントをもてたら、——いえいえ、一斉蜂起できたら、とまで、物騒な、少々焦りにも似た感情をもてあましておりました。それだけに、リーフレットを受け取ったときは、嬉しくて、すぐに「9条世界会議」のボランティアをしよう」と決めたのです。

## 憲法ミニブックの作成

さて、「9条世界会議」に辿りつくまでには、自分なりの試みがありました。

改憲させないために、自分にできることはなにか。とにかく声をあげ、行動していこう。

でも「さあ、どうする。どうやる」と、しばらく思い悩んだ末、憲法の前文と9条にメッセージを添えた「ミニブック」を作成することにしました。

このとき参考にしたのが、以前、あるワークショップで参加者に配布された憲法全文掲載の「ミニブック」。久しぶりに読む条文に、不思議な高揚感を覚えました。以来、それは通勤途中の愛読書となり、いつのまにか、前文と9条などを誦（そら）んじておりました。

すっかり表紙の擦り切れた「ミニブック」を再び手にし、作成に取りかかったのが三年前の二月。出来上がりはお粗末なものでしたが、表紙に和紙を貼り、百冊ほどつくったところで、あちこち配りました。思い返せば自己満足な感はありませんでしたが、憲法改悪させないための、私の、ささやかな実践のスタートでした。

「次世代の人びとに平和憲法を手渡したい」そう思い続けている私が、「憲法のことって、ほんととは、よく知らない」ことを知った時間でもありました。

「書店に立ち寄って憲法関連の本を購入する」「集会で講演者の著書を求める」などして、遅まきながら、少しずつ勉強を重ねていきました。九条改憲論者と言われる著者の本は、買いたくないので、書店には申しわけないけど、立ち読みしました。当初は、彼らに立ち向かうための理論武装を身につけねば、と張り切りました。しかし、これは、なかなか容易なことではなく、残念ながら、途中で挫折しました。

次世代の人びとに「平和憲法」を手渡したいのが、わたしの行動の原点。多くのおとなたちの無関心とサボタージュが生んだ、世の中の、たくさんの方々のテイタラクを、おとなのひとりとして、心から申しわけないと思っています。そのうえ、平和憲法を護れないことになったら、と考えるだけで、ゾッとしてしまいます。細ぼそながら、わたしの草の根参加は、懺悔の気持ちで後押ししているのかもしれない。

れません。

## 「9条世界会議のお知らせ」を、多くの友人に送る

集会に参加して、いつも感じることは、参加者の顔ぶれがあまり変わらないこと。「またお会いしましたね」と、挨拶する。顔なじみになるのはよいことだが、若い人たちや無関心層に、もっと参加してほしいと痛切に願います。「人の輪を外へ外へと広げていく」のは、ほんとうにむずかしい。

さて、「9条世界会議」のお知らせを大勢の人に知らせようと、関心がありそうな人、ない人を含め、小学校時代にまでさかのぼり、名簿を広げ、電話で、手紙にして、アクションを起こしました。「残念ながら都合により、当日参加できません。少額だけでもあなたにカンパします。がんばってね」と返事をくれた幼なじみ。「家族やまわりにしっかり伝えました」と電話してきた友。これに意を強くして、さらにお知らせの輪を広げていきました。

## 9条世界会議

いくつか事情が重なって、実際にボランティアを始めたのは、今年の二月からです。事務局のある高田馬場へ通いました。時には夜までかかることもありましたが、事務局スタッフは、いつまでも、帰る気配がなく、毎日遅くまでがんばる若い人たちに頼もしさを感じ、嬉しくなったものです。

いよいよその日が近づくにつれ、一万人を目標に掲げていたスタッフから、「予想入場者数は五千くらいではないか」と、不安もまじり、読みきれない声が……。たんにボランティアのひとりになさないうたしでさえ、ドキドキと、テンションは、いやがうえにも上がっていました。

そうして迎えた五月四日は、たいへんなことに。入場を待つひとの長い列が、延々と続きます。遠方から泊りがけでいらしたのに入場できない人にとっては、当然腹の立つことです。

本来は嬉しい悲鳴のはずが、予想外の状況にとまどいつつ、必死に対応する若いスタッフ。わたしも、お詫びしながら、ていねいな応対を心がけました。

翌五日。各分科会前は、入室を待つたくさんの人でいっぱい。またまた参加できない人が出るくらいの盛況ぶりでした。熱心にメモをとる人、一言も聞き逃すまいと、真剣に耳を傾ける人を目の当たりにして、心満たされる思いでした。

日本国憲法第九条は、日本の、世界の、「たから」であることを再確認できたこのイベントに関わって、ほんとうに良かった！ スタッフのみなさま、ボランティアのみなさま、お疲れさまでした。

残念ながら、昨年五月十四日、国民投票法は成立。平成二二年五月十八日から施行となります。改正手続きは、第九六条に「各議院の総議員数の三分の二以上の賛成で国会が発議し、国民投票による過半数の賛成が必要」と。

福田から麻生に続く保守政権の、解散、そして総選挙は？  
これから正念場。「貧者の一灯」、がんばりたいものです。

（千葉県我孫子市在住）

# 痛感したメディアへの期待――

国際自主企画「憲法9条とメディア」を開催して

丸山 重威

定員一二〇人とされる部屋の机を全部出して、椅子だけにし、正面のパネラー席も、うんと壁に寄せ、前方半分近くの人には、床に座ってもらった。それでも満員……。五月五日午後四時から開かれた「マスコミ関連九条の会連絡会」と「日本ジャーナリスト会議」、それに「韓国記者協会」が加わった「憲法九条とメディア」の集会は、二〇〇人以上の人を集め、大成功のうちに終わった。

パネリストは、桂敬一・元東大教授、李成春・韓国記者協会元会長、伊藤千尋・朝日新聞記者の、三人。コーディネーターを、小中陽太郎・名古屋経済大学短期大学部放送コース客員教授が務めた。

## ▼忘れがちな「メディア」の存在

もともと「9条世界会議」の企画が始まったとき、そこできちんと問題にしなければいけないのは、「メディア」のことだ、と考えた。

どんな問題でも同じだが、多くの場合、具体的な問題はあげられていても、その前提になる「メディア」は、忘れられがちだ。たとえば教育問題でも、教科書問題や各教科の指導、クラブ活動については論じられる。しかし、そうした問題の前提として、「情報」が、メディアによって伝えられており、そのメディアの情報に歪みがある可能性がある」といったことは、つい忘れがちになる。

「9条」でも同じで、「戦力とは何か」「自衛隊をどう考えるか」「非武装で本当に大丈夫か」「憲法9条を実現していくには、どうしたらいいか」などといった問題は、それぞれ論じられるが、そうした議論の前提になっている「情報」が、どう創られ、伝えられているかについては、案外、見逃されてしまっている。

いま、多くの人は、新聞で政治の動きを知るし、テレビで政治家の言動を判断する。それは、メディアというパイプを通したものののだが、そのことには、ほとんど気づかない。早い話、「9条の会」が生まれた時も、中央紙は大きく取り上げることなく、全く無視した新聞もあった。

それだけではない。たとえば、「ワーキング・プア」が報道され、「問題だ」と言われる。しかし、「憲法25条の生存権」も、「憲法28条の労働基本権」も、出てこない。さまざまな問題が憲法に関わっているのに、「憲法9条」はもちろん、「憲法」を問題にすることを避け、「憲法」という言葉が、メディアから消えかねない状況もある。

そんな中で、「憲法9条がどう報道されてきたか」という問題は、本来、世界会議の主要テーマの一つでなければならぬ」と考えた。私は、「せつかくの『世界会議』だから、もつと総合的で全面的な運動にしたい」と、メディアや9条の理論的整理まで含めて、いくつかのアイディアを含めた提案もした。しかし、自分があまり動けなかったこともあって、結局、全体では問題にならず、自主企画の枠を確保、集会を開くのが、やっとだった。

### ▼「世界の中の9条」を伝えよう

集会を実施して、強く感じたのは、「一般の人たちの、メディアへの関心の高さ」だった。

「メディアはいつたいていどうなっているのか」——それは、この数年間、「改憲論」が、改めて大きな問



題として浮上して以来、多くの人びとから投げかけられてきた問いかけであり、集会に参加した人びとからも、既存のメディアと、その中で良心的に活動している記者たちへの期待が、強く感じられた。集会では、桂教授が「ことしの憲法記念日、メディアも変化してきている」と報告。李・元会長は「日本国憲法第9条は日本国民だけのものではなく、世界のものになるべきだと強く思った」「日本は朝鮮半島などを植民地にしたことについて謝罪を繰り返してきたが、憲法9条を変えるのでは、反省と謝罪が真実ではないことを示している」と述べた。

また、伊藤記者は、「座っていると力が出ない。立って話します」と立ち上がって、「カナリア諸島に憲法9条の碑がある。除幕式では、そこで、ベートーベンの第九を唱った」「コスタリカのアリアス大統領は、隣国の内戦状態に、政府とゲリラの双方に対話を説いて回り、ノーベル平和賞に輝いた。イラク戦争のときには、米国を支持したことを大学生が憲法違反で訴え、改めさせた」などと報告、拍手を浴びた。

福田政権下ですこし静かになった「改憲」問題も、麻生政権の出現で、どう動いていくかは、わからない。しかし、いったん始まった9条の精神を広めよう、という運動の流れは、決して中断されることはないし、そうした中で、常に「メディアの姿勢」は問題になるはずだ。

その意味で、闘いは終わらない。しかし、二〇〇八年五月、「平和憲法の歴史」に、小さな、しかし、大事な動きを残すことができた、と、私は思っている。

「日本は憲法9条にもっと確信を持つべきだ」——集会でこう話した李成春さんの言葉は、強く印象に残っている。もっと勇氣を持って、自信を持って、「9条の精神」を語ろう。それがメディアの仕事である。

（関東学院大学教授、「マスコミ9条の会」、「日本ジャーナリスト会議」）

# いままた浮かび上がる「靖国」の闇

9条世界会議「9条・ヤスクニ・歴史『和解』」シンポジウムから

古川 美佳

二〇〇八年五月の鮮やかな新緑は、決して「靖国」の間を覆いつくしてはくれなかった。それどころか、小泉元首相による靖国神社参拝が日本とアジア近隣諸国に厚い暗雲をもたらし、賛否両論の火花を散らせた〇六年の夏をピークに、以降、しばし影を潜めていた「靖国」の間が、いままた浮き彫りにされることになった。——「9条・ヤスクニ・歴史『和解』」のシンポジウムによってである。

このシンポジウムは、「日本国憲法9条の必要性とその意義を確認し、広げていこう」との思いを集めて、五月四〜六日、幕張メッセで開催された「9条世界会議」の自主企画の一つとして行われたものである。

「戦争のない世界」を築いていくためには、戦争の火種を除き、民衆を戦争に駆り立てるシステムを解体し、国境を超えた民衆の連帯をつくっていくことが不可欠といえる。だが「靖国」は、いまなお、戦前との連続性を断ち切れずに、天皇・国家のための戦争動員システムとして存在し、ナショナリズムと民衆間の反目を煽る歴史認識を醸成している。

その実態を「9条」の視点からあぶり出し、歴史「和解」へつなげていくには、何が必要なのか？

これに答えようと〈靖国反対共同行動・キャンドル行動実行委員会〉が、韓国・台湾・沖縄・日本の四地域によるデイスカッションの場を設けたのである。

コーディネーターの李泳采氏（イヨンサエ）（恵泉女学園大学）による「靖国打倒！」の、ユーモア混じりのかけ声で始まったシンポジウムでは、まず第一部、韓国から来日した李錫兌弁護士が、「平和憲法六〇年と過去史……治癒と和解のための前提条件」と題する基調講演を行なった。

日韓両国の間には、慰安婦問題や南京大虐殺など、事実の客観性に対する是認と否認の両極端という、深い溝がある。それでも「最悪の和解が最善の判決より良い」との法の格言を引用しつつ、過去史の痛みの治癒と和解のための前提条件を、靖国神社のありようから、ひもといていく。

「植民統治解放後も、朝鮮人約二万一千人が『戦争の神』として、A級戦犯と共に合祀されたままの、このグロテスクな神社が、日本の世論によつて支持されている事実を見ると、日本は、『平和憲法に基づき、近隣諸国と友好な関係を築いていく』と言えるのか」との疑問を呈した李氏は、過去の暗い記憶を共同の歴史として認め、「靖国」に象徴されるその深い意味を伝えることが、和解の出発点となると語った。

これを受け、第二部のパネルデイスカッションでは、辻子実氏（ノー・ハプサ・スタッフ）の司会により、まず墨面氏（モイメン）〈台湾原住民族とともに闘う会〉が、「倒錯した」日本の台湾認識を検証しながら、「高砂義勇隊」を含む二万八千人の台湾出身者が、遺族の合意もなく一方的に靖国神社に合祀されている現状を訴え、〇二年から高金素梅（チウスアヒ）らが合祀取り下げに立ち上がった、「台湾原住民と靖国合祀」の過程を紹介。「還我祖霊」と名づけられたこの闘いが、決して「反靖国」のみに集約されるもので

はなく、「台湾原住民が、奪われた歴史を取り戻し、民族の自立と解放をめざすものである」ことを強調した。

次に丹羽雅雄氏（沖縄・靖国神社合祀取消訴訟弁護団）は、沖縄戦の歴史認識が「援護法」と「靖国神社合祀」によって捏造・幻化されてきた経緯を説明しつつ、「沖縄・靖国神社合祀取消訴訟」とは、戦後責任の封印と対峙し、現代の「歴史修正主義」や「有事法体制」構築の動向と対決して、「反戦・平和」社会の実現をアジアや世界に向けて創造する、「実践訴訟」であることを力説した。

内海愛子氏（早稲田大学大学院客員教授）は、「戦争裁判と戦後補償——戦後史の中で平和を考える」と題し、アジア太平洋戦争と戦争犯罪、戦後処理の枠組み、対日平和条約と戦争賠償という側面から、なぜ戦後処理ができてこなかったのか、その構造を明らかにした。

内田雅敏弁護士は、「靖国問題」と日本の安全保障——憲法二〇条を通して憲法九条を考える」という主題のもと、二〇条（宗教の自由）によって生き延びることができた靖国神社は、「軍国的神社」と宗教の自由のジレンマにあり、それは「人間宣言」で生き延びた天皇制とパラレルであると、その欺瞞性をついた。そして「靖国神社こそA級戦犯にふさわしく、ヤスクニ・イデオロギーへの回帰を打破しなくては、真の戦後はない」と主張した。

最後に、徐勝氏（立命館大学コリアセンター長）は、「靖国問題」と東アジア平和に焦点をあて、靖国神社は、「天皇の氣に入らない人たちは入れてもらえず、嫌でも氣に入られたら入れさせられ、一度入ったら嫌でも出られない」という、「国家暴力の究極のかたち」であることを指摘。いまだに大東亜戦争を民族解放戦争として位置づけたまま、かつて帝国の臣民とした朝鮮や台湾の人びとを勝手に祀り続ける「靖国」こそ、他国への人権侵害・国権侵害を犯している、と鋭く批判し、こうした普遍的思考

の欠如した「靖国」がある限り、日本は、いつまでも自己中心的な存在として、むしろアジアの民主主義や平和の障害とならざるをえず、だからこそ、9条の視点で考え行動すべきであると説いた。

それにしてもこのシンポジウム、およびサブ企画「考えてみよう靖国問題」（日韓共同ドキュメンタリー「あんにょん・サヨナラ」より）、「出草之歌—台湾原住民の呐喊 背山一戦」（井上修監督）シネマ上映会場のいずれもが、立ち見が出るほどの盛況ぶりだったのには、当の企画者側も驚いた。もちろん「9条世界会議」全体に、全国で三万人を超える人たちが訪れたからでもある。また今春、「表現の自由」の抑圧として物議をよんだ映画「靖国」の上映中止問題が、思わぬ追い風となって作用したともいえる。いずれにせよ、ナショナリズムを増殖させる自己投影の場としての「靖国」が、否応なく人びとの意識に浮上してきたようだ。今回のシンポジウムは、見えにくい「靖国」の闇の本質を、少なからず再認識させる機会になった。

○六年八月に東京で、○七年十一月にはNYなど米国の主要三都市で展開された、「靖国反対共同行動」は、今年八月東京で、「靖国」の闇を日常の場から照らし出そうと、シンポジウムやコンサート、キャンドル行動、美術展などを準備中である。「戦争に行かない、ヤスクニにも行かない」——私たちが自身に巣くう、内なる「靖国」を自覚しながら、徹底した不服従を貫く覚悟をもって、来る八月十日の共同行動に、さらなる関心と多くの方がたの参加をお願いしたい。

（○八・〇七・二〇記）

\*ヤスクニキャンドル行動実行委員会HP <http://peace-candle.org>

\*08年8・10キャンドル行動ダイジェスト版DVD予約受付中。FAX・03・3351・9256まで

（平和の灯をヤスクニの闇へキャンドル行動実行委員）

# 憲法9条世界会議、参加者あふれる

——場外でも演説、異例の幕開け——

岩垂 弘

予想外の幕開けとなった。五月四日に千葉県幕張メッセで開幕した「9条世界会議」である。主催者の予想をはるかに上回る参加者が全国から駆けつけ、おびただしい数の人々が会場に入らず、やむなく近くの公園で主催者の弁明と一部外国代表のスピーチに耳を傾けるという異例の事態となったからだ。遠方から来たのに会議に参加できず途方に暮れる人もいたが、こうした「異常事態」は、見方によっては日本人の間で日本国憲法第9条を守ろうという人びとが増えつつあることの表れとも言えるわけで、これからの護憲運動に影響を与えそうだ。

「9条世界会議」は、ピースボート、日本国際法律家協会、GPAC（武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ）ジャパンなどが中心となった実行委員会が一年がかりで準備を進めてきた。呼びかけ人には、浅井基文（広島平和研究所所長）、池田香代子（翻訳家）、有馬頼底（臨済宗相国寺派管長、金閣寺・銀閣寺住職）、伊藤真（伊藤塾塾長）、井上ひさし（作家・劇作家）、加藤登紀子（歌手）、香山リカ（精神科医）、品川正治（経済同友会終身幹事）、辻井喬（詩人・作家）、新倉修（日本国際法律家協会会長）、水島朝穂（早稲田大学教授）、ジャン・ユンカーマン（映画監督）、湯川れい子（作詞家・

音楽評論家)、吉岡達也(ピースボート共同代表)の各氏ら各界の著名人八八人が名を連ねる。

狙いは、戦争放棄と戦力不保持をうたった日本国憲法第9条を世界に広げることにある。「9条世界会議」のプログラムには、こうある。

「世界中で紛争が絶えず、武器が次々と作られています。地球環境の変化が人々を脅かし、貧困は広がっています。そんな世界でいま人々が注目し始めているのが、日本の憲法9条です。「武力によらず平和をつくる」この9条の考え方を、いま、世界で生かしたい。戦争のない世界のために。一人ひとりが、平和に生きられる未来のために」

つまり、世界会議開催の狙いは憲法9条の世界化、国際化にあるというのだ。これまで日本で開かれてきた世界会議といえば、専ら「原水爆禁止」のためのものだった。そのうえ、これまで、日本における「9条擁護」の運動はどちらかというと内向きの傾向が強かっただけに、今回の世界会議は初めての試みといえる。

であれば、なおのこと世界会議をのぞいてみなくては。そう思った私は、この日午後一時過ぎJR京葉線海浜幕張駅で下車、会場の幕張メッセ・イベントホールへ向かった。開会是一時三〇分から。会場に着いたのは一時一五分だったが、会場前にはすでに長い長い人の列ができていた。開会時間が過ぎて、列は少しも動かない。そこで、「実行委員会」の腕章をつけた人をつかまえて質すと、「会場のキャパは七〇〇〇人。すでに八〇〇〇人が入場しており、これ以上は無理なので、ただいま入場をストップしている」とのこと。入場出来ずに待っている人の数は三〇〇〇人にのぼるといふ。それを、私の横で聞いていた中年の男性が、憤懣やるかたないといった口調で私に話しかけてきた。「そ



あふれた参加者を前にスピーチするマイレッド・C・マグワイアさん＝中央左の白いスーツ姿

りやあ困ったな。私は、きょう、北海道からやってきた。ちゃんとチケットを事前に買い、交通費や宿泊費に五、六万円もかけて。これで会場に入れないなんてあんまりだ。弱ったな」

そのうち、列の中から「いつまで待てばいいんだ」「トイレに行きたいという人がいる。どうしたらいいんだ」「病人が出たらどうする」などの声が飛び交った。

午後二時すぎ、実行委員会からマイクで「消防法の規定により、もうこれ以上入場できない。並んでいる人は近くのメッセモールに移動してほしい。そこで、実行委員会から事情説明をする」との伝達があり、約三〇〇〇人がそこへ移った。メッセモールとは、公園ふうの空き地だった。そこで、実行委員を名乗る人から「まもなく実行委員会の責任者と海外代表がきてスピーチをする」との説明があった。

待つこと約一時間。吉岡達也・実行委員会共



同代表（ピースボート共同代表）とマイレッド・C・マグワイアさん（北アイルランド、ノーベル平和賞受賞者）、コーラ・ワイズさん（米国、国際平和ビュロー元会長）が姿を現した。吉岡代表は「こんなに参加者がくるとは思わなかった。入れない人がでて申し訳ない。来年は東京ドームで開くようにしたい」と陳謝。

マグワイアさんは「皆さん、『9条』をなんとしても守らなくてはなりません。『9条』は世界にとって最も重要なものだからです。『9条』は、こう言っています。私たちは戦争をしたくない、核兵器はいらないと。私たちは、話し合うことによって和解を達成することができると。きょうは、会場から人があふれ出ています。いかに多くの人々が平和を求めているかの証左です」と述べた。そして、こう付け加えた。

「日本はアジアの多くの人々を傷つけてきた。その人たちに謝罪し、赦しを請うべきです。そうすれば、真の平和を達成することができ、朝鮮半島、中国、ロシアの人々と友人になることができます。そして、日本の人たちが『9条』を維持することができれば、世界の人々に手本を示すことができます」

ワイズさんは「世界各国の憲法が、日本国憲法の『9条』と同じような規定を持つよう働きかけましょう。皆さんが『9条』の大使となって各国の人々に働きかけてほしい。人間には、『平和』というDNAはありません。ですから、平和教育がなんとしても必要です」と訴えた。

二人のスピーチに、野外集会の参加者から割れるような拍手。最後は、全員が立ち上がり、「ウィ・シャル・オーバーカム」の合唱となった。そこには、もう会場に入れなかったことへの不満の声はなく、人々の顔には笑みさえ浮かんでいた。

（プログ・リベラル21から転載）  
（ジャーナリスト）

# 9条世界会議に行ってきました

浮田 久子

去る五月四日から六日にかけて千葉県・幕張メッセで開催された「9条世界会議」は、この国で行なわれた市民主導の平和関連国際会議として空前の成果を挙げた、画期的な出来事でした。第一日目の全体会議の詳細については他の方の報告に委ねるとして、私の印象は、まず予想もしなかったほどの参加者の大群でした。超満員のムンムンする熱気に浸りながら、何か広びろとした解放感、おおらかさ、相手を包み込む寛容な温かさみたいなもの、雑然たる中にいっぽんさわやかな道筋が見<sup>は</sup>える、——そんな気分を味わっていました。「あきらめなくてもいいよ」——自然に独り言を言っていました。

私は二日目の分科会では、シンポジウム2「アジアの中の9条——『歴史認識と米軍再編を踏まえて』」を選びました。

それはいま、あくまでも戦争に反対し、平和を望む私たち日本人が当面する、一番ホットで、厳しい問題がここで討論されると思ったからです。期待どおり、たくさん勉強させていただきました。その一端を、みなさまと分かち合うことができました、しあわせです。

ただ、あらかじめお断りしておかなければなりません、まだ主催者のほうから公式記録が出ていませんし、当日渡された資料もないので、これからお話しすることは、発言者のことばに耳を傾けな

がら一所懸命とったノートと、自分の記憶をもとにしたものです。あるいは、大事な事柄を聞き逃したり、まちがった解釈をした部分があるかもしれません。ですから、正確な意味での報告としてはなく、私の個人的な報告が感想としてお読みいただけたら、と願います。

なおこの世界会議の全容を知るうえで、たいへん重要な「戦争を廃絶するための9条世界宣言」が最終日に採択されました(93ページ参照)。ぜひお目通しをお勧めいたします。

さあ、本題に入りたいと思います。

このシンポジウムに参加した私たちにとって、たいへんしあわせだったのは、第一に、講師の方がたがすばらしかったことです。権赫泰さん(韓国/聖公会大学)も班忠義さん(中国/ノンフィクション作家・映画監督)も、日本の大学でも研鑽を積まれた、日本の事情に明るい、きっと日本人のよい友だちをたくさんもっていらっしゃるに違いない、日本語が流暢な方たちでした。それぞれの領域で、日本をよく識っておられます。

二番目に、日本の現在と近未来を、隣邦「隣の国」の人の目ではなくて、今回の世界会議で新しい意味づけがあたえられた「地域人」の目で、つまり、北東アジアというこのリージョン(地域)に住む(同胞)の一人としての立場に立って、私たちに対話をうながされた人びとであったことです。すばらしいことでした。ここで、リージョン(REGION)の意味について、学んだことを、すこし説明いたします。

「リージョン」というのは、特別、新しい考え方ではありませんが、あとになって知ったのですが、

国連のなかに、すでに「平和構築委員会」というものがあって、日本はその議長国だそうです。今回の9条世界会議とは別の機構です。が、9条世界会議は、この「リージョン」に、新しい意味づけを与えたと、私は感じました。きわめて意義深いことでした、私たち民衆レベルのものの考え方にも画期的な変化をもたらしうるものとして、ひさびさに明るい前途が開かれる思いがしました。

Think Globally, Act Locally などと、最近保守派の人たちも盛んに使っていますが、この「ローカル」を「リージョナル」に替えるのです。「ローカル」と言うときは、ある限定された場所とか地方とか狭い意味になりますが、「リージョン」と言うとき、もっと広い範囲や領域が考えられます。

今度の9条世界会議は、ジーバック (GPPAC = Global Partnership for The Prevention Of Armed Conflict) ≡ 武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ) の呼びかけで実現したのですが、これは、前・国連事務総長のコフィー・アナンさんの主唱で、国連のなかにつくられた、市民社会主導の国際的ネットワークです。このGPPACが、武力紛争予防(予防というより阻止というべきかな？これは私の意見)と、平和構築に取り組むために、まず全世界を十五のリージョンに分けて、その各地域がボトムアップ方式で「地域行動提言」を提出する。それが揃ったところで討議をして、二〇〇五年七月、ニューヨークの国連本部で開かれた、GPPAC世界会議で「世界行動提言」が採択されました。この提言のなかに、紛争予防における日本国憲法9条の重要性が明記されたそのことが、今回の9条世界会議開催の契機になったということです。

この会議に、二〇〇五年以来、国際民主法律家協会が参加していますが、これもすばらしいことに違いありません。憲法は国の最高法規ですから、法律家の厳正な判断が必要です。

平和憲法の精神が、国民の生きているさまざまな場で活かされる解釈がなされなければ、私たちの、せつかくの憲法が、空文化してしまいます。国際的な武力紛争を視野に入れて、平和構築を考える場合、当然、平和を愛好する世界の人びとが納得できる、国際的な憲法解釈が必要になるでしょう。

この分科会のコーディネーターのひとり、韓国の権赫泰さんは、歴史学者、また一橋大学での経済学博士。韓国や日本の大学で教えておられます。「はじめは、日本の憲法は日本国のもので、韓国人とは、歴史認識がまるで異なっているのだから、9条についても、突き放して考えていた。ところが世界情勢の激変、特に北東アジア情勢の流動化に伴い、日本の針路について、また戦後日本の平和理念の歴史的形成過程が研究されていくなかで、憲法9条は、日本だけのものではない。韓国にとって、アジアにとって、いまや世界の平和にとって世界史的意義を持つもの」と考えるようになった。そこで、「韓国で『平和憲法連絡会議』という市民団体、研究者、弁護士からなるグループを組織して、北東アジアにおける日本国憲法9条の意義を検証する作業を進めている」と報告されました。

つぎに、中国人の班忠義さんは、「憲法9条の意義は、十分認めるけれども、平和には平和が生きる土壌が必要。周辺地域も入れて平和の環境が整わなければ、地域で国際的な平和は考えられない。『平和のための戦』という考え方もある」と毛沢東を例に引かれたと記憶しています。

「日本は、9条で戦争放棄を謳いながら、世界有数の軍備をもち、米軍基地で武装している。この

現実が、アジア諸国に、どのように受け取られているか、日本人は、わかっていないのか。日本人は、平和をどう解釈しているのか。班さんは、「ソフトウェア」という言葉を使われたのですが、日中間の歴史認識のハードルの高さに言及されました。そのほか慰安婦にも言及されました。

「歴史認識」。この言葉が、ずっと私の上に重くのしかかっていました。私は、IPRA（国際平和研究学会）で、平和教育担当でした。特に共通の教科書づくりを目指すときに「歴史認識」は、暗礁でした。一朝一夕には解決不能と思いがちながらも、あきらめられず、「何とか漸進のヒントなり」とも、渴望していました。それが、この分科会を選んだ理由のひとつでもあったのです。

ここで、発言者の肉声（ナマの言葉）を聞いているうちに、「本当のところ、私たち日本人は、日本の侵略戦争の犠牲者が訴えてやまない言葉の意味がわかっていない、意識できていないのだ」と、身にしみてきました。

三光作戦、731部隊、慰安婦も、沖縄、大空襲、原爆、大陸からの悲惨な引き揚げ、戦死者たち、靖国神社も……。実は、この地域で起きた私たち民衆が共有する歴史ではないのか。それを、日本の私たちが「私たちも戦争の犠牲者だ」いや「実は加害者でもあった」などと言っても、そこでおしまいにして（思考停止）しまっているのでは？ もし個人的な関わりであったら、悔いることも、詫びることも、償うことも、するでしょう。でも、国がしたこと、国にさせられたことは、別のように考えるとしたら、なぜなの？ 思いやる心がない。島国根性？ その他、その他……。でも地域の人びととの間に「歴史認識」を共有できないのが、どれほど大きい平和への障害になっているか、私たち

は一刻も早く気づくべきではないでしょうか。

日本人は、平和憲法と日米安保条約の二律背反のもとで、六〇年以上生きてきて、戦後の復興を遂げてきました。その間に、まともな歴史へのまなざしをなくしてしまつたのか。せつかくの平和憲法を持ちながら、政府はむろんのことだけれども、この国の国人も、今日の日本のありように責任を負っていることを、日本もその一員である北東アジアの「同胞」は、見落とさないでしよう。

「この分科会では、日本国憲法の『光と影』について見ていく」と、スピーカーの一人が言われたけれども、いま私が言ったことは、その、「影」の部分であるに相違ありません。しかし、私たちのふだんの平和活動に、リージョナルなまなざしを心がけることで、違つた道筋が見えてくるはずです。「おなじ地域に生きている人間どうしは、否応なしに同胞なのだ」――まずそこから出発しよう。

それがGPPACの、そもそもの発想の原点、と私は考えたいと思いました。「それは無理」、「それは理想論」と腕をこまねいていたら、エスカレートする一方の武力紛争のブラックホールに、みんな吸い込まれてしまいます。

二一世紀は、その土壇場に立たされています。どこかに血路を見出さなければならぬ。国家がでないといふのであれば、私たちが、できることから始めなければならぬ。その危機感が国連事務総長さえも動かしたから、国連のなかに、GPPACという市民社会主導の国際ネットワークがつくられたのです。

つくられた以上、十分に機能しなければなりません。そこで日本の場合です。北東アジアという、

この地域で、私たち日本人は、相当厳しい自己批判が要求されるのを覚悟しなければなりません。そのうえで、はじめてこの地域に、平和構築への本格的な取り組みが始まるのではないでしょうか。

さらに、世界が、日本国憲法9条に真剣に目を向け始めたこの時点で、仮にも、日本の政府に、改憲を許してしまうことになつたら、私たちは、平和のために献身している世界中の無数の同志たちに、どれほどの失望を与えることになるか。GPPACも、「計り知れないダメージを受ける」ことになりましょう。「私たちの責任の重さは、強調しすぎることはないほど重い」と言っているのです。

権さん、班さんのほかのパネラーの発言は、次のようなものでした。

台湾から来られた陳瑤華さん（台湾／東呉大学）は、哲学者として、「日本の憲法は、東洋伝統の思想や哲学と通底するものがあるから、この地域で平和を構想するとき、憲法9条の果たす役割は大きい」と言われました。

アメリカからのガーソンさん（アメリカカンフレンズ奉仕委員会）は、「米国政府の日米安保条約と、日本の憲法改定との関わり」について、また、「米国本土における非暴力反戦運動」について述べられました。

フィリピンから参加のミクラットさん（国際対話イニシアティブ）は、フィリピンが、ヨーロッパ、アメリカ、また日本から侵略された歴史を踏まえ、彼らの称える「民主主義や独立」と、「現実」との違い、傀儡政権下の苦い経験から、「リージョンのなかでの人権の保障」「憲法9条の理念に立つ国際的な平和のメカニズム」「国家間のモニタリングシステム」をつくることを提唱されました。また、憲法9条については、「その存在について、周辺諸国にも、もっと知らせるべきだ」と言われました。



最後のスピーカーは、高里鈴代さん（沖縄／基地・軍隊を許さない行動する女たちの会）でした。「三六年前に沖縄の日本復帰が決まったとき、なによりも、平和憲法のもとに入るのが嬉しかった」と、まず、言われました。ところが沖縄では、本土復帰後も、日本国憲法が保障する非武装、主権在民、基本的人権、平和的生存権、そして、環境にいたるまで、どれひとつ保障されていません。ことに、アメリカの世界戦略が、米軍の再編成に明らかなように、沖縄は、その戦略の要となつてゐる。沖縄から見れば、「憲法9条など、日本の為政者の眼中にないに等しい」ことが、よくわかる。日米安保条約がある限り、米軍の駐留が続く限り、日本は不安定の度を深める世界に、さらにもう一つの危険地帯を自ら提供している。「在日米軍の基地の七五％は、米軍の一部がグアムに移転しても沖縄にあることを、本土の人びとは知るべきだ」と言われました。

シンポジウムの終わりに、ドイツから来られたもう一人のコーディネーター、リスクテンさん（ドイツ／ロンドン大学バークベックカレッジ日本学科プログラムディレクター）が、つぎの趣旨の発言でこの分科会を締め括られました。「西ドイツは一九五〇年代に、ドイツ基本法を改定して軍隊を持つに至ったが、以後もますます暗転する二一世紀の今後をデザインするに至って、非戦の9条を明記する日本国憲法の存在とその有為性が、グローバルに人びとの関心と呼び覚ますに至っている」と。私たちの平和憲法は、このような現実を抱えながら、とにかく存続していることを、忘れてはならないのです。

当面する厳しい状況のなかで、普通の市民である私たちは、何をしたらいいのでしょうか。つい無力感に襲われそうですが、落ち着いて辺りを見回せば、できることは、意外に多くあります。

国内、国外を問わず、民衆どうしの交流をあらゆる機会に逃さないこと。いま現在でも、私たちの身のまわりで、地域的な交流は、さまざまに行なわれています。憲法前文の第二節は、地域内の民衆の手で実行に移されています。私たちにとって、憲法はたんなる理想論ではなく、達成できる具体的な目標なのです。今回の9条世界会議が出した「戦争を廃絶するための9条世界宣言」に、「一九九〇年代から、地球規模の市民社会が、草の根レベルで国境を越えて団結し、人類の将来の決定に参加するようになってきた」と、いくつもの実例をあげて記されています。どこにいても、スポーツでも、音楽でも、映画・演劇でも、国境を越えて楽しむことが、できているではありませんか。

内にも外にも、とにかく交流。内にこもる閉鎖的な島国根性を、自分の中から、たたき出すことです。そういう過程で、自分を真の地球人（国際人）として鍛えていく。それが私たちの、平和への一つの確実な道程になります。

最後に、地域人どうしのあいだには、どうしても、解かなければならない宿題があります。それは、今までと違った物差しと秤を考え出さなければならないということです。地域みんなが納得できるようなものをつくるのは、たいへんなことでしょう。でも、私たちの先祖は、太古の昔から時代を貫いて、そういうものをつくる知恵の持ち主でした。それを思い返しましょう。先祖たちにできて私たちにできないはずは、ないのです。

私は、権さんや班さんの話されたことを思い浮かべながら、「いつかまた、このような機会が与えられたら、そんなお話も伺ってみたいな」と思いながら、会場を後にしました。

（神奈川県・藤沢市〈平和の白いリボン行動・藤沢〉）

# 9条世界会議に参加して

松本和美

五月四日に千葉の幕張メッセで開催された9条世界会議全体会に参加してきました。一万人を超える人たちが、幕張メッセのイベントホールに集まりました。

私は藤沢の「9条の会」の人たちといっしょに参加し、私たちは、開場時刻の、ちょうど十二時半に到着しました。入場が始まったところでしたが、入場する人の長蛇の列を見て、たくさんの人が集まって来ていることに感動しました。ピースウォークに参加したとき、広島から歩き続けている人の中に若い人がいることに感動したのですが、世界会議にも、若い人たちがたくさん来ていました。その日は三千人もの人が、会場に入りきれず、会場前の広場にあふれていたそうです。

「武力で平和はつくれない」「世界の平和のためにも、日本の憲法9条を守らないといけない」というのが、9条世界会議に参加した人たちみんなの思いでした。

第一部の「世界の希望としての9条」で基調講演をしてくださった北アイルランドのマイレッド・コリガン・マグワイアさんと、アメリカの平和活動家コーラ・ワイスさんのお話は、とても感動的でした。おふたりは、中に入れない人たちのために、外でもお話をしてくださったそうです。

一九七六年にノーベル平和賞を受賞したマイレッド・コリガン・マグワイアさんは、「北アイルラ

ンド紛争を、武力によらないで解決に導いた中心になった方」だそうで、戦争に限らず、あらゆる暴力を憎み、「日本は、広島、長崎のことを忘れてはいけない。日本が平和憲法をないがしろにすることは、被爆者に対する侮辱である」と言われたことが、とても印象的でした。「アメリカ政府が、いつの日か原爆を投下したことを謝罪することを願っている」とも言われました。

コーラ・ワイスさんは、ベトナム反戦運動以来のアメリカの平和活動家で、「日本の憲法9条を守るお手伝いになりました」と、最初に言われたときには、驚き、感動しました。

コーラ・ワイスさんは一九一〇年にノーベル平和賞を受賞した「国際平和アピール」の元会長で、コーラ・ワイスさんが会長であった一九九九年に開かれた「ハーグ平和アピール国際市民会議」では、いっさいの戦争を放棄した日本の憲法9条が高く評価され、そのとき確認された「公正な世界秩序のための十の原則」の第一項が、「各国議会は、日本の憲法9条のような戦争を禁止する法律をつくるべきだ」となっているのです。

コーラ・ワイスさんは、コスタリカの憲法についても触れられました。

コスタリカには、「空軍は鳥に任せればいい。陸軍はアリに、海軍は魚に任せればいい」という言葉があるそうです。コスタリカがアメリカのイラク戦争を支持することを表明したとき、コスタリカのひとりの青年が、「イラク戦争を支持することは、コスタリカの憲法に違反している」と主張したのだそうです。彼の主張で、コスタリカは、イラク戦争支持をやめたということです。「ひとりの青年が国の方向を変えた」と、コーラ・ワイスさんは話されました。ワイスさんは、「みんな、平和大使になりましょう。世界の国の国会議長にメールを出して、日本の憲法9条のような法律をつくらう

と働きかけましょう」と、会場に呼びかけました。

そして、「インターネットの [www \(world wide web\)](http://www.worldwideweb.org) を、これから「world without war 戦争のない世界」と読みましょう」と、呼びかけたときも、大きな拍手が起きました。

「憲法9条を守ろうという意志をはっきり示さないといけない」という発言は、第二部「戦争のない世界を創る」でも聞かれました。第二部のゲストトークやトークセッションでは、たくさんの方の参加がありました。

アン・ライトさんが、「何も言わないことは「YES、OKと言っている」と同じである」と言われたのが、とても印象的でした。アン・ライトさんは、アメリカの元陸軍大佐で、外交官も勤めた方ですが、ブッシュ大統領がイラク戦争を始めたとき、そのことに抗議して、公式に外交官を辞任されたそうです。

コスタリカから来られた代表の方は、「9条を守るためには、みんなひとりひとりの支援が必要である」と、また韓国の弁護士で人権活動家である李錫兌<sup>イソクテ</sup>さんは、「9条を捻じ曲げようとする動きには、反対の声をあげるべきだ」と発言されました。

「憲法9条がいかにすばらしいか」ということは、ベアテ・シロタ・ゴードンさんのお話で、改めて伝わってきました。日本国憲法の起草に関わったベアテ・シロタ・ゴードンさんは、流暢な日本語で、「日本国憲法は、世界の憲法を参考にしてつくられ、アメリカの憲法よりすばらしい。決して押し付けではない」と、力強く発言されました。

そして、二部のトークセッションで司会をした高遠菜穂子さんが、二部の最後に「イラクで人質になった三人を救ってくれたのは憲法9条だったと思う」と言われた時は、会場のすべての人が感動したと思います。

日本からは、一部で池田香代子さん、弁護士の土屋公献さんが発言され、二部のトークセッションでは、雨宮処凛さんが出演されました。

池田香代子さんは、エクアドルの国会が「外国軍基地や外国軍の駐留を認めない」とする憲法条項を可決したことを話されました。「問題の解決手段は二つしかない。戦争をはじめとする暴力か、話し合いか。民主主義は戦争を否定して、初めて本ものになることを、いまいちど銘記しなければならぬ」と言われました。

弁護士の土屋公献さんは、「同じ9条の採用を、各国にも呼びかけたい」と訴えられ、雨宮処凛さんは、「この格差社会の貧困が戦争に繋がる」と発言されました。

このほかにもイラク戦争に参加した後、良心的兵役拒否者になったアメリカの青年や、イラクで人道支援をされている方の発言も心を打ち、この会議で発言されたの方からも、平和を願う強い思いが伝わってきて、「憲法9条を守ることが日本だけの問題ではなく、アジアの平和、世界の平和のためであること」「世界は9条を選び始めたこと」を実感しました。

また第一部では、会場に来ている「GPPAC」という、アナン前国連事務局長の呼びかけで始ま

った、市民社会主動の國際的な紛争予防と平和構築のための國際的ネットワークの団体や、世界的な人権侵害や平和の課題に積極的に取り組む十五か国の弁護士の方たちが紹介されました。

そして、9条ピースウォークで広島から歩いてきた方たちを、みんなで拍手で迎えることができた時は、少しだけでしたが、私もいっしょに歩けた喜びをあらためて感じました。

たくさんの方たちの参加に感動したのですが、今回、若い人たちの参加も目につきました。特に第3部のライブでは、たくさんの方々がいたのです。

FUNKIST(ファンキスト)というロックグループが出てきたときには、大きな歓声があがり、またFUNKISTのボーカルの人が、「みんな立とうよ」と言ったときには、われわれは困ってしまったのですが、若い人たちは、「待ってました」とばかりに、すぐに立ち上がり、舞台近くに集まって、手を振って、叫び始めたのです。「9条の会」の集まりに、こんなにたくさんの方々の若い人たちが来ていることに、私は感動したのですが、後でインターネットのブログなどを見てみたら、四日は「9条の会」などということとは、全然、頭になく、「大好きなFUNKISTが出るので来た」と書いている若者がいたのです。

それを読んで、一瞬、失望し、あのたくさんの方々の他の若者たちも、そうだったのかと思うと、目の前が真っ暗になりましたが、読み進んでいくと、「来たときは9条なんて知らなかったのに、参加してみて、平和というものの大切さがわかった」と書いてありました。

訪れた動機はなんであれ、帰るときには9条を知り、平和を考えるようになってくれたことは、若者にとっても、「9条世界会議」は、とても有意義だったことを知りました。

「若者が9条や平和に関心を持ってくれない」と嘆くことが多いのですが、若者をひきつけるには、最初から9条を語るだけではなく、同じ場所にいられる機会をつくることも、必要なのではないかと思います。

そのブログを書いた若者は、「FUNKISTの演奏の時、日ごろは立たないだろうおじさん、おばさんたちも立って、演奏に合わせて手を叩いているのを見て、感動した」と書いてありました。

第三部のライブ演奏では、出演したUA（ウーア）さんも、FUNKISTの人たちも、原田真二さんも、もちろん加藤登紀子さんも、みんな平和への熱いメッセージを伝え、歌っていました。

第3部のライブ演奏最後の加藤登紀子さんの歌が終わった後、第2部のパフォーマンスで歌や踊りを披露した出演者たちも登場して、みんなでジョン・レノンの「イメージ」を歌って、その日の全体会が終わりました。時計は十時半になっていました。イメージは、開場にいる人たちとの合唱になって、感動的でした。

「本当に戦争のない世界になったらどんなにいいか。世界中のみんな！ 想像してみよう」と、心から思いながら歌いました。

FUNKISTの演奏のときに熱狂していた若者たちもそこにいたのだ、と思うと、感慨深いものがあります。

またこの日は、プロの方の演奏のほかに第1部の最後に、市民が歌う「ねがい」と、市民と弁護士の方たちの合唱によるベートーベンの第九の第四楽章の演奏がありました。弁護士の方たちは、この



日のために一生懸命練習されたそうです。

「ねがい」は、広島の中学生の有志が作った歌で、四番まであるのですが、いろんな国の言葉に翻訳されていて、この日も合唱のほかに四人の方が、それぞれの国の言葉で歌われました。

ナターシャ・グジーさんは、ロシア語で歌っていました。

「あなたの言葉で五番の詞をー」という呼びかけで、世界中で五番の詞がどんどん作られて、現在、一三〇〇以上の五番ができていますという歌なのです。

私も、できれば五番を作ってみたいと思っていますが、この歌を、ひとりでも多くの人に広めたいと思っています。

今回は、私は参加できる地域に住んでいて、幸運だったのですが、千葉から遠く離れた地方に住んでいる人たちに、この話をしたら、「参加しなかった」と言っていました。これからもまた、こういう会議が催され、今度は、九条を守る運動がまだ活発でない地方で開かれることを願っています。

「9条世界会議」に参加して、世界中の平和を愛する人たちが、日本の憲法9条に注目していることに気づかされました。また若者たちに「9条」の大切さを伝えるには、言葉だけでは足りなくて、共に感動し、心を通い合わせる場所を持つことも必要なのだ、と思いました。

今回、世界の人たちと手をつないでいることを実感でき、そして若者たちといっしょにいる時間をもてたことはすばらしく、「9条世界会議」の意義は、とても大きかった」と思います。

（藤沢市在住「平和を考える風の会」代表）

# 命を大事にしあえる世界に

## — 9条世界会議に参加して —

春田 朋子

「世界を動かしているもの」とは、何でしょうか。

「世界は、権力を持った者の思惑で動いている」と思われがちです。そのため市民は、国を動かす政治家や官僚の横暴に対して、怒りの声をあげるのでしょうか。

しかし、なぜ彼らがあんなにも特権意識をもち、自分を省みることもせず、傲慢にふるまうのか。その基本姿勢は、多くの市井の人びとの共通した価値観によって、支えられているのではないのでしょうか。つまり、「その地位そのものが、羨望の的になっている」ということ。残念ながら日本の社会では、実態を自分の目で確かめるよりもブランドが重視され、「メジャーなものは良い」と、安直に判断する傾向があると思います。

結局のところ、改憲派が憲法9条を変える理由として主張する「軍隊を出動して、普通の先進国並みに国際貢献できる国になるべき」という、いわゆる「普通の国論」も、つまりは「みんなが良いと言うものは、良い。みんなが正しいと言ふことは、正しい」という価値観から導きだされたものではないでしょうか。グローバル・スタンダードに弱いのです。

そこを逆手にとって始められたムーブメントが、「国際平和交流NGOピースポート」と日本国際

法律家協会の運営による「グローバル9条キャンペーン」であり、その流れを受けて開催された「9条世界会議」だと思っています。

この「9条世界会議」は、一年ほど前からグッズ販売などを通して盛んにPRが行われていましたが、どれほどの規模で実施されるものなのか、私には、皆目、見当が付きませんでした。

しかし、当日、幕張メッセに足を運んで、初めてこの会議の規模の大きさに驚きました。

会場に入ると、一万二〇〇〇人収容の幕張イベントホールは、アリーナから三階席まで、ほぼ埋め尽くされていました。またその広さもさることながら、舞台装置や照明も、私がふだんよく参加する護憲派の集会のそれとは、格調の高さが全く違っていました。後から聞いた話によると、三〇〇〇人ものが、会場の中に、入れなかったというのです。

海外の著名な平和活動家による基調講演では、「9条」の精神を賛美する言葉が述べられるたび、会場から割れんばかりの拍手が送られ、実行委員会の吉岡達也共同代表からも「歴史的な瞬間」という言葉があり、会場全体が、「9条」を持つ国の一員としての誇りと喜び」に満たされているように、感じました。

私は、「本格的に「9条」を変える動き」があるのに気づいてから、まだ四年弱ですが、去年の安倍政権の時には、本当に危機感を覚えて、憲法の条文を載せたリーフレットを作って配ったり、「憲法9条を変える・変えない」を街頭で問う「シール投票」の開催に携わったり、自分にできる活動をしてきました。だから、この会議の会場にいて、自分たちの努力が報われた気になり、感動の涙を、いく筋も流しました。

そんななか、元日弁連会長の土屋公猷氏から、「コスタリカの憲法は、はっきりと戦争を否定しているわけではないが、『9条』と同じ行動をとっている。一方で日本は、『9条』があるにもかかわらず、自衛隊という立派な軍隊をもっている。そのような現状で『9条』を世界に広めようとは、一見おこがましいのではないか」という発言があり、目が覚める思いがしました。そして「この矛盾した状況を打破し、堂々と世界に呼びかけていきましょう」という言葉に、会場からは、またも大きな拍手が沸き起こりました。

また、この会議では、これまでいわゆる「護憲運動」とは別の活動をしてきた人たちも、壇上から「9条」の大切さを訴えました。

その一人が、二〇〇四年に、支援のために入ったイラクで、レジスタンスの人びとに拘束された、高遠菜穂子さんです。

私が護憲の運動に関わるようになったのは、高遠さんたちに対する世間のバッシングを目の当たりにしたのがきっかけでした。

湾岸戦争以降、政府与党内には国際貢献を名目に、「9条」を変えようとする動きがあるのをうすうす知っていましたが、母と父の介護に追われ、世界で行なわれている戦争や、国内の政治的な動きに関心を払うゆとりをなくしていました。

二〇〇四年というのは、子どもの頃からなんとなく折り合いが悪く、理解しがたかった父の、痴呆の症状が進み、介護に専念していた時期でした。

ずっと独身で子どももない私は、人の心にとことん寄り添ったことがなかったので、父に対し、

何度キレたかわかりません。でも、「私が穏やかに父の意を汲む努力をすることによって、父も穏やかになり、それが返ってくることで私もキレなくて済む。結局、それが子どもとしての責任を全うできる唯一の方法なのだ」と思い至った時期でもありました。そう思い至ったことで、それまでの、人を裁いてばかりいた考えが消え、人の中にある、どの命も、崇高で愛しいものに思えてしかたがなくなってきたのでした。

そのような「命に対する愛と尊敬」という視点を身につけて以降、最も強く「間違っている」と感じたのが、あのイラク人質事件のときの人びとの反応でした。

憶測もからめて、あらゆる非難の言葉を彼らに浴びせた上に、「助からなくても仕方がない」とは、「神でもないのに、命に対してなんて傲慢な態度をとるのだろう」と、ショックを受けました。そして、今の日本の社会に、改めて危機感を覚え、高遠さんたちを支援する集会に通ううちに、護憲派の人たちとも、知り合いになったのでした。

高遠さんは、「私がイラクで人質になったのは、日本が『9条』を突破してイラクに自衛隊を派遣したから。しかし、無事に帰ってこられたのは、丸腰であったこと。犯人と対話できたこと。また、これまでイラクを支援してきたこと。——つまり『9条』の理念を実践してきたことで、犯人は、首もとに突きつけた刃物を退けてくれた。『9条』に命を救われた」と話しました。

重い苦難を通して語られた高遠さんの言葉は、生きた言葉です。高遠さんは、あの事件以降、しばらくのブランクはあったものの、ずっとイラク支援を続け、現地の友人から得た情報を基に、定期的に報告会も行なっています。その報告は、凄惨な映像を示しながらも全く感情を排し、淡々と行なわれます。そして、自身がレジスタンスに拘束されたときの状況や感想などは、いつさい語りません。

今回、その高遠さんが、あの時のことを語ってくれたことに、感動しました。

でも、そのことばの意味は、「日本に憲法9条が存在したから命が救われた」という、呪文のようなことではないと思います。「9条」の理念、すなわち日本国憲法の理念とは、「誰の命をも大事にするということ」だと思ふのです。

これまでの高遠さんの活動は、その著書を読むかぎり、護憲を意識してのものではありませんでしたが、憲法の理念のままに、関わりをもつ一人ひとりの命を慈しみ、大事にしてきました。

でも、今の日本の社会はどうでしょうか。人の命が大事にされているでしょうか。あのイラクでの事件にしても、彼らの安否を気遣う前に、政府の首脳も、テレビのコメンテーターも、彼らを非難し、それに乗じた一般市民の彼らに対するバッシングは、すさまじいものでした。

「憲法9条」は危機的な状況にあるのですから、「世界では評価されているのですよ」というアピールも、わかります。メジャーに弱い日本国民の性質を逆手に取る工夫も、大事だと思えます。でも、もっと大事なものは、私たち一人ひとりが「生きている自由と喜びを分かち合える社会を創ること」ではないでしょうか。

実態を伴わない「9条」を世界に広めようとは、やはりおこがましいのかもしれませんが。

まずは私たちが日本国憲法の理念どおりに行動し、互いに命ある存在として尊敬し、信頼し合い、「武器を必要としないですむ社会」のモデルを世界に示す必要があると思います。

(憲法サークル)

# 9条と世界

鈴木 彩

「9条世界会議」の存在を知り、「平和な現在の日本で、平和を訴える運動がどんなものであるのか」という好奇心だけで、何もわからぬまま、私は東京に向かった。五月四日の幕張で見たのは、平和や、「9条」に対するさまざまな思いを胸にした、予想をはるかに上回る、多くの人びとであった。

そこでは、改憲等の、「9条」の未来に対するさまざまな不安も混じりながらも、集まった人びとの、平和への熱い思いが、溢れていた。規模の大きさ、ゲストの顔ぶれ、どれを見ても驚くばかりで、「9条」について深く考え、アピールしようとする人が、世界中にこれほどいるのか、と、目を見張った。会場で感じたのは、「9条」のもつ可能性と平和への希望」であった。平和という、あまりにも漠然とし、遠い存在であるかのように思われる目標に対しては、個々人は、あまりに小さな存在に思われるかもしれない。が、その個人が、一つの場所に集まることで、さまざまな思いを互いに確認しあい、平和に対する思いを確固たるものにする事ができ、希望が見えたように思う。ごく普通の、一般市民が、平和への思いを持ち、なんらかの行動をすることで、世界を変えていく計り知れない力になっていくであろう。「それぞれができることをやる」という単純なことで、どんなに世界が変わるだろうか。

戦争がもたらす悲劇を知りながら、なぜ人間が戦争をなくすことができないのか。私の、小さいころからの疑問だった。しかし、私にとつての戦争は「テレビの中の戦争」「新聞の中の戦争」であつて、現実の戦争を肌身を感じることはない。それは、私が、日本人として生まれ、日本国憲法の第

9条が存在することによって、戦争から日本人が守られてきたからである。同時に、空気のように当たり前に存在するために、「9条」というものの価値を深く考えたことも、なかったように思う。それは私のなかで、「何か絶対的で、普遍的なもの」であるかのように、感じていた。

しかし、それは間違っている。「9条」は、「守る力がなくなれば簡単に変えられる」ものである。それゆえに、存在することに安心することなく、「9条」の存在する意味を常に考え、議論し、守らねばならない。また、「9条」は、日本人だけのものにしておくべきでもない。現実には、戦争はまだ続き、平和を感じられない人びとが存在する限り、平和を感じることもできるわれわれが、平和のための大きな一歩となる「9条」を世界に広げることは、使命のようにも感じる。戦争のない日本で生きているわれわれができることは、過去からの遺産を、ただ守るだけでなく、広げていくことなのだ、「9条世界会議」に参加することで強く感じた。

最後になったが、若い世代のわれわれは、おそらく世間を感じる以上に無知である。しかし、グローバル化が進むなか、世界の出来事に対してそれほど無関心でもいられないのだ。「平和のために、学びたい、行動を起こしたい」と思っている者も多くいる。そういう者たちのために、「9条」や平和について触れる機会」が多くあれば、と思う。

教育の場に、もっと踏み込むことはできないだろうか。そして、われわれに、平和のためのエネルギーを吹き込み、大きくさせるきっかけが増えたらうれしい。そしてそこから、われわれがしっかりと受けとめ、考え、行動していかねばならない。平和を求めて行動する一般市民が、いつの日か、世界中、世界中にあふれ、自分たちができることを少しずつでも行動していくとき、「戦争がなくなるという夢」は、「たしかな現実」になるだろう。

(名古屋大学 四年)



# 「世界」会議だから出会えた！

保坂 治男

二日目の五月五日、ぼくは、パネル討論2／軍隊のない世界へ——戦争に協力しない人、地域、国家——に出た。

林宰成さん（韓国）は、見るからに優男やされとという感じだった。

紹介パンフレットには、「良心的兵役拒否者」「兵役を拒否し十六か月間投獄される」とあった。兵役拒否を実際にやった人。十六か月の獄中生活までも……。

日ごろ、「戦争に協力しない」と言っているぼくが、林さんと同じようなことができるだろうか？ ぼくは、林さんを見つめながら、水上勉の作品に出て来る「醤油を吞んで兵隊検査に落ちようとする青年」や、同じような方法をとって、骸骨のような姿で検査に出た小田切英雄・奥田靖雄といった戦中派・先輩の話を、次つぎと思い返しながら、林さんの口もとに見入った。

「わたしの行為を、だれも悲しませずにやった——と言えばウソになります。日本の皆さんが、かつてはそうだったように、いま韓国では、兵役は国民の義務です。それを拒否すれば、十六か月の投獄です。」

『そんな子にお前を育てた覚えはない』と言って、母は何日も泣きました。わたしも、つらくて泣きました」

会場から林さんに出された質問は、愛国心についてだった。

「単純な価値観で決めるものではないと思います。国家の価値観だけから強制される愛国心ではなく、国家を超え、国境を越えて、人間としての価値観で考える愛国心。わたしの心に育つ文化・芸術への価値観で考える愛国心。そうした総合的な価値観から、自分の人生をかける決定的な愛国心を決めたいです」

そして、林さんが国際会議場で告げたこと。

「軍隊・戦争のない世界へ向かって、韓国の青年たちが いま発言している事実は、『憲兵隊が来て、十六か月投獄されるのを覚悟の上で、良心的兵役拒否をする青年が 一万三千人になっている』ということです」

「9条世界会議」は、9条を深く、広く、考える、世界のひと、日本のひと、眼と眼で見合い、眼と眼で誓い合う、直接の対話集会なのだ。

こういう会議は、毎年あっていいな、と思った。

(神奈川・(藤沢9条の会))

# 「9条世界会議」を終えて、考える

古川 博資

「9条世界会議」が日本で開催されることには、ワクワクしたものだっただ。

二〇〇八年五月の第一週ほど、私にとって濃密な日々は、なかった。

五月の一日から八日まで、「9条世界会議」のロシア代表のホームステイを引き受けたことによるものだ。この代表は、ロシア語しかわからない。私はロシア語が話せない。このとき、我が家に、日本語を学ぶために来日していたロシアからの短期留學生が滞在していたから、引き受けることができた。夜半から朝食までは彼女の通訳があるが、日中は、そうはいかない。私が同行しなければならなかったときがあった。

五月二日がそうである。日中は深大寺を案内し、神代植物園を二人で歩いた。このときはナンジャモンジャの木が満開で、藤と牡丹が満開だった。彼女はフォトカメラマンだった。花にカメラを向けている日本人とか、親子づれが被写体となった。こんなとき、私が声かけ役を果たす。言語が違っていても、会話ができていた。二日の夕刻からは、我が家の「蔵」(かつては米蔵だったものを移築してイベント空間にしている)で、通訳付きで会食会を開催した。二〇人が集まった。

日本ユーラシア協会がロシアの代表として声かけしたことに、「平和基金」という平和団体が応えたことにより、ウラジオストクの口日友好協会のリュドミラ・コノブリヨワさんが派遣された。彼女は、生い立ちの中で母親から「日本はもはや他国を攻めてはこない国となった」と聞いていた。大

きくなって、それが「第9条」であることを知った。沿海州では社会団体が円卓会議を開いて、日本の「第9条」を、マスメディアで広く知らせることにしているという。今回のために「9条をテーマとする大学人の会」が開催された。彼女はその取材を担当して、その写真を見せてくれた。ウラジオストックと新潟県・島根県とは、生け花・茶・折り紙などでも交流がある。彼女は、今回初めて東京へきたが、このあと島根で「写真展」を開催するという。日本で「大学人」が「9条」の会議をしたことがあるだろうか？ まだまだ日本では「9条」と聞くと「イデオロギー」と返してくる人が多い。「世界は9条を選び始めた」ことは実感できた。

三日の憲法集会は、今年、「生かそう憲法―輝け9条―」となっていた。昨年までの「9条を守れ―」からは進化してきている。しかし「9条世界会議」のポスターが、商店街では数軒しか貼ってもらえなかった。街の壁に貼ったこのポスターが、軒並み剝がされもした。幕張では、このポスターをほとんど見かけない。「9条世界会議」の波動を街中に伝えたいと思ったのは、私ばかりではなかったはずだ。四日の当日になって、入場者全員にカタログと一緒にこのポスターが配られていたのには、啞然とした。ノーベル平和受賞者が来ます。ハーグ平和アピール代表が来ます。世界的なミュージシャンも来ます。――これは「ライブ」と同じ感覚だったのか。

第一日目の四日は、イベントホールに一万二〇〇〇人が超満員となった。予想もつかないことである。外では三〇〇〇人がチケットを持って並んでいる。入れない。ブース会場もイベントホールから離れていたから、関係者でもメイン会場には入ることができなかった。オーロラビジョンの手配とかし、外の人たちに配信することが必要だった。元日本弁護士連合会会長の土屋公献さんが、「日本は戦力放棄・交戦権放棄の第9条を憲法で持ちながら軍隊があるのは世界でただ一つであること」を指

摘しつつ、その日本が「9条を世界へ」というのは「おこがましい」ではないか、と言われたように聞こえた。この時、私の胸にストンと落ちた。

私は憲法サークルが二〇〇七年に開発した「前文あつての9条」(B4判六折り手形サイズ、英文付き)リーフを、四日と五日の両日にかけて一〇〇〇部を配布した。海外へ日本国憲法前文を発信したことになる。「政府の行為によって、再び戦争の惨禍が起こることがないようにすることを決意し」「陸海空軍その他の戦力を保持しない、国の交戦権はこれを認めない」

「9条の会」の催しには、若者の姿が少なくと言われてきた。しかし「9条世界会議」は違っていた。ワクワクする波動がある。特に感動したのは、広島を春分の日に出発し、幕張メッセまで一二〇〇キロを七日かけて歩き通したピースウォークの青年たちがあつたことです。青年の中には職を捨てて参加していた人もありました。沿道の炊き出し・宿舎提供などの支援を受けながら「9条」を考え、学んできたと言っていました。新しいうねりを感じます。誰もが憲法にたどりつくと思いました。

二〇〇八年四月一七日の「自衛隊イラク派兵差止訴訟の名古屋高裁判決」は、五月二日に確定しました。三〇〇人以上の原告たちが「イラクの子どもたちが殺されている。私たちは加害者の立場を強いられたくない」と心の底から訴えてきました。そのことが、「イラクにおける空自の空輸活動は武力行使と一体のもの。第九条一項に違反する」「平和的生存権は、あらゆる基本的人権の基底をなすもので、具体的な権利である」という判決を引き出しました。憲法前文の解釈に新しい息吹が吹き込まれた。「9条」は、世界の「希望」であり「指針」であることが確認されたと思います。

一人ひとりが「人間の尊厳」をかけて、「9条」のある国で、しなければならぬこと、自分できめることを、語り合うことから始めたい。

世界は、9条をえらび始めた。



# 人間存在の度しがたさと9条

成瀬 政博

ぼくら人間は、とても素晴らしい存在ではあるけれど、とてもとても度しがたい存在でもあります。こんなこと、あらためていうのもおかしいけれど。

度しがたいというのは、おなじ過ちを、なんどもなんどもくりかえす、ということですね。戦争と  
いうのはそのいちばんの見本です。

第一次世界大戦で一千万人の死者をだした国際社会は、大いに反省したものです。その数があまりにも多かったわけですから。そこで「戦争は違法だ」という考えがひろがり——それまでは、戦争は違法ではなかった——、不戦条約が批准され（日本でも）、国際連盟が結成されました。このことは、人類史において画期的なことではありません。

でも、ふたたび世界大戦が勃発して、こんどは五千万人の死者。そしてまた国際社会は反省して、あらためて国際連合をつくりました。ここでの憲章は、戦争は違法であることを前提に、いかなる武力による威嚇、武力行使をも禁止しました。それは先の不戦条約があったものの、自衛という名目で各国が戦争へ突入していった経緯を踏まえてのことでした。

けれども大戦後から今日まで、三千万の人びとがいくたの戦争で殺されています。この度しがたさ、いったいぜんたい、どこからやってきたのでしょうか。

むかし見たスタンリー・キューブリック監督の『二〇〇一年宇宙の旅』の冒頭のシーンを思い出します。

ぼくらの祖先であった猿の時代、猿たちが闘っています。二つの群れが、素手で。ところがふと、一匹の猿が、落ちていたマンモスかなんかの骨を棍棒にして闘うと、その群れの猿たちみんなも、同じようにして闘います。そして素手の群れに勝つわけですが、このとき、リーダー格の猿が、勝利の雄叫びとともに、骨の棍棒を空にほうり投げるのです。すると、その骨は、くるくると回転しながら、どんだんどんだん、空高く舞い上がってゆくのですね。そして、骨は、ついに宇宙空間にまで舞い上がって、なんと、宇宙船になってしまふんです。息をのむような、忘れがたい映画の始まりです。

ここでほかとを考えてしまうのは、道具を使ったことによって猿が人間になったという、人間の起源のお話です。すなわち、ぼくらの祖先が、いっとう最初に手にした道具とは、なんだったんだろう、という問いです。この映画がえがいたように、それは骨の棍棒で、最初の道具は武器であったのかもしれない、ということです。かりにそうではなくても、武器の使用は、人類の起源にあっただろうと想像されることです。すなわち、宇宙船までつくりだすことのできた人間の、始まりの始まりの道具のうちに、人間の素晴らしさと度しがたさが同居していた、ということですね。なんともはや、根深いことです。

9条を現実化し、世界にひろげようという、ぼくらの思いと運動とは、こんなにも人間存在の根源にかかわることです。いわば、人間存在の半分を押さえ込むことです。

ギリシャ・ローマ時代から言われつづけてきた格言——平和を欲すれば戦争にそなえよ——（今日の抑止論ですね）、これを延々と墨守してきた人間史の変更を求める運動です。

平和を欲すれば武器を捨てよ——という格言を、人と社会の中に根を生やすことができる運動です。そしてまた、国家というものの実体が、官僚機構と軍隊という二つの柱だとすれば、その柱の一本を失くそうではないか、という運動でもあります。マルクスさえもびつくらこくような、国家の変容を求めるラジカルな運動でも、あるわけですから。

この、人間存在と、人類史の根元的課題が、いま、世界の人びとの中にひろがりつつあるということ、そんな歴史のポイントにぼくらは立っているということ。深く深く考えたいですね。

【週刊新潮】表紙絵画家・「9条世界会議」のイメージキャラクターを制作



# イラク支援ボランテニア

高遠 菜穂子

イラク戦争が始まってまもなく、私は緊急支援目的でイラクに行く決意をした。

アメリカのアフガニスタン報復攻撃から始まって一年以上も、戦地に入るかどうかを思い悩み続けた果ての、並なみならぬ覚悟をして、初めての「戦地イラク」に赴くわけだが、私が準備としていちばん時間をかけたのは、自分の中の「怒り」を取り除くことだった。過去に、「怒り」は「怒り」を呼ぶことを、痛いほど経験していたからだ。

ついに「怒り」を減して現地入りしたのだが、戦地に渦巻く強烈な破壊と「怒り」の波動は、一気に私に襲いかかった。入国の数日後に、何者かに発砲された。それは、路上爆弾、車両爆破が炎の煽りを受けるほどの距離で起きた。事態が悪化していくイラクの中で、自分の中に、再び戦争に対する「怒り」が蓄積していくのを感じていた。

調査に訪れた「イラクの自由作戦」という名の「殺人現場」には、身体が震えるほどの怒りを覚え、犠牲者の姿は、胸が痛くなるほど悲しかった。増え続ける路上生活の少年たちは、お行儀のいい子なんて一人もいなかったし、毎日のように刃傷沙汰が繰り広げられていた。報復モードの元イラク軍兵士とは、毎日のように激しい議論を交わしていた。

そんなイラクで、ふと、「平和だ」と感じる時があった。薬物に溺れ、殴りかかってくる少年たちを叱り飛ばして、まっすぐに愛情を伝えられるのが、うれしかった。「報復は権利だ」と訴えていた

元兵士が、一緒に緊急支援を届けてくれたことが、うれしかった。支援を届けた元兵士と、それを受け取った住民が、ひととき笑顔を交わした光景が、平和だった。

あの頃、私は、「まっすぐに人びとを愛せていたんだ」と思う。日本でも素直に感情を表現できていたし、イラクのことを日本で発言することに恐怖を感じるなんて、一度もなかった。二〇〇四年、四回目のイラク入国で起きた「あの事件」までは。

あれ以来、ここ数年の私は、「戦争」に翻弄されっぱなしだった。私たちを拉致した人たちを突き動かした、途方もなく大きな「怒り」。その怒りは、戦争がもたらした理不尽極まりない殺人から来ている。そして、日本での激しいバッシングで、私は完全に「殺された」。このダブルショックに、心は完全崩壊し、あれだけ愛していた「人間」に、憎悪を感じ、疑い深くなってしまった。私の、この苦しみを真に理解し受け止めてくれるのは、「イラク」しかない、とさえ思っていた。傷ついたイラク人や、傷ついたアメリカ兵としか心を通わすことができないかもしれない、とも思っていた。「世界平和」を考えるとむなしくなり、切なくなり、激しい怒りと同時に絶望を感じてしまっていた。

私にとってイラク報告会は「葬式」だった。どんなに罵詈雑言を浴びせられようが、私には、「死者の無念を、生きている者に伝えなければ」という思いが何よりも強かった。それが、生かされた私の責任だったからだ。三年間は、がむしゃらに突き進んだ。お世話になった方がたは数え切れないほどおり、感謝の気持ちは言い尽くせない。だが、正直に言うと、私には、誰の顔も見えていなかった。日本社会が怖かったのだ。自分の気持ちを日本人に向かって表現するなんて、恐怖でしかなかった。恐怖は、いつしか憎しみに変わっていった。その矛先は、私たちを誘拐したイラク人と、イラク

の苦しみを理解しようとしないう日本人に向けられていった。自らの内に沸き上がる憎悪に、私は戸惑った。人間を憎んでしまうというのは、私にとっては最も避けたいことだった。

今年五月に開かれた「9条世界会議」で、拘束事件について自分の見解をストリートに語ったことは、私にとって大きなチャレンジだった。事前に開かれた記者会見に臨むのも、超満員の幕張メッセで「9条」を語ることも、私にとっては、日本社会と向き合う最初のステップで、大いに勇気のいることであつた。勇気を出して日本社会と向き合わなければ、私は、これから、日本に恐怖を感じたまま、乗り越えられずに精神安定剤をのみ続けることになってしまうだろう。拘束事件そのものを体験したイラクと向き合つて事件の恐怖を乗り越えてきたように、今度は、日本と向き合わなければならぬのだと、やつと思えるようになったのだつた。

二〇〇四年四月、私はイラクでスパイ容疑をかけられ、拘束された。「なぜ自衛隊をイラクに送つたのか？」と、重武装した武装勢力に責められ続けた。米軍の包囲攻撃で怒りと憎悪が一気に高まつていたのだらう。彼らは、「イラク侵攻を支持し、アメリカの軍事作戦をサポートする日本」に対して強い不信感を持っていた。私たちは、殺されるかもしれない。しかし、なぜ殺されなかったのか？ 私たちを拘束したのは、地元のグループで、米軍に肉親を殺害された遺族から成つていた。彼らは、日本が「9条」を飛び越えて自衛隊をイラクに派遣し、米軍の軍事サポートすることに怒つていて、私は必死で自分のイラクでの活動を説明した。英語を話したことでスパイ容疑がますます強まったが、バグダッドのストリートチルドレンから教わつたイラク訛りのアラビア語を駆使して、「敵ではない」ことを伝えた。私が、その町、ファールージャが、それまで米軍から受けてきた酷い仕打ちを熟知して

いること、ファルージャ総合病院に何度も医療支援を届けていたことを、詳しく説明したとき、彼らは私の話を耳を傾け始めた。「ファルージャ総合病院の医者に、私のことを確認してくれ」と懇願すると、通訳をしていた人が暗い表情で「米軍に包囲されていて近づけない……」と言った。

そして今、事件から四年後の「9条世界会議」で、私はこの事件のことを、こう語った。

「9条」の精神（戦争放棄、武力行使をしない、戦力の不保持）で人道支援をイラクで実行していたから、殺されなかったのだと。私は「憲法9条」に命を守られたのだと。

私たちの事件後、国際NGO、国連関係者、ジャーナリスト、民間人などが、次つぎに誘拐され、自衛のために武装していた人たちは、多くが殺害された。解放された人たちは、ほとんどが丸腰であった。

どこの国も「テロ対策」で厳重な警戒がされている。もはや、国際社会全体が戦場のような雰囲気になりつつある。「テロ」が起きる場所は、イラクやアフガニスタンだけではない。アメリカでも、イギリスでも、スペインでも、実際に起きた。日本は何度も警告を受けている。いつでもどこでも、「日本人ということ」で拘束殺害される可能性もある、ということだ。私は、防衛の観点からも、「9条」の重要性を強調したい。

戦場において、完全無欠の安全管理など、ありえない。最も高い確率で命を守るのは、「丸腰」以外にない。戦場で武器を持つということは、殺す確率と同時に、殺される確率が一気に高まるのだ。国際社会全体が「テロの現場Ⅱ、戦場」となりうるならば、「9条」は、私たちを守ってくれるはずだ。「怒り」から始まる殺し合いに打ち克てるのは、「誠実な丸腰」しかない。

戦争に疲れた人に「9条」を。憎しみの連鎖に「9条」を。大切な人に「9条」を――

（08・6・7記）

# ドイツで広がる「9条」の輪

木戸衛一

## はじめに

よく知られているように、日本とドイツは、いわゆる後発資本主義国、国家主導の工業化と軍国主義化、ファシズムの選択、第二次大戦での無条件降伏、戦後の急速な経済復興と、似たような近現代史を歩んできた。ところが、今日の国際社会に占める両国の立ち位置は、およそ対照的と言わざるをえない。要するに、各国が日独に寄せる信頼には、雲泥の差があるのである。

そもそも日本は、ドイツと異なり、侵略戦争によって多大の被害をもたらした近隣諸国との和解を達成していない。地域統合に取り組む姿勢も、お世辞にも積極的とは言えない。さらに、「帝国」米  
国への態度は、イラク戦争が明瞭に示したとおり、この上なく追従的だ。

このように考えると、日本の政治社会は、ドイツに比べ、何のとりえもないかのようだ。だが実は、「憲法9条」こそ、彼の国にとっても十分アクチュアリティをもった、私たちの政治的資源なのである。

## 「反ミリタリズム・コンセンサス」の崩壊

昨夏亡くなった作家の小田実氏は、事あるごとに、「殺し、焼き、奪う」歴史のあとに、「殺され、  
焼かれ、奪われる」歴史を持ち、徹底的な敗戦に際して一方的な殺戮と破壊を被ったことから、日独  
市民が、戦争そのものを否定するという相似た平和意識を有していると指摘していた。<sup>①</sup>

その法的な結晶が、戦争放棄・戦力不保持・交戦権否認の日本国憲法第9条であり、良心的兵役拒否を認めたドイツ基本法第四条三項というわけである。ついでに言くと、基本法第二六条は、「侵略戦争の準備の禁止」を規定している。

ところが、一九九九年三月のコソヴォ空爆で、ドイツは、民族虐殺と戦争の惨劇を阻止するためには、たとえ国連による権能付与がなくても、軍事的手段を投入してもよいという立場をとってしまった。ナチス時代の経験から導き出した二つの教訓のうち、「アウシュヴィッツを繰り返すな」が、強調され、「戦争を繰り返すな」は、実に色あせてしまった。一九九〇年の「ドイツ統一」時の国際的な誓約は、「ドイツの地から再び戦争を引き起こさない」だったのであるが。

しかも、第二次大戦後初の戦闘参加に踏み切ったのは、よりによって、平和運動となじみの深い社会民主党と緑の党の「赤緑連合政権」であった。当時のシュトルック国防相（社会民主党）は、「ドイツの安全は、ヒンドウークシでも守られている」とか「連邦軍が介入する可能性のある地域は、全世界だ」などと発言、二〇〇三年五月の「防衛政策指針」も、「国防は、もはや地理的に限定されない」と明記した。今や、海外派兵の根拠は「人道」から「国益」に移りつつあり、「連邦は、防衛のために軍隊を設置する」（基本法第八七a条）との憲法規範もまた、明らかに形骸化している。

今年九月末現在、ドイツは、約六三〇〇人の将兵を国外に派遣している。その半数以上の三三二〇人は、ISAF（国際治安支援部隊）の一員としてアフガニスタンに駐留している。イラク同様アフガン情勢も泥沼化しているが、ドイツは、NATOの要請に応え、昨年四月一五日、トルネード偵察機を送り、北部の復興支援に限っていた活動を、戦闘の激化する南部にまで拡大するに至った。

ISAFの任務で死亡したドイツ兵は、今年八月二十七日、北部クンドゥズ付近でパトロール中にタ

リバンの攻撃を受けて死亡した一名を含め、合計二八名にのぼる。こうした情勢を反映して、連邦軍に志願する若者の数は前年に比べ六割減、将校クラスも一割が民間への転職を果たしたという。また連邦軍兵士が、カブール近郊の集団墓地から出た頭蓋骨をもてあそんだり（二〇〇六年一月二五日に発覚）、「テロリスト」と誤認して、女性一名、子ども二名を殺害する（今年八月二九日、国防省発表）などの事件も、相次いでいる。

それにもかかわらず、連邦政府は、連邦軍のアフガン駐留延長、三五〇〇人から四五〇〇人への増派を企てている。それどころか、連邦軍は、「対テロ戦争」の一環として、今年五月、自衛隊・オランダ軍・イスラエル軍とともに、沖繩の米軍北部訓練場を視察、同訓練場で、ジャングル戦闘訓練の実施を検討しているありさまである。

ドイツにおける「反ミリタリズム・コンセンサス」の崩壊は、格差拡大と貧困の深刻化と連動している。④かなり前から、連邦軍は、とりわけ旧東独地域で「失業者の軍隊」と化したと指摘されていた。二〇〇〇年、東独の兵役義務者の一九・八%だった失業者の割合は、〇四年には二九%、〇六年には三五%に及んだとされる。二〇〇五年にいわゆる「ハルツIV」が導入され、長期失業者への給付が生活保護並みに引き下げられて以降、この傾向は全独的になった。就職を斡旋する各地の雇用局が連邦軍と提携する一方、軍自体もホームページでキャリア制度を盛んに宣伝している。

ドイツは今なお徴兵制（二〇〇二年一月からは九か月間）を堅持しているが、将来的に連邦軍は、介入の緊急度に応じて、介入部隊（三万五〇〇〇）・安定化部隊（七万）・支援部隊（一四万七五〇〇）に再編され、より高度な専門性が求められようとしている。その意味では、今日の状況は、格差を拡大し、貧困層を否応なく軍隊に送り込む、米国流の「経済的徴兵制」への移行過程と見ることもできよう。

①たとえば、小田実『随論 日本人の精神』（筑摩書房、二〇〇四年）六八―一三〇頁。

②民間人についても、たとえば昨年三月八日、「世界飢餓援助」のドイツ人男性が射殺される事件が起こった。

③拙稿「ドイツで進む貧困化と軍事化」『歴史評論』第六八五号（二〇〇七年五月）参照。

## 「武器なしに平和をつくる」の想起

冷戦時代、東西両陣営の最前線に位置する両独国家は、核戦争の危機に直接さらされていた。欧州がヒロシマと化す「オイロシマ」の恐怖は、国境を挟んで幅広い民衆に共有されていた。

ちょうど三〇年前の一九七八年、東西ドイツの平和運動は、「武器なしに平和をつくる」のスローガンを掲げた。特に、「平和と社会主義」を標榜する東独では、抑圧的な政治体制に抗して、「平和と人権」を求める草の根の平和運動が活発化、「剣を鋤に」（旧約聖書ミカ書4・3）のワッペンも、かなり流布した。「武器なしに平和をつくる」は、まさに「9条」の精神と相通ずる。つまり、たとえば文言自体は知られていなくとも、日本国憲法第9条には、ドイツで広範な共感を得られる素地があるのである。

実際そのことは、昨年六月、「G8対抗サミット」の場で体験できた。ハイリゲンダムでの主要国首脳会議（G8サミット）の向こうを張り、六月五日から七日まで、ハンザ都市ロストックで、「G8対抗サミット」が開かれ、一〇のパネル・ディスカッションと、「地球的公正」「環境・気候・エネルギー」「移民と人種主義」など二二〇以上のワークショップが組織された。私は欧州議会「欧州統一左翼／北欧緑左派」議員団主催のワークショップに参加、日本の軍事化の問題を論じるとともに、「9条世界会議」の宣伝をしたのであった。

そこで、「武器なしに平和をつくる」を引き合いに出すと、多くのドイツ人聴衆が、「9条」に強い



関心と共感を寄せてくれた。それはたんなるノスタルジーではなく、「9・11」以降の暴力の連鎖が、「武器なしに平和をつくる」ことのアクチュアリティを呼び覚ましているからである。

④拙稿「G8対抗サミット」に参加して「ヒューマンライツ」第二三三号（二〇〇七年八月）参照。

## ドイツにおける「9条の会」

昨年一〇月一日、ベルリン・クロイツベルクのある料理店で、「ベルリン・9条の会」が立ち上げられた。同じ頃、ドイツ南西部バーデン・ヴュルテンベルク州の大学町テュービンゲンでも、同種の会が発足した。

ベルリンのグループは、故・小田実氏が西ベルリン滞在中の一九八七年に創設した「日独平和フォーラム」のメンバーで、二〇〇一年から沖縄の歴史と現状に関する巡回パネル展を組織した年配の市民が中心となっている。実際に幕張での「9条世界会議」に参加した者も含まれ、その報告は、ドイツ平和評議会の機関誌「ボックス・レポート」に近々掲載される予定である。

いずれの「9条の会」も、日本の平和活動家との交わりや、憲法関連の講演会を行なっているが、特にベルリンでは、「映画 日本国憲法」（ジャン・ユンカーマン監督）のドイツ語版の作製に取り組んでいる。また、多数の米軍基地を抱える国情を反映して、来年のNATO設立六〇周年に向け、反基地運動などドイツ内外の平和運動に、改めて「9条」の存在意義を知らせる活動も、展開しようとしている。

他方、テュービンゲンのグループは、日本学を学ぶ学生と、同地のNGO「軍事化情報局」の会員によって運営されており、平均年齢はベルリンよりも、当然はるかに若い。ベルリンとテュービンゲンの連携は、お互いにとって有意義になると思われる。また、ドイツの他の地域（たとえば、一六四

八年、ウエストファリア条約が市庁舎の階段で布告されたことから「平和都市」を標榜するオスナブリュックなど）でも「9条の会」づくりが模索されている。

ドイツの市民、とりわけ若い世代に「9条」を知ってもらうには、「9条世界会議」のドイツ語版リーフレットとともに、『憲法9条新鮮感覚——日本・ドイツ学生対話』（花伝社、二〇〇八年）も大いに活用できる。「9条の会」の呼びかけ人である評論家・加藤周一氏が、「学生⇨老人の連帯」の可能性を求めて発案し、日独九人ずつの学生による9条エッセイをまとめたこの本は、編者イゾルデ・浅井さんのご尽力により、日本語、ドイツ語、どちらでも読むことができる<sup>⑤</sup>。花伝社編集委員のご厚意で、私はすでにベルリン、テュービンゲン、ハレなど九都市の、主として大学図書館に寄贈したが、今後その数を増やしていくつもりである。

⑤ドイツ語のタイトルを直訳すると、『未来への唯一理性的な道 ドイツと日本の学生対話における日本の平和憲法』となる。

## 結びに代えて

日本国内では、憲法9条の問題が、男女平等の二四条や生存権の二五条の問題と、密接に関係することが意識されつつある。世界的に見ても、新自由主義のグローバル化は、最も豊かな一%が、個人総資産の四〇%を占める一方、下位五〇%が全体の一%の資産を分け合うまでに不正を推し進め、昨年の軍事費総額を、前年より実質六%増の一兆三〇〇億ドルを上回るところまで押し上げた。

カネと暴力で世界を意のままにしようとする米国中心の大国主義的な国際政治のありようを根本的に改める意味でも、国連の「旧敵国」たる日本とドイツの市民が、平和的手段による平和を真摯に訴えることは、世界史的な意義すらあると思う。

（大阪大学大学院 国際公共政策研究科 教員）

## 戦争を廃絶するための9条世界宣言

2008年5月4～6日 9条世界会議

日本国憲法9条は、戦争を放棄し、国際紛争解決の手段として武力による威嚇や武力の行使をしないことを定めるとともに、軍隊や戦力の保持を禁止している。このような9条は、単なる日本だけの法規ではない。それは、国際平和とメカニズムとして機能し、世界の平和を保つために他の国々にも取り入れることができるものである。9条世界会議は、戦争の廃絶をめざして、9条を人類の共有財産として支持する国際運動をつくりあげ、武力によらない平和を地球規模で呼びかける。

人類は、戦争のない世界に向けてたえず努力してきた。歴史の中で、土着の伝統や偉大な人物たち——とりわけ女性たちは戦争に積極的に反対してきた——は、たえず人類を平和へと導こうとしてきた。

二十世紀の近代戦争でもたらされた犠牲は、この流れをさらに前に進めた。一九二八年のケロッグ・ブリアン不戦条約は、国策の手段としての戦争を明確に放棄した。一九四五年の国連憲章は、明確に定義された異常事態の場合を除いては「武力による威嚇または武力の行使を慎まなければならない」ことを加盟国に義務づけた。

日本によるアジア太平洋への侵略戦争と広島・長崎への原爆投下の後に一九四七年に施行された日本国憲法9条は、武力の行使を認めるいかなる例外もたないという点において、世界平和のための国際規範の発展におけるさらなる

一步前進である。この日本の動きに続いて、コスタリカは一九四九年、軍隊や自衛隊をもたなくても国家は平和的に存在できるという例を世界に示した。

9条の精神はまさに、すべての戦争が非合法化されることを求めている。そして、すべての人々が恐怖や欠乏から解放され平和のうちに生きる固有の権利を有することを世界に投げかけている。

## 今日の世界における9条

しかし今日の世界は、武力紛争、大規模な貧困、格差の拡大、武器の拡散、地球規模の気候変動に覆われている。アメリカによる全面的な「テロとの戦い」は、戦争をもたらし、国連の役割を台無しにし、地球規模の軍備競争を復活させ、世界中で拷問を助長し、人権をむしばんでいる。

さらに、紛争が民間人——とりわけ女性、子ども、高齢者たち——に与える影響に対する関心が高まっているにもかかわらず、戦争において殺され傷つき避難を余儀なくされる民間人の割合は、空前の高さに達している。

このような絶望的な状況は、イラクにおける戦争と占領にはつきりと示されている。平和や民主主義が武力によってもたらされないことは、もはや明らかである。こうした世界的な流れのなかで、9条の原則を保持し、地球規模の平和と安定のための国際メカニズムとして強化することが、かつてないほどに重要になっている。

それにもかかわらず日本は、憲法9条の義務を果たしていない。さらに、9条の存在自体がいま脅かされている。今日の日本の自衛隊は世界最大規模の軍隊の一つであり、アメリカは日本中に軍事基地をもっている。日米軍事協力がますます強化されるなか、日本の現実には憲法9条の精神からの乖離をいっそう深めている。

日本によるアメリカへの全面的軍事支援を可能にさせるために憲法を改定しようという動きは、日本国内、アジア近隣地域そして国際社会で不安をかきたてている。そればかりでなく、日本は近隣諸国への戦争責任を果たしておらず、和解はいまだになされていない。東北アジアには、不安定な冷戦構造がいまだに残されている。

## 9条と地球市民社会

歴史的には、国家のみが国際関係の主体であると考えられてきた。しかし、市民の運動が重要な役割を果たしてきたこともまた事実である。一九九〇年代より、地球規模の市民社会が、草の根レベルで国境をこえて団結し、人類の将来の決定に参加するようになってきた。そして、平和、人権、民主主義、ジェンダーおよび人種の平等、環境保護、文化的多様性といった課題について、主要な役割を果たすようになってきた。

一九九七年の対地雷禁止オタワ条約、一九九九年の「ハーグ平和アピール」国際市民会議、二〇〇二年の国際刑事裁判所の設立、二〇〇三年のイラク戦争に対する空前の世界的反戦運動といった例はいずれも、地球市民社会が変革の主体としての力を明確に示したものであった。さらに今、クラスター爆弾の禁止や小型武器の管理を求める運動、核兵器の非合法化を求める運動、また地球規模の平和と経済的・社会的正義を求める運動が広がっている。いまこそ地球市民社会は、9条の条項とその精神に着目し、その主要な原則を強化し、地球規模の平和のためにそのメカニズムを生かしていこう。

## 9条の約束を実現する

9条の主要な原則を国際レベルで実行するためには、大国から小国まですべての国々は、暴力紛争の発生を予防する責任を果たし、いかなる状況下でも武力による威嚇や武力の行使を放棄しなければならない。そして安全保障というものを、人間の観点またジェンダー・パランスの視点から見直す必要がある。

貧困と不平等が紛争の根源的要因となっていることは、古くより知られるところである。現在のグローバリゼーションは、南北の格差をさらに深刻にしている。こうしたなかで各国政府は、国連ミレニアム開発目標の達成を第一歩

として、すべての人々にとつての持続的繁栄と社会正義を築くために資源を使わなければならない。

日本の9条は、国家の平和的存在を可能にし、人間の発展のための革新的な資金メカニズムを創ろうとする努力を後押しするものである。それは、軍備を規制し世界の資源の軍事費への転用を最小化すると定めた国連憲章26条を補完している。

9条の精神は、小型武器、地雷、クラスター兵器、核兵器、生物・化学兵器などを含むあらゆる軍備の拡大および拡散や、軍事産業の活動を否定する。それはさらに、安全保障政策における核兵器への依存を拒否し、核兵器の非法化と廃絶を求めている。

潘基文国連事務総長が再確認したとおり、世界的に軍事費を削減し限られた資源を持続可能な開発に振り向けることは、地球規模で人間の安全保障を促進し、軍事活動による環境への悪影響を軽減することにつながる。

持続可能な開発に関する世界サミットおよび国連委員会は、各国政府および企業に対して、地球の気候、水、森林、生物多様性、食糧、エネルギー供給を保全するよう求めている。同時に、気候変動は紛争の発生、悪化、助長をもたらす危険があり、気候変動の過度の影響から地球を守ることに投資することが重要である。

二〇〇五年七月、「武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ（GPPAC）」の世界提言は「日本国憲法9条はアジア太平洋地域全体の集団的安全保障の土台になってきた」と指摘した。すなわち9条が、この地域の安定に重要な貢献をしており、包括的かつ持続的な平和の構築のために大きな潜在力をもっていることを認知したのである。世界の他の地域においては、欧州連合、アフリカ連合、東南アジア諸国連合といった形で、平和のための地域メカニズムがつくられている。東北アジアにおいては、9条が、地域の平和的統合の土台になりうる。

私たちは、平和で持続可能な世界をつくることができる。しかしそれは、すべての国が真の多国間主義に参加し、国連をはじめとする国際的誓約を尊重してはじめて可能になる。9条を実行し、他の国々もまた9条をもつようになるためには、国際システムの改革が同時並行的に必要である。さらに市民社会は、暴力に対する平和的オルタナティブをつくり出し、地元、国内、地域、世界の各層におけるネットワークを通じて平和を構築する力をもっている。軍

事主義を止め将来の戦争を予防するために、市民社会の力を發揮していいこうではないか。

これらの目標を達成するために、9条世界会議に参加した私たちは、以下の通り提言する。

私たちは、すべての政府に以下のことを求めます。

1. 国連憲章、ミレニアム開発目標、国際人権法、核不拡散条約をはじめとする軍縮条約など、すべての国際的誓約を実行すること。
2. あらゆる人権を促進し擁護しつつ、平和のうちに生きる固有の権利を認め公式化すること。平和のうちに生きる権利なしには、他の人権も実現しえない。また、人権侵害に対する責任および補償メカニズムを強化すること。
3. 平和的手段による紛争予防、平和構築、人間の安全保障のための取り組みを支持し、資金を投入すること。
4. 軍事費を削減し、それらの資金を、保健、教育、持続可能な社会開発に振り向けること。
5. 平和省を設置すること。また、教育担当省庁が平和教育をすべての教育段階において体系化および必修化すること。それには、学校のカリキュラム、教師の研修、教材資料の作成などが含まれる。
6. 平和をつくる主体として女性が果たす重要な役割を認識するとともに、国連安保理決議1325を実行して、あらゆる意思決定と政策策定の場に女性の完全かつ積極的な参加を相当数保証すること。
7. 良心的兵役拒否の権利を認めるとともに、軍隊による犯罪に対する責任および司法システムを強化すること。それには、侵略の罪を国際刑事裁判所に訴追する可能性も含まれる。
8. 包括的で効果的な武器貿易条約を成立させること。また、大量破壊兵器から小型武器まで、あらゆる兵器の検証可能で不可逆的な軍縮をすすめる第一歩として、非武装地帯を設置すること。
9. 一九九六年の国際司法裁判所の勧告的意見、および、二〇〇〇年の核不拡散条約再検討会議最終文書における「明

「確な約束」にしたがって、すべての核兵器を廃絶するための誠実な交渉を即時に開始し、妥結すること。

10. 核兵器を早期、普遍的かつ検証可能な形で廃絶するための段階的措置として、非核兵器地帯の設置をすすめること。

11. 地球規模の気候変動に対処するとともに、戦争と軍事のもたらす環境への負の影響を転換すること。持続可能な地球を守りクリーンで安全なエネルギーのための技術を進捗し共有するような「国際持続可能エネルギー機関」の設立に向けて投資すること。

12. 平和と安全を維持するための多国間の民主的機関としてもっとも相応しい国連をさらに民主的に改革するために、拒否権を廃止し、総会の役割を再活性化すること。

13. 日本の憲法9条やコストリカ憲法12条のような平和条項を憲法に盛り込むことなどを通じて、戦争および、国際紛争解決のための武力による威嚇と武力の行使を放棄すること。

私たちは、日本政府が以下のことに取り組むことを奨励します。

1. 日本国憲法9条の精神を、世界に共有される遺産として尊重し、保護し、さらに活性化しつつ、国際平和メカニズムとしての潜在力を実行に移すこと。
2. 軍事化の道を歩まず、東北アジアにおける不安定な平和を危機に陥れるような行動をとらないこと。
3. 世界各地における持続可能な開発のための人間の安全保障に注力するとともに、ミレニアム開発目標の達成という経済大国としての責任を果たすことによって、国際社会で主導的な役割を果たすこと。

私たち市民社会は、以下のことに取り組むことを誓約します。



1. 9条の主要な原則の維持・拡大を地球規模で促進していくことに真剣に取り組み、平和の文化を普及していくこと。
2. 政治的、市民的、経済的、文化的なあらゆる人権の普遍性と不可分性を認め、あらゆる人権が実現するための必須条件として、平和のうちに生きる権利を公式に認めるよう求めること。
3. 平和、人権、人道援助、軍縮、環境、持続可能な開発といった異なるセクター間の協力を強めることで能力を高め、効果的なネットワークを築くこと。地元、地域、世界レベルでの市民社会の参加をより拡大するために、政府、国家機関、国際機関との定期的な連絡チャンネルを設置すること。
4. 南アフリカの真実和解委員会の経験に学びつつ、過去から学び、紛争予防としての和解の取り組みをすすめること。
5. 人々が、調停、合意形成、非暴力的社会変革といった平和創造の技術をすべてのレベルにおいて身につけることができるよう、公的および民間の平和教育システムを支持すること。
6. 不公平を生み環境を破壊し紛争を助長するようなグローバル経済の力の集中に対抗して、平和、開発、環境に投資し、公正で非軍事的な経済をつくり出すこと。
7. 兵器の生産と貿易に反対してこれらを監視し、企業の社会的責任の責任規範のなかに平和を位置づけるよう呼びかけること。
8. 以上の提言、および、「二世紀の平和と正義のためのハーグ・アジェンダ」(一九九九年)、GPAPACの世界および地域提言(二〇〇五年)、「バンクーバー平和アピール」(二〇〇六年)、「暴力のない世界に向けたノーベル平和賞憲章」(二〇〇七年)などのさまざまな平和文書に盛り込まれた提言を、実行に移すこと。
9. 9条世界会議の成果を発展させつつ、「戦争廃絶のためのグローバル9条キャンペーン」によるフォローアップ・メカニズムを創設すること。

# 核不拡散条約（NPT）再検討会議準備委員会に対する

## 9条世界会議の声明

日本国憲法9条は、広島・長崎への原爆投下がもたらしたすさまじい破壊と人間の激しい苦痛の上に生まれた。

両都市に対する核攻撃の後に、日本は、戦争および国際紛争解決の手段としての武力による威嚇や武力の行使を放棄するとともに、軍隊およびその他の戦力の保持を禁止したのである。それゆえに、憲法9条の精神は、「ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ、ノーモア・ウオー」というヒバクシャたちの訴えと重なるものである。そしてそれは、核兵器に依存した安全保障政策を拒否し、すべての核兵器が非合法化され廃絶されることを求めている。

しかしながら今日、国際的な議論は核廃絶よりも核不拡散を優先し、実質的な軍縮は何ら進められていない。そればかりでなく核保有国は、核不拡散条約（NPT）第六条の下での軍縮義務を果たしておらず、核兵器の近代化と新型の核兵器および運搬手段を開発している。NPT加盟の核保有国は、核兵器廃絶条約への交渉をただちに開始し、核軍縮と核兵器廃絶のプロセスを再生させなければならない。

以下に署名した9条世界会議の参加者および支持者たちは、核兵器の非合法性と非道徳性をあらためて強調するとともに、五月三日に年次総会を開催したNGOネットワーク「アポリシヤン2000」への強い支持と連帯を表明しつつ、ジュネーブで開催されている二〇一〇年NPT再検討会議第二回準備委員会にあたり、以下の通り提言する。

私たちは、すべての政府に対して以下のことを求める。

1. 核による威嚇と核戦争の準備から脱し、不安定な安全保障環境をNPT上の義務を履行しないことの口実にするのをやめて、核兵器に依存しない国際安全保障を積極的に作り上げるために行動すること。
2. 一九七〇年のNPT上の義務、および「厳格かつ効果的な国際管理の下ですべての側面における核軍縮につながる交渉を誠実に言い完結させる義務がある」とした一九九六年の国際司法裁判所の勧告的意見を尊重すること。そして、二〇〇〇年NPT再検討会議最終文書に盛り込まれた十三項目の実際の措置およびそのなかの「明確な約束」を実行に移すこと。
3. 市民社会によって起草され国連に提出された「モデル核兵器禁止条約」を土台として活用し、すべての核兵器の完全廃絶につながる条約の交渉を二〇一〇年までに完了させること。
4. 膨大な軍事費の口実になっている核兵器の研究、設計、開発、製造およびミサイル防衛計画を即時にやめ、それらの資源を、核時代の毒性遺産の除去や、保健、教育、持続可能な社会に充てるとともに、国家的・地球的安全保障を達成し維持するための非軍事的メカニズムの開発に注ぐこと。
5. ミサイル禁止条約および宇宙兵器の禁止のための即時交渉開始を支持すること。
6. 非核兵器地帯の設置をとりわけ中東と東北アジアにおいて促進すること。非核兵器地帯の設置は、早期、普遍的かつ検証可能な核兵器の廃絶への一歩であり、また、核危機を回避し対話と平和解決を促す土台となる。
7. 平和教育・軍縮教育を促進し、ヒパクシャの訴えと苦難の経験を現在と将来の世代へと継承させていくこと。
8. ウラン採掘を禁止し、核拡散の危険を回避し原子力発電のもたらす環境や健康への悪影響を避けるため、原子力の代替エネルギーを促進するために、国際再生可能エネルギー機関（IRENA）を設置することを支持すること。
9. 全面的かつ完全な軍縮の一歩としての核兵器廃絶に向けた世論喚起や政策提言において市民社会が果たす重要な役割を是認すること。そして、NGOを財政支援し、あらゆる多国間の核軍縮会議におけるNGOの参画を拡大するように働きかけること。

## G8に対する9条世界会議声明

グローバリ化がすすむ世界の中で、人類が直面する課題はかつてないほどに相互関連を深めています。環境の課題や、ミレニアム開発目標の達成をはじめとする開発の課題、そして「対テロ戦争」や核不拡散を含む政治的課題は、もはや切り離して取り組むことはできなくなっています。それだけでなく、こうした課題は、平和なくしては前進することができません。

大国たるG8諸国は、暴力の連鎖を断ち切るとともに、人権を尊重し人間の安全を満たすような、すべての人にとって平和で、非暴力的で、ジェンダー・バランスのとれた公正で持続可能な世界を築くために、多国間協力のなかで率先して取り組んでいかなければなりません。この目的を達成するために、軍縮を実行し、開発のための革新的資金メカニズムをつくり出さなければなりません。

この問題に関し国連は、毎年の総会決議において、国際社会に対し「拡大し続ける先進国・途上国間の格差を縮小することをめざしつつ、軍縮と軍備制限の実行によって得られる資源の一部を経済・社会の開発に振り向けること」を求めています。決議はまた、各国政府に対して「軍縮、人道、開発の活動をさらに統合する努力をすること」を奨励しています。9条世界会議は、軍縮と開発の関係に関するこのような重要な議論を発展させようとする国連の努力を支持します。

G8諸国は世界の軍事費の七〇パーセントを支出しています。このような主要軍事費支出国として、G8諸国は、軍事費を大胆に削減するとともに、その資源を平和、開発、環境保護のために転換しなければなりません。

\* \* \*

以下に署名した9条世界会議の参加者・支持者たちは、日本国憲法9条を国際平和メカニズムとして活用することをうたった「9条世界宣言」の提言を想起しつつ、G8サミットが日本の北海道・洞爺湖で七月に開催されるにあた

り、G8諸国が以下の事項について検討するよう求めます。

## 平和

平和的手段による紛争予防、平和構築、人間の安全保障の取り組みを支持し、平和のうちに生きる基本的人権を広め実現すること。

## 「対テロ戦争」

アメリカが主導する全面的な「対テロ戦争」は、恐怖と抑圧を生み、憎悪と暴力を世界中で助長しています。このような「対テロ戦争」を終わらせ、テロリズムの根源となっている要因について、人権を尊重し国際法を活用しつつ、国際協力によって対処すること。

## 核兵器廃絶と軍縮

核兵器廃絶に向けた核不拡散・軍縮のための多国間の取り組みを強化すること。同時に、G8諸国は武器貿易条約の早期締結に向けた交渉を進めるとともに、クラスター兵器の全面禁止に向けた政府間プロセスを促進し、対地雷禁止条約を完全に実行すること。また、劣化ウラン兵器の使用を禁止するための国際合意をつくること。これらを第一歩として、全面的な軍縮と非軍事化のためのプロセスを進めること。

## 開発

軍縮を開発および人間の安全保障と結びつける取り組みを進めること。軍事費の一定率をミレニアム開発目標およびそれ以上の開発資金に振り向けること。

## 環境

戦争と軍事が環境にもたらす負の影響を認識し、転換すること。また、希少化する天然資源およびエネルギー資源の管理をめぐる外部からの干渉や争いが紛争を助長する危険はよく知られているところであり、こうした危険に対処すること。

## 平和に対する世界の企業の社会的責任

平和、人権、環境保護を含むような企業の社会的責任を支えるための仕組みを構築し、実行すること。

## 報告 二〇〇八年反サミット運動

警備費三百億円、警察の動員数二万一千人。ものものしい警備体制のもと、今年七月、北海道洞爺湖でG8サミットが開催されました。全国どこに行っても、テロ対策と称して警察があふれかえり、治安管理のために普通に自衛隊が出動している。洞爺湖サミットとは何だったのかと聞かれたら、誰もが一言で「警察サミット」と答えることでしょう。国内の治安のことばかりではありません。今回のサミット議長声明では、アフガニスタンとパキスタンの国境付近に自衛隊を派兵することが約束されました。本号では、「G8に対する9条世界会議声明」も掲載されていますが、サミットは世界の「軍事化」「警察化」を進めるための会合にはかならないのです。

言うまでもなく、このような治安体制は、新自由主義グローバリゼーションのもとで、進められているものです。農産物の輸入自由化、公共部門の民営化、規制緩和、労働の柔軟化。一九七〇年代から、世界中で多国籍企業を筆頭とする大企業の利権を守り、貧しい人びとにさらにむちを打つような政策がとられてきました。こんにちの治安体制は、このような世界的潮流に乗れない、あるいは従わない人びとを予防し、排除するために形作られたものです。

一九七五年にはじまったサミットは、新自由主義グローバリゼーションの起点となり、こんにちでも大きな力を発揮しています。そのため近年では、サミット開催国に世界中から人が集まり、大規模

な反対運動が行われることが世界の常識となっています。今年は、日本にも世界中から大勢の人びとが集まりました。国内では、サミット開催前からさまざまな取り組みが行われています。

大きなものを取りあげただけでも次の通りです。

六月二八日

G8サミット直前東京行動 集会

六月二九日

G8サミット直前東京行動 デモ

六月三〇～七月一日

G8対抗国際フォーラム（東京）

七月三～四日

先住民族サミットアイヌモシリ二〇〇八（北海道・平取町、札幌市）

七月三～六日

反サミットキャンプ（北海道・当別町）

七月四～九日

国際民衆連帯Days（札幌市）

七月五日

チャレンジ・ザ・G8サミット一万人のピースウォーク（札幌市）

七月六～八日

市民サミット二〇〇八（札幌市）

七月六～九日

反サミットキャンプ（北海道・伊達市、豊浦町、壮瞥町）

連日、洞爺湖付近にて現地行動が行われる。

今回は、そのなかでも、大学人を中心として企画された「G8対抗国際フォーラム」と、北海道に集まった人びとの宿泊施設として開かれた「反サミットキャンプ」を、ご紹介させていただきます。

# 大学と運動の交差する地点から言葉を

## G8対抗国際フォーラム

入江公康・白石嘉治

六月三〇日の明治大学リバティホールには、五〇〇人以上の聴衆が詰めかけていた。

壇上には、足立眞理子（御茶ノ水女子大学教員）、岩崎稔（東京外国語大学教員）、鶴飼哲（一橋大学教員）、ジョン・ホロウエイ（メキシコ／プエブラ自治大学教員）、マイケル・ハート（アメリカ／デューク大学教員）、そして通訳の本橋徹也（東京経済大学教員）の諸氏。「グローバルゼーションとは再生産の営みの収奪（の不可視化）である」という足立の提起をうけ、パネリストのあいだで真摯な議論がかわされる。翌日にかけておこなわれた東京でのG8対抗国際フォーラムの盛会を象徴するシンポジウムであり、その強度は七月三日の北海道大学でのフォーラムにもひきつがれていく。

「プレカリティは創造する」「ゾンビの国」で考える連帯の条件——グローバル・ジャスティス運動、固有性、マルチチュード」「パブリックかコモンか？——サミット体制と明日の条件なき大学」「戦術の多様性をめぐって」「秋葉原で起きたこと——非正規大学」「地下大学東京」「反戦反基地——軍事化に抵抗する」「地球的組織の未来」「反資本主義のための資本主義論」「アート&アクティヴィズム——市民運動の多様性」「グローバルゼーションと環境・平和・人権」「グローバルゼーション下での国際連帯」「グローバルゼーション下での大学」等々。こうしたパネル・ディスカッションの詳細については、G8対抗国際フォーラムのウェブサイト(<http://www.counter8forum.org/>)を参照してほしい。



このフォーラムは、グローバル化を推し進めてきたG8サミットに「対抗」すべく開催されたものだが、研究者と運動が、あるいは学術と運動が、連結するかたちで準備され、開催された。

それは、近年の日本のアカデミズムにおける動きとしては前代未聞であり、それゆえ画期的な試みであったと言って、ほぼまちがいない。各パネルの会場は、それぞれ立ち見が出るほど満杯だった。その盛況それ自体が、G8に代表される現行の資本主義システムに対し、ひとつの対抗の場として機能し、明確にNOをつきつけ回答を与えたのである。

そして本番のフォーラム自体もさることながら、それにもまして、そこにいたるまでの経過こそが「研究者」「大学」「学生」という主体の、新たな構成であった。つまり、「研究者」「大学」「学生」という枠を超え、それらを運動とともに問い直しつつ進行した画期的なプロセスだったと思われるのではないのである。これは、けっして自画自賛的にいつているのではなく、いま問われているのは、あるいは問われねばならないのは、現実拝跪のアカデミズムや硬直した制度を前提にした自明性であり、そこから派生する「研究者」たち自身の分限的ふるまいそのものだからである。対抗フォーラムは、そのような大学が問い直された大きな契機であり、また実践そのものでもあったと考える。とくにそれを支えた大学院生たちの動きには目を見張られるものがあり、大学の主体とは何であるのかを十二分に自覚させてくれたのである。

フォーラムの企画・運営のための会議がいくとなくもたれたが、大学教員や大学院生たちの研究者の集まりであるがゆえ、毎回会議の終了後は、その集まり自体をそのまま研究会へと移し、招聘するゲストの主張や運動を紹介し、日本側の研究者による報告も、そのつどおこなわれたのであった。海外からのゲストおのおの、その主張するところの理論や考え方を、運営する側で共有してゆく。

この研究会でなされる報告は非常に刺激的なものばかりで、フォーラムの準備自体がそのまま研究の場であるかのような印象をもたらせたのである。グローバル化を進行させる現代資本主義を、フェミニズムと再生産論と本源の蓄積から、もういちど捉え返そうとする試み、あるいは海外からのゲストたちの理論や主張の布置を見わたし、今回フォーラムで見落とされている論点はないか、——たとえばG8が「北海道」でおこなわれることの意味、すなわち「先住民」と「植民地」の問題——や、ほかにも今回来日する理論家たちの論点を吟味し、そこからみえるグローバル化や反資本主義の展望を探る、等々が語られていた。こうして研究者たちから繰り出される言葉の数かずは、ともすれば現実に埋没しがちなみずからの思考を賦活するのに十分なものであった。

対抗フォーラムの前日、歓迎のレセプション・パーティーが行なわれたが、海外からのゲストや日本側の関係者たちで会場（文京区・ポエトリ・インザ・キッチン）は超満杯で、会場の外にも人が溢れるという状態だった。文字どおり足の踏み場もないというか、とんでもない人口密度の高さで、ほとんどなにがなんだかわけがわからない状況だったが、スタッフによる手づくりの料理が用意され、くだけた雰囲気の中、ごったがえす熱気と、海外からのゲストたちとの飲み食いとともに、明日のパネルやメインフォーラムを前に、人が紹介され、出遭い、親交をもち、そして盛んなコミュニケーションがもたれた。

だが、これら海外からのゲストが来日するにあたって、法務省・入国管理局による重大な妨害行為があったことを明記しておかねばならない。フォーラムに参加する海外ゲストのほとんど（約八割！）が空港で足止めされ、不当に拘束されたうえ、当局から長時間の尋問を受けるといふ、きわめて不当な扱いを受けたのである。海外からのフォーラム参加者に対する入管の、これら一連の措置は、当局

の恣意によって狙い撃ち的に行なわれたことは、明らかである。入国妨害というこうした措置が、日本政府によって平然と行なわれたことは、学術活動に対しての不当な介入であり、またそれに対して深刻な制限をかけるものであり、学問の自由、ひいては移動の自由や言論・表現の自由を侵害する重大な行為であると言わねばならない。サミットが開始される以前から、その期間中にわたって、日本全国いたるところでほとんど戒厳下と見まがうような過剰警備の状況がつくられていたが、この国では、事あらば、すぐにでも、簡単に「非常時体制」に移行することが暴露されたのであり、それと相俟って、今回のゲストの入国妨害は、民主主義の扼殺に等しいものであることが認識されねばならぬだろう。

いずれにせよ、G8対抗国際フォーラムで賭けられていたのは、「大学」ないし「知識人」の原義への回帰による再生だったと言えるだろう。

大学の起源を想い起こそう。中世のヨーロッパにイスラムからアリストテレス哲学が流入する。その学知にひきよせられるように、パリやボローニャに、人びとがあつまってくる。だが、当時の都市は城壁で囲まれた文字通りのゲイテッド・シティーであり、その閉じられた都市にたいして、よそ者の学生や教師たちが、みずからの普遍的な権利を主張するためにつくった組合組織が、大学だった。

G8対抗国際フォーラムは、開催の当日のみならず、むしろ準備をふくめた対抗的なプロセス全体が、大学の起源のサンディカリズムを再生する試みだったと言えるはずである。

そして、知識人とは、一九世紀末フランスでのドレフュス事件（一八九四年にフランスで起きた、当時フランス陸軍参謀本部勤務のユダヤ人大尉であったアルフレッド・ドレフュスに対する冤罪事件）において、無名であるにもかかわらず、知性の名のもとに群れ集う対抗的な集団へのメディアによる

蔑称だったことも想い起こそう。この「印象派」にも似通った知識人の不穏な出自は、やがてサルトルに集約される著名な代弁者というイメージへと変質していく。さらに、新自由主義の司令塔ともいえる日米欧三極会議によって、そうした大文字の知識人は「価値志向型知識人」として排撃の対象となる。以後、サミット体制下で、専門に特化した「政策指向型知識人」が「ポストモダンの条件」（リオタール）として称揚される。だが、そもそも、価値を志向することと有名であることは無関係であるし、価値に根ざさない技術的な知は、容易に体制の支配にとりこまれてしまっただろう。G8対抗国際フォーラムは、その聴衆もふくめて、いわば追放された「価値志向型知識人」の帰還だったのであり、そこに集い新たに知識人として再生した人びとの闘いは、それぞれの場所に散開しつつ今日もなお続いているのである。

\*この点については以下を参照されたい。岩崎稔・岡山茂・白石嘉治「討議 大学の困難」『現代思想』〇八年九月号七八頁―〇九頁。上記でも強調されているが、G8対抗国際フォーラムではつきりしたのは、フォーラムを組織した大学院生たちのポテンシャルであり、それはフォーラムに招待された韓国の研究集団「スユナノモ」の実践とともに、大学の起源としてのサンディカリズムを開示するものだった。「スユナノモ」については金友子編『歩きながら問う―研究空間（スユナノモ）の実践』（インパクト出版会、〇八年）をご覧いただきたい。またアレゼール日本（高等教育と研究の現在を考える会<http://aresjp.org/>）では、十二月初旬に「院生サンディカリズム」をめぐる大学院生自身によるシンポジウムが予定されている。

（いりえきみやす・文京大学ほか講師／しらいしよしはる・上智大学ほか講師）

# 反サミットキャンプに見たゼネストの情景

栗原 康

「これからは、ゼネストっすー やっぱゼネストっすよ」。これは、今年の夏、北海道で催されたキャンプの終了後、ある大学生が語った言葉である。キャンプといっても、ただ、キャンプをやっていたわけではない。もう三か月も前のことになるが、七月七日から九日まで、北海道洞爺湖町で、G8サミットが開催された。これに反対するために、世界中から、何千もの人たちが北海道に結集し、札幌市や洞爺湖付近でさまざまな抗議行動を行なった。キャンプは、こうした人たちに食事や宿泊場所を提供し、行動を支えるための反サミットの攻撃拠点であった。紹介した大学生は、ふだんは東京に在住しているが、四月から北海道にはいり、地元の活動家との関係づくりから、キャンプ地の確保、財政の切り盛りまでを取り仕切ったキャンプのオルガナイザーである。僕も北海道と東京を何度も出入りしながら、かれと一緒にキャンプの準備にあたってきた。だが、キャンプが終わったあと、ふとゼネストについてもらした、かれの言葉を、僕はなかなか理解できないでいた。ただ、「なんか深そうだし」と思い、それから、すこしキャンプとストライキのことを考えてみた。

## サミット体制とはなにか

だが、そもそも、なぜ反サミットなのか。それは、大学生が、何か月も住みこんでまで反対しなければ

ならないものだったのだろうか。まず、この点から考えてみよう。

サミットとは、先進諸国の首脳が集まり、世界の政治経済の動向を決定する、トップ会合のことである。

サミットが誕生したのは一九七五年。フランスのランブイエで開かれたのがはじまりである。当初議題とされたのは、国際通貨の安定。これは、サミットの目的を非常によくあらわしていた。サミットのきっかけとなったのは、一九七一年のニクソンショックである。ニクソンショックとは、当時のアメリカ大統領ニクソンが、とつぜん国際通貨体制の基軸であった「金＝ドル本位制」を放棄すると宣言した事件のことだ。第二次世界大戦後、世界経済は圧倒的な経済力を誇るアメリカを中心に築きあげられてきた。国際通貨のしくみも、強いアメリカのドルと金との交換を軸とし、それにリンクさせて各国の通貨価値を定める固定相場制をとってきた。この通貨体制は、アメリカのブレトンウッズではじまったため「ブレトンウッズ体制」とよばれる。だが、一九六〇年代末、アメリカはベトナム戦争のために大量の赤字国債を発行し、はどめのないドルの海外流出を招いた。ドルの実質的価値は下がり、もはや国際通貨を支えるだけの力はない。とうとう負担に耐えきれなくなったアメリカは、金・ドル交換制を放棄し、三〇年間続いた「ブレトンウッズ体制」を崩壊させた。

これに代わって、一九七三年から先進諸国は変動相場制に移行した。サミットの目的は、アメリカ一国だけではなく、先進諸国の協調体制で、この為替制度を管理することにあった。変動相場制が象徴する意味は大きい。この制度は、資本のかなめである通貨への規制を、国家が手放すことを意味していた。通貨価値は国家ではなく、グローバルな市場取引の結果に、左右される。予測できない為替変動は、その上下の差額に利益がめばえる余地を生みだした。通貨そのものが売買の対象となり、こん

にちでは投機マネーの暴走を招くまでにいたっている。もちろん、規制緩和が進んだのは、通貨ばかりではない。変動相場制は、通貨に象徴される資本の自由な動きにたいして、国家の規制をかけないようにすることを意味していた。農産物の輸入自由化、民営化、労働の柔軟化。サミット結成後、各国は労働者や小農民、社会的弱者を保護するために設けられていた資本規制を緩和していった。

これは、労働力コストのかかる福祉国家を解体し、大企業の利益を最大化するしくみを整えれば、あらゆる国が豊かになるという、新自由主義の理念に沿うものであった。一九八〇年代にはいると、サミットは参加国で新自由主義をひろめるとともに、IMF・世界銀行をつうじて第三世界への企業進出をサポートし、一九九〇年代にはアジア諸国も制することに成功した。こうして、サミットを起点として、先進国の協調体制で資本の自由化をはかる「サミット体制」が築かれた。

\*一九七〇年代初頭から現在にいたる「サミット体制」の詳細な説明については、拙著『G8サミット体制とはなにか』（以文社、二〇〇八年）を参照されたい。

## オルタナティブ空間としてのキャンプ

小泉構造改革のインパクトが強いかもしれないが、日本も、世界の例にもれず、一九七〇年代後半からゆつくりと「サミット体制」に移行してきた。大企業が保護され、弱者が切り捨てられるしくみ。いまでは都市でも農村でも、食べていけないという層がどんどん増えている。よくよく考えると、反サミットでキャンプの準備にたずさわった人は、僕もふくめて、ほとんどが、失業者か学生かフリーターだった。根っこには、あきらかに「サミット体制」にたいする怒りがある。状況は、世界中どこでもおなじだ。一九九〇年代から世界各地で暴動がおこり、一九九九年のWTOシアトル反対闘争で狼

煙があがってからは、「サミット体制」を推進する国際会議のたびに世界中から人が結集するようになった。サミットでいえば、二〇〇一年のジェノヴァでは三〇万人、昨年のドイツハイリゲンダムでは一〇万人もの人びとが抗議を行なっている。今年は、日本で開催されたにもかかわらず、国内外から五千人もの人びとが集まった。

集まった人びとは、いうまでもなく、サミット開催の阻止を目的としている。だが、ほんとうのところ、それは副次的な目的にすぎない。これらの運動のスローガンが「もうひとつの世界は可能だー」であるように、かれらは行動や会議をつうじて、「サミット体制」とは異なる世界があることを実感しようとしている。世界中からやってきた見知らぬ者同士が、その場でいっしょに行動を企画し、そのための会議をひらく。そして、そこから新しい抗議スタイルや、より平等な意思決定の方法を發明していく。「サミット体制」が、トップエリートによって、あらかじめ何もかも決定されている世界だとしたら、逆に、その場の話し合いから、自由に、新しい政治のあり方を決められる世界。集まった人びとは、そんなオルタナティブな空間をつくることを、目的としている。こんにち、こうした運動はオルタ・グローバリゼーションと呼ばれており、僕らがとりくんだキャンプも、そのひとつである。数日間の共同生活のなかで、会議や共同作業の機会をつくるという意味では、オルタ・グローバリゼーションの理念を、もつともよく反映したとりくみといえる。

## キャンプの経験

反サミットキャンプは、ぜんぶで四か所開催された。

ひとつは札幌近郊で、他の三つは、洞爺湖周辺である。僕は「国際交流インフォセンター／キャンプ



札幌実行委員会」にはいり、札幌市に隣接する当別町キャンプの担当になった。

札幌から二時間ちかくと、距離的にはすこし遠かったが、場所はすごくよかった。

キャンプ地となったのは、廃校になった中学校。グラウンドにはテントを張り、校舎にも泊まれる。調理室もあるし、各教室は、セミナーや小会議に使える。体育館は、大きなワークショップや全体会議、映画祭、音楽祭に最適だった。

理念としては、「オルタナティブ・ヴィレッジ」を掲げていた。さきに述べたように、キャンプの目的は、既存の世界のオルタナティブ空間をつくることにあった。準備段階のころから、札幌実行委員会では、そのための努力をしようという話し合いをかさねた。たとえば、食事は、基本的にベジタリアンにして、食事から誰も排除されることがないようにしようとか、野菜は、できるだけ地元の有機農家から買おうとか。入場料にしても、通常の市場取引とは異なり、払える人に多く払ってもらう、カンパ制にしよう、とか……。

主催者とお客様の垣根をこえて、参加者が自分たちで、会議やワークショップを組めるようにと、受付前のボードで自由に告知できるようにし、校舎内の教室も使えるようにした。

ただ、理念では「オルタナティブ・ヴィレッジ」を掲げていたものの、いざキャンプをはじめようとすると、海外からも、全く知らない人たちが大量にやってくるわけだし、怖い。だから、最初は、キャンプのコアな運営については、もともと札幌実行委のメンバーで決めてしまい、あとは補足的に海外の人たちもふくめた全体会議を開けばいいくらいに考えていた。

キャンプのオープンは、七月三日。前日の夜から海外の人たちが、どつとはいってきて、いっきに不満が噴出した。カンパなんて言ってるけど、結局はお金のないアジアの活動家にも入場料を強制し

ているじゃないかと、キャンプ運営の会議が区分けされているのは、ということだ、自分たちをお客様あつかいするつもりかと。とくに荒れたのが、校舎内の宿泊部屋のこと。最初、僕らは宿泊部屋を「男・女」で分けていた。それをみた海外の活動家が、激怒する。ドアの「男・女」の張り紙を破ってもつてきて、「これはどういうことだ。あなたたちはオルタナティブなんて言っているけど、資本主義がつくっている既存のジェンダー関係を、この場で再生産するつもりか。こんなひどい場所はない。わたしは帰るー」と。そのときは深夜だったが、起きていたメンバーに来てもらい、緊急ミーティングを開くことになった。

結論としては、女性だけの部屋、男女誰でも部屋、セイファー・スペース（トランスジェンダーや同性愛の人たちもふくめて、誰でも安心して過ごせる空間）に、分けることになったのだが、僕自身、そのとき怒られて、目がさめたような感じがした。後からきくと、他のメンバーもそうだったらしく、みんな、こう考えるようになった。「海外から来ている人は、このキャンプを、真剣に自分たちのものだと思っている。それなら、キャンプのどんなことも、全員で話し合って決めていいんじゃないか」と。それで、翌日から朝晩に二回、海外のメンバーも入れて全体会議をひらき、司会も、日本と海外のメンバーから一人ずつだして、キャンプの運営を決めるようにした。

そうした全員で話しあえる場をつくり、「実は、このキャンプは大赤字です」、「シャワー室をつくりたいので手伝ってほしい」、「食材を切るのが大変なので助けてください」、「キャンプのセキュリティについて知恵をください」なんて言うと、みんな、やる気で来ているので、ほんとにやってくれる。というよりも、一日生活を共にし、顔見知りになった信頼関係が、自然とそうさせたのかもしれない。資金面でも、すこしでも出せる人が、多く出してくれるようになった。もちろん、会議をひらくと、

不満は出るし、正直緊張もする。だが、〈お客様〉は、いなくなり、キャンプの設営などは、むしろ効率的になった。

雰囲気もすぐよかった。祝祭的だったと言ってもいいのかもしれない。国旗のかわりに黒旗がなびき、夜な夜な映画祭や音楽祭をやっている。グラランドには居酒屋ができ、朝まで騒いでいる。夜中に到着したある参加者は、「外から見たら不夜城みたいだったよ」と言っていた。

日中は非暴力トレーニングや、デモのグッズづくりのワークショップがあり、外ではキャッチボールや世界サッカー大会が行われていた。「自分はサッカーだけやりにきました」と言っていた人もいた。僕は受付係だったので、ずっと外にいたのだが、とにかくのんびりした雰囲気だった。近所のおじいちゃんややってきて、「クレームでも言われるのか」と思ったなら野菜の差し入れだったり、家族連れがきたと思ったら、ただ、ご飯を食べて帰ったりする。居酒屋の隣に小屋を建て、ずっと望遠鏡をのぞいている人もいて、「何をしているの」と聞いたら、「公安に見張られているので、見張り返してやろうと思って」と言っていた。ふだんなら、そこまでしている時間はない。僕自身、受付は大変だろうと思って、いいソファを用意したら、気持よくて、居眠りばかりしてしまった。冒頭で紹介した学生などは、一日二〇時間も寝ていたほどである。反サミットキャンプは、そのような時間の止まった感覚をかもしだす空間だったのである。

### おわりに

話を最初に戻そう。キャンプを終えてから、何冊かストライキの本をひも繙いてみた。読めば読むほど、キャンプのことが書いてある。

ゴム工場や他の大量生産工場では、ほとんどの部門の労働が、単調で骨折りの仕事である機械で、創造性がなく、人を怠き立てるばかりで、想像力をまったく要しない労働である。潜在意識的にはあれ、作業の中断は、すべて労働者に喜んで受け入れられる。……坐りこみストライキは、ひとつの社会的事件である。坐りながら、労働者は語りあい、互いに知りあう。そしてかれらは、そうするのを好むようになる。ふつうのストライキでは、ひとつの屋根の下に千や二千の人びとを集めるのは、不可能であろう。それも、集会のためだけの集まりであって、互いに話し合うこともなく、演説者の話に耳を傾けるだけである。坐りこみストライキでは、同じ屋根の下に一万ないし一万二千の手持ちぶさたの者たちが集まって、自由に一対一で語りあう。(プレッヒャー「ストライキ」昌文社、p.208)

これは、一九三〇年代のアメリカの坐りこみストライキの描写である。ふだん命令されてばかりの労働者が、仕事を中断して、思いきり手持ちぶさたになる。でも、時間をもてあました労働者は、自然と隣の労働者と語りあうようになる。そして、工場内の生活をどう組織するのかについて、自分たちで話し合うようになる。食事供給や衛生管理から防衛、教育、娯楽まで。しかも、それは祝祭的な雰囲気なかでとりくまれる。

このように、うちとけたお祭り気分や創造性が、ストライキの共同体で芽生えたようであった。皆がいっしょにひとつのサークルになってメンバーの名をよびあい、呼ばれた者が、歌ったり、笛を吹いたり、踊ったり、話をしたりするのが、皆の好んだ娯楽のひとつである。(p.223)

ストライキにはいった労働者は、ふだんの仕事とは、まったく別のルールにもとづいた「協働」の経験をしていく。それは、お祭り気分のなかで、自律性や相互扶助といった労働者独自のモラルを創造することにつながる。

キャンプでやりたかったことも、同じだ。いま思うと、既存の世界のオルタナティブをイメージするといったとき、自分ではバイトをやっているときと正反対のことを、思い浮かべていた。

もちろん、いまの労働形態は、昔の工場労働とはちがっている。だけど、会社や顧客の「評価」にさらされ、常に時間に追われながらあくせく働いているのは、いまでも変わらない。キャンプは、これまでにないほど時間をもてあます空間である。そこには、上司もお客様もなく、みんなが「協働」を行う主体である。キャンプ内の食事供給から、衛生管理、イベント、ワークシヨップ、防衛体制、そして抗議方法の検討まで、はじめて出会った人たちが話し合いで決めていく。

反サミットキャンプがサミットのたびに生まれては消えるものだと思えば、それは、きわめて人の移動の激しい、しかもグローバルな単位のスライキだといえる。

ゼネストというと、ちょっと大げさに聞こえるかもしれないが、僕らがキャンプでみたのは、人の移動の激しいグローバル化時代のゼネストの情景だったのではないだろうか。キャンプは、世界中の不安定労働者たちが、各々もっているストライキのイメージを集集させた、実験空間だったのではないだろうか。

冒頭に紹介した学生とおなじように、キャンプを終えたあと、僕もそう思うようになっていく。

(早稲田大学 大学院)



## 同盟

堀場清子

まさか！ 傭兵じゃあるまいし  
米軍の尻っぺたに ひつついて

アメリカの利益のための戦争にゆくなんて

いつそのこと ほんものの傭兵ならば  
命を的の仕事柄ゆえ

それ相当のお手当もあるうというもの

ところがなんと このケースでは

対米おついしよの日本政府が

年額二〇八三億円から二四六〇億円という



口にするさえ腹の立つ『思いやり予算』とやらを  
在日米軍に進呈したあげく 送り出す  
不可解にも 『傭兵』の側がどえらい金を支払うのだ

国内には 占領時代さながらに

一三五カ所の米軍基地があり

その周辺では レイプ・強盗・殺人の凶悪犯罪が  
頻々と起きている

犯人はいつも うやむやに逃げおおせる

戦後六三年――

基地周辺の住民にとっては

いまだに戦争が終わらないのだ

そのうえ日米安保条約の規定により

アメリカが必要とするならば

日本全土のどの地域でも 基地として要求できる

日本には基地提供の義務があるときいて  
耳を疑う

かくも極端に不平等な両国の関係を  
「同盟」と呼ぶ不思議さよ

中国・ロシア・北朝鮮を封じ込め

覇権を維持してゆくために

アメリカは 日本の基地と金と 傭兵をを必要とする

「オンザブーツ」とブッシュに凄まれて

小泉は飛び上がり

憲法に違反して 自衛隊をイラクへ派遣した  
戦後初の 海外派兵となった

駐屯したサマワ地区は 安全地帯だと  
宣伝しきりだったが



安全地帯なら外国軍隊の出番もないが道理で  
これは苦々しいアイロニーだ

二〇〇八年二月一三日

自民党は「派兵恒久法」を国会に提出した  
いつでも 何処でも 自在に海外派兵をするために  
やりたい放題の戦争を許すために

かつて日本人ら 大戦の惨禍を深く悲しみ  
戦争放棄の誓いを立てた

世界に誇る その憲法第九条を踏みにじって  
米軍の尻っぺたに ひつついて

またしても 地の果てまで人殺しにゆくなんて  
殺されにゆくなんて！

## コスタリカ通信2

# 「軍隊のない国」から

弁護士 笹本 潤

(日本国際法律家協会事務局長)

前回に続いて、米州人権裁判所について記します。米州とは、南北アメリカの三五か国が加盟している地域機構です。

この機構には、人権委員会と人権裁判所という二つの組織が、人権保護の役割を担っています。

米州人権裁判所で行われた裁判例を調べたところ、国を超えて地域機構の裁判所の効果が発揮された裁判例があります。中でも、ペルーのフジモリ元大統領のケースは、人権裁判所の特徴をよく示すものです。

一九九一年、ペルーは反政府勢力を弾圧し、十五人

を弾圧したバリオス・アルトス事件が起こりました。

この事件の被害者、遺族が、米州人権裁判所にペルー政府の責任を追及して裁判（個人請願）を起こしました。

ペルー側はこれに対抗して、同事件の責任者の処罰を免除する恩赦法を制定したり、米州人権裁判所で責任を追及されそうになると、米州人権裁判所の管轄から脱退する国会決議を上げたりします。

しかし、米州人権裁判所は、これらのペルー側の責任逃れを否定します。

ペルーは一九四八年に成立した、米州機構の加盟国です。

米州機構憲章には人権裁判所の裁判に服することが明記されています（六八条）。米州人権裁判所はこの条文を援用して、ペルーの国会決議を無効と宣言しました。また、責任者を免責する恩赦法の効力も否定しました。そして、被害者らの賠償請求を認めたのです。

地域機構の裁判所は、このように、一国の国会決議をも上回る強力な力を持ちます。

アジアに人権裁判所ができたら、やはり、その国がどんなに非民主的な制度であっても、国際的な基準にそって裁くことができます。

ただし、それが可能となるには、各国での地域共同体の合意、人権裁判所の裁判に服する旨の合意を各国でなす必要があります。

このような地域機構、地域の人権裁判所をアジアで実現するにはどうすればいいのか、が今後の課題です。



（サンホセにある米州人権裁判所）

# 窓

## 「自衛隊イラク派兵は憲法九条一項違反」 と宣言した名古屋高裁四・一七判決

田巻 紘子

### 名古屋高裁四・一七判決の感激

二〇〇八年四月一七日、自衛隊イラク派兵差し止め等を求める訴訟の判決が、名古屋高裁民事第三部により、言い渡されました。

法廷で判決の要旨が読み進められ、「よって、現在イラクにおいて行われている航空自衛隊の空輸活動は、政府と同じ憲法解釈に立ち、イラク特措法を合憲とした場合であっても、武力行使を禁止したイラク特措法二条二項、活動地域を非戦闘地域に限定した同条三項に違反し、かつ、憲法九条一項に違反する活動を含んでいる、と認められる」と言い渡された瞬間、法廷内を埋め尽くした控訴人（原告）、支援者、弁護団に、静かなどよめきが起りました。

すぐさま、若い弁護士が二人、「画期的判決」「自衛隊イラク派兵は憲法違反」との旗を持って法廷外で待つ人びとへ報せに走ると、「うおお」という、あたり一面の空気を震わせるほどの大きな歓声があがりました。法廷の中では、判決の言い渡しを聞きながら、涙する姿が、あちこちで見られました。

「裁判なんて生まれて初めて、という普通の市民」が、憲法をあまりに無視して暴走を続ける政府のやり方に対して「こんな自衛隊派兵はおかしい、政府は憲法を守れ」と、裁判に立ち上がり、そして、国の防衛・軍事政策を変えさせる力をもった違憲判決を得た瞬間です。

### 四・一七違憲判決の内容

四・一七違憲判決は、裁判所が、現在の情勢の中で憲法判断

を正面から行い、司法府の役割を果たした点で、まず大変に画期的です。その上、判決の内容も極めて格調高く、意義深いものです。

この違憲判決の結論は、原告らの損害賠償請求を認めなかった(国側の勝訴)ため、国側は、上告できませんでした。原告側も、判断内容を評価して上告しなかったため、五月二日に判決は確定しました。以下、判決の内容を三点(①②③)に要約して、紹介します。

1. イラクの現状について、「イラクは現在、多国籍軍と武装勢力との間で国際的な武力紛争が続いていると評価される状態である。つまり戦争中である」と判断しました。

とりわけ、首都バグダッドは、二〇〇六年八月以降、アメリカ軍が兵力を集中させて大規模な掃討作戦を行なっている地域であり、イラク特措法にいう「戦闘地域」である、と判断しました。

この裁判に参加した原告の皆さん一人ひとりの中に、(そして弁護団の中にも)、「イラクでアメリカ軍がやっているのは

人殺しではないか」「日本の私たちもこの戦争の加害者になっている」という、怒りと悲しみ、がありました。

四年余に及ぶ裁判において、原告側は、毎回の法廷で、欠かすことなく、「アメリカ軍等の多国籍軍が、イラクで掃討作戦を行い、子どもや女性を殺し、民家を破壊しています」「こんな掃討作戦に自衛隊が加担することが許されるのですか」と弁論し、訴えてきました。

裁判所は、この訴えを重く受けとめ、判決文において、原告側が証拠として提出した新聞記事等の証拠に基づき、ファルージャ、バグダッドその他の掃討作戦の様子を、リアルに認定したのです。

イラクの実態についての判断のうち、とくに重要な点が二点あります。一点目は、アメリカ軍が首都バグダッドに兵員を増派してバグダッドでの掃討作戦を強化した、二〇〇六年八月という時期です。ちょうどその頃から、航空自衛隊がバグダッドへ空輸を始め、その空輸は、バグダッドで軍事行動に参加するアメリカ兵を輸送するものでした(後記②)。

空自はバグダッドで軍事行動をし、人殺しをするための兵隊を空輸していたのです。この空輸は、人道支援ではありません。また、「後方」支援だから戦闘と関係ない、と言えるよ

うなものでもありません。アメリカ軍の戦闘に不可欠な兵士を、アメリカ軍の手足として運ぶ、という、とても重要な役割を担っていたのです。

二点目は、アメリカ軍ほか多国籍軍が行なっている、「掃討作戦」が、「悪を征伐」するものではなく、すさまじい人殺しであり、生活破壊である、という実態を明らかにしたことです。日本が無批判に「テロとのたたかい」という戦争を突き進んでいることに対する、痛烈な批判と言えないでしょうか。

2. 日本の航空自衛隊が、現在、クウェートからイラクの首都バグダッドへ、武装したアメリカ兵を運んでいる行為について、「イラク特措法に反し、憲法9条1項に反する」と判断しました。

空自が、バグダッドへ武装したアメリカ兵を運ぶ行為は、アメリカ兵ほかバグダッドで行なっている掃討作戦その他の武力行使と一体化するものであって、日本の空自が、自ら「武力の行使」を行なっていると評価せざるを得ない、したがって憲法9条1項違反である、という判断です。

日本国憲法が制定されてから、憲法9条1項違反判断が、裁判所で示されたのは、初めてです。

憲法9条1項は、戦争放棄を定めています。9条1項違反ということとは、つまり、「いま日本は戦争している」ということです。画期的な判決、と喜んでは、いられないのです。

この違憲判断の背景には、「日本の参戦は、イラク派兵では終わらない、これから、ますます戦争していく」という、今の日本への危機感があります。それだけに、この憲法9条1項違反という判断は重いのです。

「空自がイラクで何をしているか」については、これまでほとんど報じられてきませんでした。裁判では、原告が、空自のイラク派兵後、防衛庁(省)に対し、原告が、空自の人員・物資の輸送実績の開示を求め、それに対して開示された黒塗り資料(人員、物資とも輸送した内容が、ほとんどすべて黒塗りで開示された)を、証拠として提出しました。

この黒塗り資料からは、日本政府が国民に対して説明しているような「人道支援物資を運んでいる」という実態ではないこと、つまり軍事に係わる人員・物資を輸送していること、また、空自の輸送の圧倒的多くが、物資ではなく人員の輸送であることが判明します。それに加え、国会で行われた数少

ない論戦の中で、政府が、「空自の輸送の中心は多国籍軍の兵員である」ことを認めています。判決は、これら政府の資料・答弁を判断の根拠にしました。

空自が週四、五回、空輸を行なっている先であるバグダッドの状況については、国会の政府答弁、バグダッドへの輸送活動の危険性を認める答弁が、繰り返し行われてきました。加えて、バグダッドが現在に至るまで、アメリカ軍が集中的に兵員を駐留させ、掃討作戦を行なっている地域であつて、イラク特措法上の「戦闘地域」と判断される状況です。判決は、「空自が『戦闘地域』へ、多国籍軍の兵員を空輸するにあたり、武装した兵員を運んでいることは、当然推認できる」と判断したのです。

判決が憲法9条1項違反と判断する根拠にしたのは、政府の国会における答弁や、政府が情報開示した黒塗り資料です。その上に立ち、判決は、「政府がこれまで明らかにしてきた憲法9条の解釈に照らしても、空自の空輸活動は、他国（アメリカ軍）の武力行使と一体化する」と述べました。

このため政府は、この判決が示した「憲法9条1項違反」との判断を、否定することはできないし、これから先も、できせん。

政府がこれまで、「人道復興支援」「国際協力」と述べて、イラクへ空自を派兵してきたことが、「実際には戦争参加にほかならない」と、はっきり断罪されたことには、極めて大きな意義があります。この判決は、「政府は嘘をついて戦争をしていること」を白日の下に晒し、「皆さんは、このまま騙されて戦争を続けるのですか」と、私たち一人ひとりに厳しく問うています。

3. 憲法前文でうたわれている「平和のうちに生きる権利」（平和的生存権）が具体的権利であることを認め、その権利の内容を豊富なものにしました。

判決は、「憲法9条に違反する国の行為、すなわち戦争の遂行、武力の行使等や、戦争の準備行為等によって、個人の生命、自由が侵害され、又は、侵害の危機にさらされ、あるいは、現実的な戦争の遂行等への加担・協力を強制されるような場合には、平和的生存権の、主として自由権的な態様の表れとして、裁判所に対し、『当該違憲行為の差止め請求や損害賠償請求等の方法により、救済を求めることができる場合がある』と解することができ、その限りでは、平和的生存権に具体的

権利性がある」と述べました。

国家が戦争に突入していく場合、個人の人權が侵害されても、「お国の一大事である」として、甘受を強いられます。

しかし、「日本国憲法の下では、そのような甘受を強いられるいわれはないのだ」と、判決は明らかにしたのでです。平和憲法の力を示した判断であり、国家が行なう戦争と人權との関係を大きく変える判断です。

この判断は、イラクの実態を直視し、「自衛隊をイラクへ送り出してしまったならば、私たち自身も、イラクの人びとに対する加害者になってしまう」と考え、この裁判に立ち上がった原告（控訴人）の皆さんの、切実な気持ちに添えて、出されました。

裁判では、原告（控訴人）に、「自分の言葉」で陳述書を書いていただきました。「自分がかつて空襲で家族を失い、とても辛い思いをし、日本国憲法の下では、もう二度と、加害者にも被害者にもならないと思って生きてきたのに、今度は日本がイラクへ空爆を行う側になるなんて、自分には、とても許せない」「自分は日本国憲法の下で、二度と加害者にも被害者にもならないようにと教師の道を選んで子どもたちにも日

本国憲法の意義を教えて生きてきたのに、このイラク派兵を見過ごしたら、自分の人生を否定することになる」など、世代も人生経験もさまざまな原告から、切実な、生まの言葉が、陳述書として寄せられました。

数百通の陳述書を、弁護団で何度も読ませていただき、「原告の皆さんの苦しみが、日本国憲法の下では無視されるべきものではない」ということを、学者の力を借りながら理論化し、裁判所へ訴えてきました。

裁判所は、原告の皆さんの切実な言葉に胸を突き動かされ、そして正面から応えたのです。

長沼ナイキ訴訟や九〇年代の自衛隊海外派兵に対する訴訟の積み重ねの上に、イラク戦争参戦という現実と、それを我がこととして捉え、その苦しみを真摯に訴えた原告の存在が、裁判所にここまでの判断をさせました。

この判決は、今後、日本がさらに戦争していくときに、少数者であっても憲法9条と平和的生存権を使って、その戦争を止めていくことを、可能にしました。現に、日本各地で進められている米軍基地再編・機能拡充に対するたたかいや、有事法制（国民保護法制）に対するたたかいのなかでも、この判決を大いに使っていくことができます。



## 四・一七違憲判決を、戦争を止める道具に

### 1. 空自イラク年内撤退

——政府も無視できなかった憲法と市民の力

四・一七違憲判決が出された直後、日本政府は、この判決を徹底して無視する姿勢に出ました。「傍論」であると述べたり、「暇になったら読む」と言ってみたりすることで、国民・市民が、「この違憲判決は、大したことのない判決だ」と思うように仕向けていたのです。日本政府は、「傍論」などと述べることで、国民の目を判決から逸らそうとしました。

しかし、そのような小手先の方法によつては、この判決を無視させることは、できませんでした。

この違憲判決が出されてから、多くの市民がこの判決を知ったことが、大きな力になりました。自衛隊イラク派兵差止め訴訟の会（原告・支援者の会）では、判決全文を冊子化し（一冊三〇〇円）、弁護団とともに、全国どこへでも判決学習会の講師派遣を行うという活動をしてきました。判決学習会は、判決後から十月十日現在まで、弁護団で公式に把握できているものだけ

で、二〇五回に達しており、四七都道府県の多くの地域で開催されています。一度学習会を開催することが縁となつて、再度、学習会をしたいという申し込みも頂くようになっていきます。あわせて、判決冊子も、これまでに約二万部が普及されています。違憲判決に従つて空自の即時撤退を求めた署名は、十月一日までに四万六二三六筆が集められ、麻生太郎内閣総理大臣へ届けられました。

そして、日本政府は、去る九月十一日、二〇〇八年内に空自をイラクから撤退させる方針を表明しました。政府は、表向きは、「自衛隊イラク派遣の目的が達成された」などと述べていますが、実際には、派兵継続方針では世論と国会論戦への対処ができなくなつたのです。私たちは、「憲法と市民の力で空自撤退を獲得したことに、自信を持ちたいと思います。」

### 2. 判決を、インド洋洋上給油継続と「海外派兵恒久法制定」を止める力に

現在、政府は、引き続き、アメリカとともに世界で戦争を継続し、自衛隊を戦地へ送り続ける意向を示し

ています。「明文としての日本国憲法を守る」ということにとどまらず、「国際貢献」「人道復興支援」などの美名のもと、政府が憲法を無視して戦争している実態を注視し、声をあげなければなりません。そうしなければ、日本の戦争は、もう止められないところまで、来ているのです。

直面している課題として、第一にはインド洋上給油継続の問題があります。国会でどのような結論が出されようとも、軍事行動を現に行なっている他国の軍隊への給油が憲法違反であるということを、市民の声として広げ、政府を包囲していかなければなりません。

また、現在はまだ水面下での協議にとどまっている海外派兵恒久法(自民党の案では「国際平和協力法案」の制定を、何としても、止めなければなりません。この法案は「国際貢献」や「人道復興支援」を掲げ、実際には、自衛隊をいつでもどこへでも派兵できるようにし、イラクでアメリカ軍が行なっているような掃討作戦の実施をも可能にする法律です。憲法9条を変えずとも実質的には9条改憲と同じ効果をもたらすほどの重大な法律なのです。

政府が国民をだましても、嘘が見破られ、「国民が政府を支持しない」とわかれば、戦争をし続ける政策を取ることはできなくなります。私たち一人ひとりが、事実を知り、憲法を使って声をあげること、日本が進んでいる戦争の道を後戻りさせることができるのです。

### 3. 〈普通の市民〉が立ち上がり、勝ちとった裁判

自衛隊イラク派兵差し止め訴訟は、裁判に加わるのは生まれて初めて、という普通の市民が、「自分の手で憲法を使おう」と立ちあがった裁判です。

「アメリカ・イギリスが始めた、正義も大義もないイラク戦争を、私たちが見過ごしにしているのか」と問い、日本の自衛隊がそこに加わることは、やっぱり見過ごせない、と起こされた裁判です。

四・一七判決を得た名古屋の訴訟以外にも、全国十一の裁判所で、約五八〇〇名の原告が同様の裁判に立ちあがり、各地の裁判所で裁判をたたかいました。

私たちは、今回の四・一七違憲判決を得たことによって、「二度と戦争の加害者にも被害者にもならない

という願いをもって行動することが、平和憲法の下で生きる日本国民として認められる行動なのだ」ということに、確信をもちました。「憲法を一人ひとりの手で使うことができる」ということにも確信をもちました。政府は、これからも、国民をだまして戦争の道を突き進もうとするでしょう。しかし、それを許さない。あきらめずに、立ちあがることが、戦争の道から少しでも私たちの未来を取り戻すことです。四・一七違憲判決が与えてくれた勇気を、多くの、平和を愛する人びとと共有したい、と思っています。

(自衛隊イラク派兵差止訴訟弁護団)

\*訴訟の会と弁護団では引き続き、判決冊子の販売と学習会への講師派遣を行なっています。

詳細は、「自衛隊イラク派兵差止止め訴訟の会」ホームページをのぞいてください。

・URL <http://www.haheishidome.jp/>

また、各地での学習会の様子や、予定については、弁護団のホームページをのぞいてください。

・URL <http://ikeben.jp/>



法廷内に入れなかった人びとへ、廷内から、いち早く勝利を告げる旗が広げられると、割れるような拍手。

# 未明の激震に驚く

伊藤 エミ子

七月二四日未明、東北・岩手を広く襲った岩手北部地震。最大震度6強の猛烈な揺れ。岩泉町や奥入瀬溪流で、巨石が木々をなぎ倒して落下。岩手宮城内陸地震から一か月。またも、自然の猛威を示した。

JRを中心に、各地で交通網が混乱。水道などのライフラインも、ダメージを受けた。震源は、県北沿岸北部一八〇キロメートルと深く、マグニチュードは6・8と報道された。私の住む宮古市は、震度、5強。私は本を読んでいて緊急地震速報に気づかず、突然ゴーという地鳴りのような音。激しい縦揺れが襲った。とつさに戸を開け、出口を確保。落下物の心配がないところで、激し

い揺れの収まるのを待った。数分が長い時間に感じられ、建物倒壊・津波襲来を心配した。

この地方は、明治二九年、昭和八年、チリ地震と、大きな津波被害を受け、特に田老地区（宮古市は旧田老町と合併）は、二度にわたり壊滅的に被災している。テレビのスイッチを入れ、「津波の心配はない」との報道に安心したが、余震を考え、寝なかった。余震は、ほとんどなかった。

岩手北部地震に対し、政府の初動は、速かった。知事が派遣要請した陸上自衛隊や緊急消防援助隊は、その日のうちに現地入りした。要請前、すでに待機していた、とのこと。

ほかにも、多くの自治体の応援部

隊も続々かけつけたとの報道。未明の地震。暗闇での被害状況の把握は、大変だったようだ。

負傷者は、全体で一〇〇人を超し、宮古市では、翌日になって、「二〇〇〜三〇人くらい。うち骨折など重傷者が四人だった」と関係者が発表した。

「ケガ人の多くは、激しい揺れに驚き、就寝中の人々が寝起きのパニック状態で、あわてて行動し、転倒。割れたガラスによる切り傷、落下物に当たり、負傷」と報道されている。

二五日、国道116号線（宮古市盛岡）を往復。落石箇所は数か所と報道されていたが、国道は整備されていた。ほぼ並行して走るJR山田線は、線路上の落石と軽い土砂くずれで不通。

## 岩手から

夕方、宮古へ戻る道で、盛岡方面へ移動する、警察と自衛隊が一同と思われる長い車列とすれ違った。岩泉方面から戻る一隊のようだった。

今回の地震で倒壊した建物はなく、負傷者は一〇〇人を超えたが、死亡者はゼロ。火災発生もなく、孤立した集落もない。夏の未明、家庭で煮炊きに火を使う時間帯ではなく、学校や公共施設など大勢の人の集まる場所に人がいない早朝。車の往来が少なく、大雨により徐行運転中で難をのがれたなどで、被害が軽かった。不幸中の幸いというほかない。

一九年度、二〇年度と、(あじさいの会)で、「防災」をテーマに、宮古市男女共同参画推進フォーラムから委託を受け、「防災・災害復興に、人権への配慮、男女共同参画の視点の必要性」を訴えています。(八月十二日)

# ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を眺めとく新聞です。

〒150-0001  
東京都渋谷区神宮前  
3-31-18

03-3402-3244  
03-3402-3238

FAX 03-3401-3453  
E-Mail [femin@jca.apc.org](mailto:femin@jca.apc.org)

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

見本紙  
ご請求下さい!

大阪支局  
〒530-0041  
大阪市北区天神町  
3-10-8-404  
& FAX 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ/毎月5・15・25日発行  
購読料:年間9,000円・半年4,500円(送料込み)

自分で  
考える人と  
一緒に  
考えたい。



## 沖縄語（うちなあぐち）の 継承・普及でNPO法人誕生

桑江 テル子

「お国なまりはふるさとの手形」と言われます。あゝ読者の貴方は、どんなお国言葉をお持ちですか？

沖縄のことは、日本の古語・言葉語がそのまま生きているのも数多く見受けられ、「言語学の変化や歴史を知る上でも貴重な存在だ」と言われています。しかしながら、琉球国が亡び、藩となり県となっていく体制変化のなかで、あるいは昭和十年代、皇民化・日本人化が進むなかで、標準語励行運動が展開され、琉球のことは劣等なものと思われ、「方言僕滅運動」へと、進んでしまい、沖縄語を使う児童・生徒には、罰と

して「方言札」を、首から掛けられました。第二次大戦末期の沖縄地上戦の時は、「方言を話す者はスパイとして処罰すべし」との軍命が下され、犠牲になった人も、少なくありません。

しかし、戦後の復興期に、人びとの心をいやしてくれたのは三味線であり、琉球舞踊、組踊り、民謡、民族芸能など、琉球語を基調とする伝統の芸能でした。さまざまな抑圧や弾圧の中でも、芸能の中の琉球語（まさに独自の文化）を消し去ることは、できなかったのです。

とは言え、六〇代以上の、戦前生ま

れの人は、そのうちなあぐちを話すことができませんが、戦後派は、「聞けるが、話せない」実情があります。古典音楽や琉舞が評価され、国指定の人間国宝が生まれ、芸能全盛期を迎え、沖縄の独自性が尊重される時代になりました。

そこで沖縄県議会は、二〇〇六年に、九月十八日を「島くとうばの日」とする条例を制定。その普及を促進することにしました。すでに二〇年ほど前から沖縄語普及協議会が結成され、暮らしの中の言葉をはじめ、昔話、琉歌を広めたり、初心者や観光客用のやさしい沖縄語の紹介に尽

# 沖縄から

力していました。

県条例発足を契機に、各地で個性豊かな地方なまりで話す「島くとうばで語る大会」が開かれ、子どもも大人も誇りを持って沖縄語を話す気風が出来たのです。

去る十月十一日、沖縄で初のNPO法人、「沖縄県うちなあぐち会」が結成され、講座の開催をはじめ、幅広く継承・普及活動に取り組む方針を確認しました。また、沖縄語の仮名表記は課題の一つで、公認というか定まった表記法は確立されていませんので、NPOでは後述の船津さんが研究考案した沖縄文字の普及にも、一役買うことになっています。幼い頃、五十音を覚えたように、日本語にも漢語にもない、二十八文字を、大人も子どもも、しつかり・ゆつくり書き覚えることになります。

筆者も同法人の理事で、目下講師として県内各地に出向いています。

関心のある方は、お問い合わせください。

① 沖縄県うちなあぐち会  
(電話)〇九八―九三七―五九九〇  
② 船津好明・沖縄語教育支援文庫  
(電話・FAX)〇四二―四六七―一二七三

## 沖縄文字一覧

1 内は沖縄語辞典による読み方

|        |           |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| ぎ      | ぐ         | き      | く      | か      | こ      | か      | こ      | で      | ど      | て      | と      | と      | と      | と      |
| [gi]   | [gu]      | [ki]   | [ku]   | [ka]   | [ko]   | [ka]   | [ko]   | [do]   | [do]   | [to]   | [to]   | [to]   | [to]   | [to]   |
| かき(容ほ) | ぐく(屋敷、地名) | きく(容ほ) | くく(容ほ) | かか(容ほ) | ここ(容ほ) | かか(容ほ) | ここ(容ほ) | でで(容ほ) | どど(容ほ) | てて(容ほ) | とと(容ほ) | とと(容ほ) | とと(容ほ) | とと(容ほ) |
| よ      | ゆ         | ゆ      | ゆ      | や      | や      | へ      | ふ      | ひ      | ふ      | は      | ふ      | げ      | く      | く      |
| [yo]   | [yu]      | [yu]   | [yu]   | [ya]   | [ya]   | [he]   | [fu]   | [hi]   | [fu]   | [ha]   | [fu]   | [ge]   | [ku]   | [ku]   |
| よん(容ほ) | ゆん(容ほ)    | ゆん(容ほ) | ゆん(容ほ) | やん(容ほ) | やん(容ほ) | へん(容ほ) | ふん(容ほ) | ひん(容ほ) | ふん(容ほ) | はん(容ほ) | ふん(容ほ) | げん(容ほ) | くん(容ほ) | くん(容ほ) |
| を      | お         | え      | え      | う      | を      | い      | い      | ん      | ん      | る      | る      | る      | る      | あ      |
| [o]    | [o]       | [e]    | [e]    | [u]    | [o]    | [i]    | [i]    | [n]    | [n]    | [ru]   | [ru]   | [ru]   | [ru]   | [a]    |
| をい(容ほ) | おい(容ほ)    | えい(容ほ) | えい(容ほ) | うい(容ほ) | をい(容ほ) | い(容ほ)  | い(容ほ)  | ん(容ほ)  | ん(容ほ)  | る(容ほ)  | る(容ほ)  | る(容ほ)  | る(容ほ)  | あ(容ほ)  |

# 中越震災から四年目の山古志

押見操子

## 柏崎から山古志へ

十月十九日・日曜日は、とても天気が良かった。それに、夫に差し迫った仕事もなかった。それで、ドライブに行くことにした。家の仕事もしたかったし、ごろごろして過ごしたかったのだが、夫とのコミュニケーションも、とても大事なので、車に乗った。車中、私たちは、ずっとなんやかんやとしやべっていた。内容は、たあいなことなのだが。

新潟県知事選挙の日でもあった。

「結果が見えている選挙だから、投票は後でもいいか」と言いながらも、朝一番にちゃんと投票をした。

投票所で、夫の同級生と会う。  
「投票率が少ないぞ」と彼は言った。やはり投票率は最低だった。

私の職場のそばを通って、長岡市に、はいった。旧小国町である。この合併で、刈羽郡は、西山町と高柳町が柏崎市と合併。小国町は長岡市に入った。刈羽村はとも合併しなかった。小国町も中越地震でかなりの被害を受けた。

道は小千谷市に続く。信濃川を渡って、小千谷駅前を左折して進む。

川沿いに妙見のがけ崩れの現場が見えてくる。今は、道は、その場所を通ってはいない。四年前のあの日、保険代理業を営む夫は、山古志の、

お客様の所に行くはずだった。夕方六時から小学校の同級会があるから、二時に約束をしていたが、都合で延期になっていた。あの道は、よく通っていた道だった。よく知っている道だった。珍しく会話が途切れる。

現場の手前で右折する。国道291号線は私たちを山古志にいざなう。中越地震の報道で、テレビで見えて衝撃を受けた、家の真ん中が川になってしまったお宅があった辺りも、復興が進んでいる。四年目の十月、山古志は、「大きなイベントはせず、静かにすごす」という話を聞いている。

今年はいろいろな事業に、ありが



## 心温まる山古志の人びと

とうの気持ちを込めるのだと聞いて、  
どういふことなのかなと思っていた。

山古志に入ったとたん、道の端に、  
青色の小さいブルが目に入った。

錦鯉屋さん？

いや、あれ？

コミュニティまつり？

いや、違う。山古志の辻で、特産  
の野菜や鯉を売り、感謝のおもてな  
しをしているのだ。

控えめに「ありがとう」の太郎旗  
もひらめいている。ああ、山古志ら  
しい。

毎日曜日に野菜などの販売をして  
いるのは知っていたし、買ったこと  
もあるが、ビニールに入った錦鯉が  
売られているのを見たのは、初めて  
だった。錦鯉のせりのシーズンなの

だろうか。

道はすばらしく良いところもあり、  
昔のままのところもある。被害の少  
なかったところは、そのままだし、  
被害のひどかったところは、可能な  
限り良くなっている。夫が、「昔の  
道は、あっち側で、ほら、あの細い  
ところ」という。沢の水を調整する  
川道が整備中だ。山は、自然の力で  
緑が復旧している。が、元のままで  
はない。

\*

震災住宅前に、交流スペースがあ  
り、日曜日には物産を売っている。  
車を止めて、降りる。まず、目に入  
ったのが鯉のビニール袋だ。三〇〇  
円、五〇〇円。ちゃんと綺麗な小さ  
い錦鯉だ。

うちの池には年を経た餌用だった  
金魚が一六匹と、めだかが二〇匹ほ

どいて、鯉は残念ながら諦めざるを  
得ない。

錦鯉は青色の小さいブルで泳い  
でいる。相場がわからないが、たぶ  
ん安いのであろう。我が家は実は庭  
に放りっぱなしの火鉢に水を張って、  
金魚とめだかを飼っている。この火  
鉢水槽は、めだか用だったのだが、  
中越沖地震の数日後になって、捨て  
金魚されていることに気がついた。

めだかと見まごう、小さい赤い金  
魚だった。閻魔市で金魚すくいをし  
たが、震災で飼えなくなつて、子供  
が、あるいは親が、捨てたものではな  
いかと想像している。めだかと同居  
していて、ずいぶん大きくなった。

野菜は地元のお母さんたちが作っ  
たものだ。夫が、まず好物のヤーコ  
ンを手に取った。りっぱなヤーコン。  
山古志ブランドとなっている。小豆、

カブ、ネギと、選んだ。

新鮮なのが、うれしい。柏崎でも、新鮮な野菜が手に入るが、つい、欲張る。後ろの台では、キムチが売られていた。六〇代と四〇代の、親子らしい韓国系の方だ。発音が、ちょっと違う。「お母さんは平成二年に来て、地震でやられて、国から大金を送ってもらって、漬物工場を再建した」と、商品の説明の合間に話す。つい、イカのキムチを買ってしまった。柏崎のほうが、よっぽど海沿いなのに。

かねて用意の保冷ぶくろに野菜やキムチを入れる。用意したのは夫である。震災以来、車には、いろいろな装備が積まれているのだ。

竹沢で道を間違えてしまった。山古志村役場、現長岡市山古志支所

前で、また、車をＵターンさせるつもりで駐車場にはいつて、また、野菜コーナーに寄ってしまった。

今度は、かぐらナンパンを買う。かぐらナンパンは、私にとっては、山古志のブランドであるかぐらナンパンはピーマンとよく似ている。ずんぐりピーマンというかんじだ。しかし、これがまた、癖になる辛さなのである。取り扱いにも注意が必要だ。汁で手がいつまでもひりひりすることまである。目をこすろうものなら、考えただけでぞっとする。でも、おいしいのである。

新潟県知事選挙に來たと思われる人びとが支所に入っていくのを見ながら、駐車場をでた。

## 「中山間地の見本」としての山古志の復興

山古志トンネルのあたりは、道がいい。トンネルも大きくて綺麗である。「山古志の復旧のための重機を入れるために、国の威信を賭けてつくった道なのだ」と夫が言う。中越地震は、「国が、中山間地を見捨てない」という覚悟を日本中に発信したケースなのだと思う。それは今も続いている。山古志の人は、そのပါတナーとして、責任を負った。

東竹沢には、Sさんご一家のお家がある。もし、おいでになったら、寄ろうと思っていたら、ちょうど、車のところに、弟さんとお父さんがいらした。

寄って、コーヒーをご馳走になることになった。Sさんも奥さんも、選挙の立会いとかで、いらつしやらなかった。夫は、Sさんを通じて、

山古志とご縁ができた。Sさん、弟さん、Sさんの奥さん、お父さん、お子さん方。尊敬すべき山古志人である。

弟さんとは初対面であつたが、いつも夫から聞いていたので、初めて会った気がしなかった。

趣味の写真を見せていただいた。震災の写真も、紅葉や雪景色や花や蜘蛛や、彼の興味の赴くままに、自然に混じっていた。

彼は車椅子で生活している。地震の後、彼は施設に、お父さんは他県の娘さんの所に、Sさん夫婦と子どもたちは長岡ニュータウンの仮設住宅に、と、ばらばらになった。しかし、住宅を再建し、また一緒に住んでいる。なにげなくお暮らしたが、そのご苦労たるや……。施設にいたる間に、本を読んだり、インターネ

ットで調べたりして、コーヒー豆を炒る方法を会得した」と言つて、おいしいコーヒーをいれてくださった。その二階の窓からは、秋の山と、抜けるような青空が見えていた。

良い道を行くと、震災ダムが見える。今年の夏は雨が少なく、水が少ないようにも見えたが、河道閉塞は大規模である。さすがに時の流れであろうか、「はじめて見た時の残骸が、今も川面に痛々し」というありさまではない。ダムの底に集落が眠っているというところはあるが、このような出来方は、どう考えればよいのか。人間の力や計画と、自然の力が違いすぎる。でも、人間の力や計画は、また、続いていく。

小松倉の集落に入ると、道は、ま

た狭くなった。なんだか無性になつた気がするところだ。道沿いに、どうらくカフェがある。カフェと言つても、山古志の郷土料理だと聞いている。実は入ったことがないのだが、有名な震災語り部の方が、いるそうだ。

## たくさんある山古志の成功談

今年の二月だったか、新潟県女性財団主催の、中越沖復興を意図した講座が柏崎であり、それに参加した(二〇〇〇円で三回、お得だった)。

そのなかに、山古志の小松倉に住んで、仮設住宅に住み、どんよりしていた女性たちと共に起業して、いきいきと過ごしている女性の会があった。そのお話のおもしろいこと。女性財団の講座は三回とも面白かったが、この会は山古志の実体験なの

で、特に興味深かった。

山でなら、主体性を持って暮らしていけるのに、仮設住宅では、むずかしい。コンビニで、孫に何か買ってやらなければならない。それも、お金を使って。野菜を買うことも違和感がある。そんな生活の中から、山古志で儲けることを考えた。山古志のもてなしと、震災語り部、どうらくカフェ。……映画になる話ではないか。山古志は映画になりそうな話がたくさんある。「マリと子犬の物語」は、そのひとつにすぎない。どうらくカフェの皆さんの、経営のご健闘を、切にお祈りする。

## 地域住民から手作りした中山隧道

午前中のメインイベント、中山隧道に到着する。十時半ごろだ。駐車

場にはだれもいない。野菜販売のお店の人以外いない。「帰りに買うね」と声をかけて、中山隧道にはいる。もちろん、二人とも、かねて用意の懐中電灯を持っている。中は、真つ暗なのだ。本当に凄いとこなのだ。長い引用だが、読んでほしい。

[http://homepage3.nifty.com/eiji\\_iroh/nakayamazuidou.html](http://homepage3.nifty.com/eiji_iroh/nakayamazuidou.html)

この隧道は、〈中山隧道〉という。

山古志村小松倉から広神村水沢新田を結ぶ全長八七七メートルの隧道である。人を通す手掘りの隧道としては、日本一の長さといわれている。

この中山隧道は、小松倉から広神村、小出町への重要な生活道路として集落を支えてきたが、平成十年十二月、国道291号、道路改築工事による新しい中山トンネルの開通により、

約五〇年に及ぶ「隧道としての役割」を終えた。

ここ小松倉集落は、山古志村の東側の最深部に位置し、周囲を山塊に囲まれ、当時、村民は、どこへ行くにも峠越えを強いられていた。米や木炭など多くの荷物を運ぶ交通は、苦難を伴い、不便を極めた。特に冬は、四メートルを超える積雪のため、峠越えもままならず、急病人など、いく人かの犠牲者も出ていた。

それらの逆境に立ち向かい、地域住民の生命と生活を守るため、先人たちが隧道掘削を思い立ち、昭和八年から十六年の歳月を費やし、手掘りで掘り抜いた隧道が、この中山隧道である。昭和二十四年の開通当時は922メートルであったが、水沢口付近での崩壊などにより、現在の長さに至っている。今でもツルハシの

跡が当時のまま残り、先人たちの、偉大なエネルギーと、苦労と感動を伝えてくれる。

このように、この中山隧道は、「歴史的にも文化的にも優れた価値が認められ、また、地域住民自ら、隧道掘削を決意して、掘り抜いた実状が、公共事業の原点にあたることから、〈近代土木遺産〉として、トンネル技術者、地質関係者など、多くの技術者の注目を集めている」と、入り口の看板に書いてある。

インターネットで調べた。自分たちのために手掘りで山をくりぬいたのである。ツルハシで。昭和八年から、延々と十六年かかって。初めてトンネルを通った時の感動は、今でも忘れられない。

中越震災後、一年ほどたった時だ

った。小松倉のほうから入ったが、

隧道の入り口は、なんだか壊れかかっている、電気はつかなかったし、電灯は崩れていて、ぶらぶらだった。

入り口からすぐに真っ暗になる。

懐中電灯を持っているが、怖い。

足元に水溜りがある。夫のリュックを、しつかり掴んで、全身を耳にして進んだ。

ときどき展示があるが、それどころではない。外界とは温度差があって、冷蔵庫の中にいるようだった。

こんなところで、また地震がきたら。

ぜったい埋まる！

はるか遠くに、明かりが見える。

ほっとした。

隧道を抜ける。出口は、中山トンネルの出口の斜面の途中にあり、左側には小天狗と書かれた小さい石の柱があった。

## 人びとを守った中山トンネル

日の光がなんとなくありがたかった。夫が「さあ、もどろぞ」と言ったときには、「え、冗談でしょ！」と言ってしまった。

手掘りのトンネルを自動車で通る話を聞きつつ、ぜったいむりだ、と思った。(手掘りのトンネルだ。徒歩で通る、大八車・自転車を通ることを想定して掘ったのだろう。しかし自動車の時代になり、この隧道を、地域の人たちは自動車で通っていた。Sさんの弟さんの話では、まず車を降り、隧道に、「お——い」と呼びかけ、耳を澄ます。気配がないと思うと、車で通り抜けたという。もちろん、すれ違いはできない。信じられない話だ。Sさんの話だと、中山トンネルを造った技師が、「素

人が造ったにしては、ものすごくまっすぐだ」と評価したという。

平成十年までは、この隧道は使われていた。つい、このあいだである。子どもの急病などで、このトンネルを走った人もいただろう。その昔は、トンネルがないがゆえに、子どもを亡くした人もいただろう。そして、何年もツルハシを振るった人もいるのかもしれない。地域のために。

山古志は、ただ、山古志であるわけではない。天は自らを助けるものを助けるのだ。

トンネルに入るのは、今回で四度目か五度目。今は、訪問するのが楽しみにってきた。ぜひ、若い人に隧道を見せたいものである。まずは手始めに、わが子から。二〇〇三年には、『掘るまいか 手掘り中山隧道の記録』監督・橋本信一16ミリデ

ジタルカラー八三分が作られた。(押見家にもあるはずだが、中越沖地震のごたごたでどこへ行ったのか、ちよつと見つからない。)同じ監督が『二〇〇〇年の山古志』という作品を作るそうである。楽しみだ。

トンネルは、結局五〇分ぐらいかけて歩いた。出口では観光客らしいひとに小松倉の人が説明していた。「群馬弁護士会」と、バスに書いてあった。

中山隧道のお店で、春に来た時に、掘りたての山芋を、とても安く買った。またまた野菜を買った。枝豆二袋、ヤーコン二袋。

「この二〇〇円のヤーコンと一〇〇円のヤーコンと何が違うの」と夫が聞いた。

「作った人が違う」  
「そうか、じゃ一〇〇円の二つ」

冗談もうれしい。

その上、かぐらナンバンみそや鯉の甘露煮も買った。保冷ケースに収納する。帰っておすそ分けができることで、わくわくした。

\*

私は柏崎市に住んでいる。山古志に住んでいるわけではない。たまたま十月十九日に、山古志を通ったにすぎない。長岡市山古志。町村合併で、また違った展開をみせているのだろう。

「これは、正しくないレポートである」と、山古志の方は不愉快に思いになるかもしれないが、ひとつの情報としてご報告した。わが町に引き比べて、先達に頑張っしてほしいとの思いをこめて、掲載させていだいた。

(二〇〇八年十月二三日)

家庭に 学校に  
**今こそぬくもりを**

倉田 侃司著



四六判 150 ページ ¥1,200

人が人を かんたんに傷つけ 時には殺す

恐ろしい日本に なりました

それは、なぜ？ 防ぐ方法は？

教育学の教授歴 50 年の倉田侃司先生が  
家庭で、学校で、「人の心にぬくもりを取り戻す方法」を  
体験に基づいて披瀝して下さいました。

**BOC から期待の新刊 11 月下旬発売！**

〈連載〉台所の科学力！

# 足もとから科学しよう

## 第4話

### 微生物と仲良くして ステキな暮らしを！

松崎早苗

(環境と健康の会代表、放送大学大学院客員教授)

生物の専門家でもない私が、微生物の話を背こうというのは、おかしいと思われるでしょうが、いま、微生物に、魅せられているのです。硬い物理の話から、ちよつと軟らかい話に転換します。

#### 〈植物性乳酸菌〉なんて、ない！

一、二年前でしょうか、「植物性乳酸菌」という、キャッチフレーズが、ヨーグルト会社から出され、健康ブームに乗って、突然、売り上げを伸ばしました。ところが、微生物学者たちは、びっくり。「なに？微生物に植物性も動物性もあるはずないじゃないか」というわけです。しかし、消費者は、そんなことは知りません。その無知に、ヨーグルト会社は、つけ入ったわけです。

微生物とは、細菌(バクテリア)と酵母ですが、定義は、結構難しいのです。基本からいきますと、皆さんは、「生物界は、植物と動物に大別され、それらは原始的な微生物から進化したもの」と、思っておいででしょうが、じつは、原始的な微生物群(細菌)から植物と動物が分かれたのは、かなり早い時期で、その後、微生物も、独自の進化をして



いるので、現在の微生物を、植物や動物の概念から理解することは、できないのです。

今は「健康ブーム」なので、「植物性云々と言えば、消費者が飛びつく」と考えたら、そのとおりになったのです。私たちの無知につけ入る方法は、いくらでもあります。落ち着いて物事の本質を考えるようにしないと、どこへ連れて行かれるかわかりません。

### 〈生物界を植物と動物に大別する〉のは、間違い！

話は横道にそれてしまいましたが、微生物界のことに戻りましょう。私の尊敬する微生物学者（とくに細胞進化論）のリン・マーギュリスは、息子のだリオ・セーガン（宇宙学者カール・セーガンは、リンの前夫）と、多くの本を背いています。その中で、生物界を手のひらの絵で表しています。手首に原核生物が生まれて、それが五本の指に進化していくわけですが、手のひらの部分では、まだ植物も動物も生まれていません。何種類かの単細胞生物群が生まれて、手のひらの中ごろで互いの取り込みが起こったなかで、ある細胞群がミトコンドリアを、別の細胞群が葉緑体を、

自分の細胞内に取り込んで独自進化を始めます。それが、動物細胞と植物細胞です。ミトコンドリアも葉緑体も持たない原生生物は、それはそれとして、さまざまな進化をして大きな群を形成し、小指として残ります。そのほかに菌類（キノコ類）がありますが、これを、人差し指とします。手のひらは、原核生物か、他の生物群を生んだもので、他の四本の指を進化させて消えたのではなく、依然として存在しているので、手のひらと親指で示します。

これがモネラ界と呼ばれ、原核生物群、すなわち細菌です。おさらいしますと、手のひらから親指にかけてが、モネラ界と呼ばれる細菌類、人差し指が菌類（キノコ類）、中指が動物界、薬指が植物界、小指が原生生物です。

ですから、「植物性乳酸菌」と聞いて、微生物学者は腰を抜かしたわけです。キノコ類を菌類と呼んでいること、細菌類があまりにも多彩であることから、言葉上の混乱があるのは、事実です。

### 〈酵母〉は、何の仲間？

ところで、食品などの発酵に関与している酵母があらま

すが、これは、どこに分類されるのでしょうか？

イーストとも呼びますが、菌類に分類されます。

ですから乳酸菌は、菌類であって、植物ではありません。

でも、菌類は、とても複雑なので、わかりにくいのです。

もう一人の尊敬する学者、藤田紘一郎先生の、『寄生虫博士のおさらい生物学』には、酵母菌を植物に分類してあって、「ちよつと先生、違うんじゃないませんか？」と、言いたくなっていました。

## 《微生物》の範囲は？

では、動物界と植物界以外を総称して「微生物」と言うてよいのか、といえ、そうとも言えないので。生物界を大きく分ければ、「原核生物」と「真核生物」に分けられます。「原核生物」が、最初に現れた単細胞生物です。つぎに進化して生まれたのが「真核生物」で、これが単細胞から始まって「多細胞生物群」に進化しました。

「菌類」は、単細胞の真核生物ではありますが、中には非常に変わったものがあって、地球で一番重量の大きな生物にさえなり得るのです。「大樹に寄生すれば」の

話ですが。また、ペニシリンを生んだカビも、単細胞菌類です。

そこで、私たちが耳にする「なにに菌」は、微生物で、「細菌（バクテリア）」と、キノコ以外の菌類（酵母、カビなど）を含む」と考えておきます。

## 《微生物》の活用で、家じゅうピカピカ！

ところで、私が、なぜ微生物に魅せられているか、というと、台所の発酵性食品から微生物液体をつくってみたところ、大変な能力をもっていることが、わかったからです。皆さんはEM菌という名前を聞いたことがあるでしょう。二〇年以上前に、下水処理や生ゴミ発酵剤として、これの特許が認められたとき、微生物関係の研究者たちは、「そのような微生物は自然界にいくらでもあるのに、どうして特許として認められるのか？」と、疑問を出しました。

しかし、特許制度は強力なもので、すっかり商売として定着してしまいました。

自然界にいる同様の微生物は、無数と言つてよいでしょう。それらを積極的に利用する試みが、あちらこちらであ

ります。

山形県の長井市では、近くの山から見つけた菌で、地域の生ゴミを分解して肥料にしています。彼らの菌は「山ノ神」と呼ばれています。また、愛媛県では、県内の畜産業から出る糞尿の処理を支援するために、「えひめA・I・1（アイイチ）」を開発しました。

どちらも、特許は、とっていません。

私は、「えひめA・I・1（アイイチ）」をいただいて、使ってみました。すると、台所の掃除に、とても優れていることがわかりました。すぐに、愛媛県の開発者に連絡するとともに、私も、台所の食品からいろいろ工夫して、微生物液をつくって、いろいろな用途に、使ってみました。その結果、愛媛県のものとは、色も香りも異なる液が、いろいろできました。

## 洗剤も、スキン・ローションも、「全部、お手製」

その使い道は、台所のシンクやレンジの掃除のほか、ガラス磨き、床掃除、衣類の洗濯、さらに、入浴剤、シャンプール、スキン・ローションと、広がっていきました。

もちろん、コンポストの発酵促進や、生ゴミの消臭にも威力を発揮しました。私は、これに、「バイオフレンズ」(「いのちの友」と命名しました)。

作り方は簡単です。

米ぬか小さじ1、ヨーグルト大匙1(古いのがよい)、納豆5粒。それぞれを別々に100ccか200ccの広口瓶に入れて、粗製の砂糖を小匙1と、水(塩素の入っていない)を入れます。よく振って、常温で2〜3日発酵させます。季節によって調整します。その後、三種類の上澄み液を混ぜれば、原液の出来上がりです。

すこしすっぱいような、発酵独特のにおいがします。

原液1に、米のとき汁9と、ときどき砂糖少々を加えてボトルに入れ、一日一回、振ってやります。蓋は緩くしておきます。これで、いくらでも増やせます。常温で保存。真夏に旅行など長期不在する時だけ、冷蔵庫に入れます。上澄み液を使います。

長い間使わなかったりすると、いやな臭いになることがあります。そのときは肥料にしたり、生ゴミの分解に使います。積極的に良いにしたいときは、庭のハーブ

をつまんで入れてやりますと、お気に入りのバイオフレンズができます。米のとき汁は、玄米のほうが、白米より、うまくできます。

このバイオフレンズを多くの人が使ってくれて、「うがいによい」とか、「水虫が治った」とか、「数年間も痒くて、いつもカサブタになっていたところが、無くなってしまった」とか、「アカギレが楽になった」とか、報告してくれそうです。さて、この多様な能力は、どうして生まれるのだろう、と勉強することになりました。二〇〇四年のことです。

## 〈微生物の能力〉

微生物が作り出すものは、①アミノ酸、②抗生物質、③界面活性剤、④酵素、⑤バイオフィルムなどです。

アミノ酸は、発酵食品の「うまみ」ですね。糠づけがおいしいのも、魚の干物がおいしいのも、このためです。

前に、ペニシリンに触れましたが、いろいろな抗生物質をつくります。外敵から身を守るためです。抗生物質以外に、さまざまな界面活性物質をつくります。

## シンクもピカピカ、風呂場もピカピカ

また、フィルム状の繊維、バイオフィルムは、自分たちの住みかのようにです。酵素をつくります。

この酵素で、有機物の速やかな発酵、分解が実現します。台所のシンクやレンジの汚れ、衣類の汚れは、ほとんどが、有機物ですから、よく分解されます。同様に、皮膚の角質も、もちろん有機物ですから、よく落ちます。

風呂場に使ったところ、黒かびが、面白いように消えました。「これは抗生物質のせいに違いない」と思い、研究しようと試みましたが、なにぶん、微小な世界のことですので、成功しませんでした。

酵素で分解することは、「微生物が食べる」とも表現されます。藤田紘一郎先生は寄生虫博士ですが、寄生虫を広げて、微生物、すなわち常在菌まで含めて、話をされます。

私たちの皮膚や消化管には、常在菌がいっぱい居ます。それらが、皮膚から分泌される脂質や、剝がれ落ちた古い皮膚を食べて掃除してくれるので、私たちの皮膚は、いつも、きれいでいられるということです。それがいいと、た

だれてしまつて、病原性の細菌に取り付かれやすいのです。ですから、むやみに殺菌したり洗い流したりするのは、よくないのです。

微生物の教科書『ブラック微生物学』に、「かつて、抗生物質を服用すると、体内の常在菌まで殺してしまうので、たとえば、膾などがただれるが、そのときは生きた乳酸菌を塗つた」と書かれています。私の娘が言うのに、アメリカでは、抗生物質を服用したら、「ヨーグルト（生きた乳酸菌がいるもの）を、たくさん食べるように指示される」とのことです。日本では、そのような指導を聞いたことはありません。

いわゆる「洗剤」は、界面活性剤ですね。界面活性剤の働きは、表面張力を小さくして、隙間にまで水が入り込めるようにすることです。自然界で、これがつくられているのですから、繊維の間に入り込んでいつて、酵素で、汚れを分解してくれますから、とても効率のよい洗剤となります。

合成洗剤や石鹼とちがつて、泡が出ません。カスが出ません。すすぎが至つて簡単です。この微生物液を使えば、ついでに洗濯機の垢まで、きれいにしてくれます。

酵素にも多種類あるわけですが、このバイオフレンズは肉の脂を、よく分解してくれますが、魚の脂は、それほど分解しません。それでもゴミとなつた魚介類の嫌な臭いは消します。なにぶんバイオフレンズは混合微生物ですので、こうした理由を説明することはできません。微生物の研究は、必ず単離して一種類にしなければならぬからです。

普通、「なにに菌」と聞くと、たいいていの人は、病原性細菌を思い浮かべます。しかし、病原性をもつ細菌は、ごく少なくて、大部分は、人に利益があるのです。研究が、病氣ばかりに偏つてしまつたので、〈細菌といえは「バイキン」〉という觀念が、できてしまつたのです。こういう傾向は、昆虫といえは「害虫」、草といえは「雑草」、といふ觀念ができてしまつているのと同じで、研究者たち、ひいては、国の科学研究政策に、かなりの責任があります。一般の人びとが、どうして、こうも生き物を殺しまくるのか、そのための化学物質を、喜び勇んで使うのか、ということに、つながります。

〈花の香り〉も〈色〉も、移せます

微生物は、目で見えるのだろうか？

光学顕微鏡で観察してみました。

バクテリアは1ミクロン、酵母は5〜10ミクロンです。

バクテリアは外形が見えるだけで、内部構造がわかりません。

バイオフレンズには、1ミクロンで、球型と棒型のバクテリアが多数いて、酵母ほどの大きさのものもありました。

しかし、1か月ほど経ったものは、ほとんどバクテリアになっていました。酵母は、バクテリアの餌になったのかもありません。

バイオフレンズを開発するうち、「よいにおいに、してみよう」と思いついて、試してみると、草木や花のにおいを移しとることができるようになりました。また、色も移しとることができるようになりました。

これは面白い！

つまり、草木や花には、それぞれに特有の微生物が棲んでいるらしいのです。

梅の実を入れた液には、球型。タケノコの皮を入れた液には、非常に細長い、バクテリアが見えました。

アマチュアの私が頑張って買える顕微鏡は五千倍止まりなので、残念ながら、型以上のことは、調べられません。

それでも、バクテリアが棲んでいる植物と、もっと大きな微生物（酵母くらい）が棲んでいる植物があるのがわかり、その微生物が、色やにおいと関係していることが、わかりました。

バラの花びらの色と香りは、こうしてバイオフレンズ液の中に移し取って、冷蔵庫で一年以上、保存しています。

## 自然界は〈微生物〉で満ちている

バイオフレンズを家で使用していると、とても〈微生物リッチ〉な環境になりました。台所の三角コーナーの臭い消しや、家の掃除のために、しょっちゅう、スプレーしているからです。

物が腐敗しにくくなり、ご飯が甘酒になってきます。

昔から、酒蔵や味噌蔵には、発酵菌が棲みついでいて、他の腐敗菌を寄せ付けない、とか、蚊が出ない、などと、言われてきたそうです。私の家も、\*\*蔵に近づいて来たのかもしれない。

でも、微生物は生き物ですから、混合していれば、いろいろな条件で、どれが優勢になるかわかりません。面倒を

みないでよくと、時には嫌なにおいになることがあります。それは、すぐに肥料に使ってしまいます。尿素やアンモニアができてきたと考えれば、肥料に最適ですから。

## 〈殺菌〉しすぎると、〈ビヨーク〉になる

現在の普通の生活では、汚れを〈病原性〉と考えて、何もかも殺菌してしまいます。水道水は塩素殺菌されていますし、洗濯用品、掃除用品、防虫用品、飲み薬、塗り薬などによつて、細菌は、すべて殺されてしまいます。常在菌層が、きわめて貧弱になっているものと想像されます。そのため、過敏症になったり、病気になることがあります。考えられます。身の回りに、多様な常在菌をたつぷり住まわせておくと、気持ちよく生活できます。

糠づけ、一夜づけ、梅干、ラッキョウ、味噌、甘酒、一夜干しなどなど、一段とおいしくなること請け合いです。

ヨーグルトも上手に育てると、いろいろなチーズの味が、楽しめます。そういえば「ライスチーズを作った」という新聞記事が、最近ありましたね。

私は、バイオフィレンズを発酵剤としてパンをつくっています。各種アミノ酸が含まれて、すばらしい味です。

バイオフィレンズをやり始めてから、たとえば「汚れとは何か」についての常識を疑うようになりました。

今の「汚れを落とす作業」は、場所を移すだけ。

つまり、目の前から下水処理場や焼却炉に移すだけで、ちっとも本質的によこれを取つてはいない、と思うようになりました。

結局、「本質的に汚れを掃除してくれる」のは、微生物、あるいは、もう少し広く言えば、小さな生物だけであることが、理解できるようになりました。

今の時代は、ペットの糞を、微生物も、小さな生物も、食べてくれないそうですね。だから、いつまでも汚いまま存在しているのです。ペットが食べている食品が人工化学物質まみれで、そんな危険なものには、野生の微生物は、寄りつかないでしょう。

もっともっと「微生物」を大切に、「きれいな」環境にしましょう。環境の多様性を取り戻すには、微生物の視点を忘れないことが大切です。



## 『軍隊のない国家』

27の国々と人びと』

前田 朗著

日本評論社刊

四六判二五五頁 一九〇〇円十税

民俗学者・宮本常一を「旅する巨人」と言ったのは、佐野眞一氏であった。宮本常一は、生涯の四〇〇〇日を調査のための旅に過ごし、三〇〇〇か所以上を回った、とのことである。その伝で言うと、

前田朗さんは、さしずめ「旅する平和人<sup>へいわびと</sup>」と、呼ぶことができる。私の知りうる限りでは、一九九〇年代には、毎年、何回かはジュネーブに出かけられ、9・11事件以降は、アフガニスタン、パキスタン、イラク、トルコ、ニューヨーク、

ムンバイなどに行かれた。

国内各地も回られた。日本軍「慰安婦」問題の解決、ブッシュの「対テロ戦争」の国際人道法違反、戦争責任追及などのためであった。

戦争を止め平和を構築するため、そのための方法・運動のあり方を探るため、市民・NGO・研究者等と協同・交流するために、前田さんは、どこにでも出かけられた。

その前田さんが、二〇〇五年から、ほぼ三年を費やして二七の国

を回られた。スイスのNGO軍縮を求める協会（APRED）のクリストフ・バルビー弁護士は、著した小冊子で、「世界には軍隊のない国が二七ある」と紹介した。

その国を実際に訪問し、調査する旅を前田さんは思いつかれたのである。そして、その旅行記をまとめたものが『軍隊のない国家——27の国々と人びと』（日本評論社）である。

「軍隊のない国家の現状を明らかにしつつ、憲法第九条が本来は持っていたはずの歴史的意義を、平和運動が十分に活かしきれなかったこと、憲法を使いこなすことができる、憲法を使いこなすこと、今後の平和運動の課題を確認したい」



こんな問題意識で、前田さんは、二七の国を訪ねられた。

確かに私たちは、世界に誇つてよい平和憲法、第9条を持つてきた。しかし、「日本政府は第9条を空文化してきた」——日米安保で、米軍駐留を認め、朝鮮戦争・ベトナム戦争の特需で経済成長を遂げ、今や自衛隊の海外派兵を、常態化させている。それに対し、「私たち反戦平和運動はどうであつたか」——第9条をボロ雑巾になるほど「使う」ことをしてきたか。二七の軍隊のない国家を巡る旅は、これに対する答を探す旅でもあつた。

ミクロネシア・ポリネシア・メラネシア、インド洋、ヨーロッパ、そして中米・カリブ海、軍隊のな

い国ぐにを実際に訪ねて、前田さんは、こう結論づける——「第9条の世界は、絵空事でも、手の届かない夢想でもなく、私たちの努力によって世界を変えることで達成できる理念である」

「軍隊のない国家はない」——そんな固定観念は、実証的に否定された。軍隊がなくても国家は維持・存続できる。「軍隊のない国家と言つても小国ばかりで、日本の参考にならない」——そんなことはない、小さな国は平和を守るために外交力を高め、それを最大限に行使している。軍ではなく民(平和・人権・環境)を前面に立てて国づくりを進めている。学ぶべき点は多い。それは同時に、「憲法に軍隊を持たない」と書いてあるのに軍

隊を持つてゐる唯一の国」という恥ずべき状態を作り出してきた私たちの責任を浮かび上がらせる。

最後に、前田さんは「軍隊のない国家」を実現していくため、9条を実践し、平和な地域をつくつていくこと(無防備地域宣言運動など)、9条を国際社会に「輸出」し、軍勢力・軍隊なしで安全保障を追求していく道を切り開いていくことを提案される。

そして、「ピース・ゾーン」をつくる運動を進めるために、今年の夏には、オーランド島(非武装・自治の島)を訪ねられた。前田さんの旅は続く。

(無防備地域宣言運動  
全国ネットワーク・矢野秀喜)



## 『不在者』たちのイスラエル 占領文化とパレスチナ

田浪亜央江著

インパクト出版会刊

四六判三〇二頁 二四〇〇円＋税

田浪氏は、東京外語大学アラビア語学科の学部生だった頃から、ミシエル・クレイフイ監督の映画の上映運動にかかわり、パレスチナ問題とは十五年ほどの長い付き合いの方である。シリアへの留学を経て一橋大学言語社会研究科大学院に進み、二〇〇三年十月から二〇〇五年十二月にかけて、イスラエルのハイファ大学に留学し、イスラエルのアラブ人社会について研究した。本書は、この時の体験をもとに書かれた。

留学中から、雑誌『インパクション』に匿名で連載されていた文章は、発表当時からたいへん面白く読ませていただいたが、今回、単行本化にあたり、大幅に加筆されたらしく、非常に緻密な充実したルポルタージュとなっている。書名にある「不在者」とは、国を乗っ取られた人びとである。

イスラエル建国のため暴力的に故郷を追放されたアラブ系住民は、他国に脱出し「パレスチナ難民」となった。シオニストは追放した

人びとを「不在者」と呼び、彼らが残した家や土地を没収した。

イスラエルになってしまった故郷に踏みとどまることを許されたアラブ人もいたが、ユダヤ国家の中に、彼らのほんとうの居場所はなく、そこにいるにもかかわらず、いない者として扱われている。イスラエルの原罪を隠蔽するかのようになり、「不可視化」されているのだ。アラブの土地に侵入し、先住民を排除して誕生したシオニスト国家が抱え込んだ不安と矛盾が、この「不在者」の存在だ。

こうした構造を前提に、著者は、イスラエル社会の抱える矛盾を、理念や政治の分析ではなく、日常性の観察を通して照射しようとす

る。取り上げられるのは、いずれも日常生活のさまざまな局面で生じるにげないエピソードだが、この社会についての正確な知識に裏打ちされた鋭い観察によって、背後にある矛盾が浮かび上がる。

全体は三部仕立てになっており、まず、「征服国家の担い手として、兵役によって一つの国民になるユダヤ人社会」が観察される。自由奔放で徹底した個人主義の社会は何事もあけすけで、あからさまな議論を厭わない。次に、閉鎖的なアラブ人社会。彼らはすでに周辺国家のアラブ社会とは距離を置き、一体感は希薄だ。イスラエルの価値観を肯定し、イスラエルの国民として同等になりたいと望んでいる。最後に、差別を助長し支配に利用

されている文化的なポリテイクスが考察される。こうして、シオニスト国家に内在する歪みが、そこで生きる一人ひとり（アラブ人も、ユダヤ人も、男も、女も）に背負わせた苦悩と限界。——その中で、よりましな人生を求める人びとの奮闘や戦術、そして諦観が、生き生きと描かれている。

とくに興味深いのは、女性たちのありようだ。若いアラブの女性たち、とくに伝統的なムスリムの家庭の出身者たちが、自由奔放な個人主義のイスラエル社会の中で、自立を果たそうとしてぶつかる、困難と落とし穴。主流社会から受ける偏見と、出身社会の不寛容に挟まれて、シニカルにならずにいるのは難しい。彼女たちの立場に

は十分に同情しつつ、同世代の女性の立場から、率直な批判と苦情をぶつける著者の目線に、押し付けがましさはない。

読後に心に残るのは、著者の徹底した批判精神だ。征服者であるユダヤ人の居直りとアラブ蔑視には、激しい憤りを抑えられないのだが、その一方で、彼らの差別意識を取り込んでしまい、同胞を見下すイスラエルのアラブ人に幻滅を感じ、さらには言語や文化の習得を通じてアラブを身体化してしまった自分の存在にも懐疑的にならざるをえないのだ。

エピソードは、しばしば「諦めと疲労感の吐露」で終わる。その生真面目さが、ほほえましくも感じられる。（翻訳家・中野真紀子）

## BRC、「NHKは、放送倫理違反」と決定

従軍慰安婦を扱ったNHKの番組改編問題をめぐる訴訟の東京高裁判決を報じた、同局のニュース番組について、NHKと民放でつくる第三者機関「放送と人権等権利に関する委員会(BRC)」は、六月十日、「公平、公正を欠き、放送倫理違反があった」とする決定を発表した。

決定によると、問題となったのは、〇七年一月二九日に放送されたNHKの「ニュースウォッチ9」。番組では、高裁判決の内容とともに〈不当な判決〉とするNHK側の見解を放送。さらに、「判決では、政治的圧力は認められなかった」とし、介入が疑われた政治家二人の談話を紹介した。

BRCは、「NHKが裁判の当事者であるという特殊性」を考慮すると、〈対立する相手方である女性団体側の意見に、いっさい触れず、NHKの見解だけを、放送したこと〉は、公平・公正を欠き、放送倫理違反があった、と言わざるを得ない」と認定した。

得ない」と認定した。

一方、政治的介入については、「判決の解釈の問題で、放送内容が誤りとまでは言えない」とし、「女性団体側が求めた〈放送訂正と謝罪〉は必要ない。」と判断した。

この判断に対し、〈戦争と女性への暴力・日本ネットワーク〉は、「主張が認められて、たいへん嬉しく思う。決定を受けて、報道機関としてのNHKが、十二月の最高裁判決報道を含め、今後、当事者としての立場と、客観的な報道を峻別する報道姿勢を持つことになるよう、期待したい。視聴者も、そのような観点で、今後のニュースを視聴することになるのではないかと思う。」と、声明を出した。同訴訟の上告判決は、六月十二日の予定。「今回の判決を受けて、NHKが判決をどう伝えるか」が注目される。

## 児童労働廃絶の署名を提出

発展途上国などで苛酷な労働に従事している子どもは、

ILOの発表(〇六年)で一億二六〇〇万人にのぼるが、その廃絶への日本の資金拠出はG8で最低。国内NGO十五団体でつくる(児童団体ネットワーク)(堀内光子代表)は、六月十二日、国際援助の強化を日本政府に求める署名三千人分を、小野寺外務副大臣に提出。同副大臣は、「先進国の責務として廃絶実現に頑張っていきたい」と回答した。

## NHK番組改編訴訟で、市民団体が逆転敗訴

戦争犯罪を問う民衆法廷を企画した民間団体、(戦争と女性への暴力日本ネットワーク)(パウネット)が、安倍晋三前首相(番組放送当時、官房副長官)らが、「放送前にNHK幹部に圧力をかけ、番組内容が変更された」と訴えた訴訟で、二審の東京高裁は、「取材先の期待を著しく裏切ったり、番組内容に変化があったのに説明を怠ったりすれば、賠償責任が生じる場合がある」と認めたが、七月十二日、最高裁は、憲法が保障する「表現の自由」や「報道の自由」に立って、民間団体の請求を退けた。

「取材先の期待を保護しすぎると、取材先が報道内容に対する〈拒否権〉を持つことになり、取材結果を、独自の

視点で論評して、国民の〈知る権利〉を守るという、〈報道の根幹〉が揺らぐことになる」との判断に立ち、期待権侵害による賠償」を、「取材先との明白な約束に、反した場合に限定」したもののだが、原告の(パウネット)メンバーと、弁護団は、司法記者クラブで会見。西野瑠美子共同代表は、「政治家の意に副うよう、NHK上層部が制作現場の表現の自由に不当介入し、事実がゆがめられたものだが、最高裁は、それに注目しなかった。司法の公平性に、失望している」と告発。

一方、NHK広報局は、「最高裁はNHKの主張を認め、『編集の自由』は、軽々に制限されてはならない」との認識を示した。今後も自律した編集に基づく制作を進め、報道機関の責務を果たす」と声明を発表したが、(政治とNHK)についての民衆の疑問は、解消していない。

放送番組の人権侵害を審理する(放送と人権裁判)に関する委員会(BRC)に申し立てた例は五件あるが、BRCは、うち三件に「放送倫理違反」の見解を出している。その一つは、やはり戦争特集番組で、出演した米国カリフォルニア大学準教授が、二〇〇二年、「発言部分を無断で削られた」と申し立て、〇三年、「倫理違反」を認定されたもの。

問題の民衆法廷は、故・松井やよりさんが、いのちをかけて実現した法廷だけに、内容の改変は認めがたく、NHK告発に至ったもの。

やよりさん、今回の逆転に、泉下で切歯扼腕していることだろう。

## 厚生省有職者研究会「子育て両立策」を 企業に義務づけ

「仕事と子育ての両立のための制度整備」を検討している厚生労働省の有職者研究会は、六月十二日、企業に、子どもを持つ親の短時間勤務や残業免除制度の導入を盛り込んだ報告書をまとめた。

厚生省は報告書を受け、労使の代表者の入った審議会で、具体策を検討、来年の通常国会に、育児・介護法の改正案を提出する方針を決定。

素案は、「短時間勤務などは小学三年までの子を持つ親に認めるべきだ」と強調。現行法で、すでに認められている看護休暇や、深夜業の制限も、同様、小学三年までの延長を求めた。

## 鳩山法相、「児童ポルノ規制強化」へ

洞爺湖サミットの閣僚級会合として東京都内で開催中の「G8司法・内務相会議」で、鳩山法相は、米国のムケージー司法長官と会談、「児童ポルノ画像を持つていただけの、〈単純所持〉も禁じる法案」の早期成立に向け、積極的に取り組む姿勢を示した。

〈児童の性的搾取〉は、G8会議の主要テーマの一つ。規制強化は、米国が、日本に積極的に働きかけており、二月には、シーファー駐日大使が、自民党の谷垣政調会長らに、「G8で禁止していないのは、日本とロシアだけ」と、訴えていた。

## 八戸の「美人市議」に、全国から後援者

落選した父を継いで、八戸市の市議に当選した藤川優理さん（二八）。年初、ネット掲示板に「美人すぎる市議」と背かれて以来、公式ホームページに接続が殺到。多い日には一〇万〜二〇万件も。その対応に困惑、音楽ソフトの会社を窓口を設定。ファンが全国区から海外にまで広がったが、

本人は「すっぴん」。「各政党が、〈美人〉総理候補の発掘に動き出すのでは……」と、野次馬の声も。

## EU、〈国際離婚〉の制度統一を

国籍が違う夫婦が離婚するとき、離婚を切望する側が、フィンランドなど〈離婚ししやすい国〉に駆け込んで、勝訴する例が相つぐEUでは、「二人が合意した国」の法律」を、原則に。「合意がない場合は、〈二人に最も関係のある国〉の法律を用いること」に。また、慰謝料や生活費を払わずに、外国に移住した場合は、〈当事者がいる国〉が、取り立てることとし、EU内での〈逃げ得〉を阻止する。EUでは年間約八七万件的離婚があり、うち一七万件が〈国際離婚〉というのが現状。

## 『ひめゆり』今年も、首都圏で上映

太平洋戦争末期、傷病兵の看護要員として十五〜十九歳の女学生二二人が動員され、一三三人が亡くなった〈ひめゆり学徒隊〉の証言を集めた長編映画『ひめゆり』（柴

田昌平監督）の上映が、今年も、沖縄慰霊の日（六月三日）を前に、東京、横浜、川崎、高崎など首都圏で始まり、多くの観客を集めた。

## 女性が主流——〈ケータイ小説〉

携帯で書かれ、携帯で読まれる〈ケータイ小説〉が、ブームだが、書き手のほとんどは、作家志望ではない、フツウの若い女性たち。メイン読者は、ケータイを持たない地方の女子中学生。

「女の子だからお嫁さんになればよい」という逃げ道がなくなつた〈セックスの経験がない女子中学生〉が、主体とか。

## 〈働くママ〉の子育て支援は、〈時短〉か〈残業免除〉

厚労省の〈今後の仕事と家庭の両立支援に関する研究会〉（座長・佐藤博樹東大教授）は、六月十二日、最終報告を発表。働く女性の子育て時間を確保するため、労働者が、「短時間勤務」か、「残業免除」を選択できる制度を、企業に

義務づける法整備を求めた。

子育て支援の期間を、現行の「就学前」から「小学三年」に拡大。母親の出産後八週間を「父親の産休」として、男性の育児休業取得促進を求め、育児の再取得も特例的に認められるよう、要件を緩和すべき、とした。

厚労省は、これらを盛り込んだ「育児・介護休業法改正案」を、来年の通常国会に提出することをめざしている。

現行法でも、「育児後に、子育てしながら働き続けられる仕組み」として、「①短時間勤務②フレックスタイム③始業・就業体制の繰り下げ、繰り上げ④残業の免除⑤事業所内託児所の設置」の、いずれかを講じることが、企業に義務づけられているが、六割近い企業は、何の措置も、講じていない。

このため、今回の報告書は、希望が特に多い「短時間勤務」と「残業免除」に絞って、「原則、どの企業でも労働者が選択できるようにすることが必要だ」と指摘。また、病気になる子どもの看護休暇制度についても、現行では「子どもの人数にかかわらず年五日取得」が限度だが、「人数に応じて日数を増やし、半日や時間単位で柔軟に取得できる制度が必要」と提言した。

## 東京都渋谷区、介護保険とは別枠のサービス開始

共働き家庭などの、〈日中独居高齢者〉を支援するため、東京都渋谷区は、二〇〇八年一月から、掃除や洗濯などのサービスを一時間二〇〇円で開始。千代田区も、四月から始めた。

「家族が同居していても、日中、訪問すると、高齢者の居間やトイレが汚れている例が多い」ことから、東京都大田区では、四月から、「同居家族がいても、生活援助が求められる事例集」を作成したが、〈形式上は、同居の家族〉を持つ、要介護高齢者の悩みは、尽きない。

## 野崎京子さんに、〇八年度「猿橋賞」

自然科学分野で、優れた業績をあげた女性を表彰する、「猿橋賞」。二〇〇八年度は、東大教授・野崎京子さんに。

樹脂の性質を思い通りに変えられる触媒を開発。樹脂の一種、ポリエチレンへの着色が可能になったほか、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を、樹脂の原料として有効利用できるようにした。



夫も科学者。二人の息子の産休は共に最短で、現場復帰。「好きなことにのめり込めた幸せな研究者。世の中にないモノをつくれれば不可能だったことが可能になる」と、楽天的。研究室には、冷蔵庫とポットを置き、立ち寄る学生たちとの会話から、環境問題を解くアイデアなどをはぐくむ、四四歳。

## 古希の桐島洋子さん、〈森羅塾〉をオープン

「〈船上出産〉は無料」と知って、臨月の身で、マルセイユからフランスの客船に乗り、日本到着寸前に出産した桐島さん。五〇歳で三人の子育てを卒業。「人生の収穫期を楽しむ〈林住期〉」を宣言。以来、一年の三分の一を、カナダで過ごし、競争や雑念から遠ざかり、昨年七〇歳になった。「日本に向き直って、もうひと働きしよう」と、自宅で〈森羅塾〉を始めた。「一度会って、サヨナラ」ではなく、「理解と信頼をゆつくり深めながら社会にフィードバックしていけるような〈現代の梁山泊〉」をめざす。塾生に語る自らの半生には、日本史、世界史をかぶせて、聞いている側の個人史も、ひもといてゆく。

結婚願望の今どきの若い女性。「相手の年収は一五〇万円は、ないと……」に愕然。「自立は、大事だけれど、〈女性性〉をなくして男性原理に追従することではない」と痛感して、始めた〈洋子ふう梁山泊〉は、今も、夢がいっぱい。七〇歳のいま、ますます若い。

## 〈無戸籍二世〉を、国が初めて救済

「離婚後三百日以内に生まれた子」は、いやおうなしに、〈前夫の子〉となる現行法。それを嫌った兵庫県の女性が、五月末出産した男児の出生届を、現在の居住地の自治体に提出したところ、受理され、「〈無戸籍二世〉」になるはずだった男児」に、戸籍ができた。

法務省は、「初のケースだが、〈法をはみ出した扱い〉ではない。どうすれば戸籍がつくれるか、母親と調整した」と言明。この女性を支援した〈民法772条による無国籍児家族の会〉によると、「前夫との離婚から七十三日後に、新しい夫との間の子を出産。新しい夫の戸籍に入れようとした女性は、前の夫と〈親子関係不存在確認〉などの手続きをしなければならなかったため、前夫との接触を嫌って、子

どもの出生届は、まだ出していない例もある」と言うが、一方、「新しい夫と事実婚。女性の出生証明書を添えて提出した婚姻届が自治体に受理され、その翌日出産した男児は、〈新しい夫婦の子〉として受理された」例も、出ている。〈無法な法〉を変えるためには、「〈事実婚〉の〈事実届〉をどんどん提出する」のが、早道になりそう。

## 〈ヒールつきスニーカー〉が大流行

〈スニーカー〉の歩きやすさと、パンプスの〈背が高く見える利点を合わせ持った〈ヒールつきスニーカー〉。とくに、ヒールが七センチのものが、この夏、大流行。購買層は、二〇代、六〇代。親子連れで買っていく人も。

## 児童ポルノ禁止法—— 与党も野党も、それぞれ議員立法で

何かにつけ反発する与・野党が、〈児童ポルノ禁止〉では一致。「それぞれ、議員立法で提出」の予定だが、与野党協議で、法案を一本化できるか……。

## 〈男の育休〉も、何度でも、とれる！

厚生労働省は、仕事と子育て両立支援のため、三歳未満の子を持つ社員に、「短時間勤務と残業免除制度」を企業に義務づける方針を固め、「男性の育休も、原則「一度だけ」でなく、「分割してとれるようにする」などの改正案を、来年の国会に提出する予定」と発表した。

現在の育休法は、すべての企業に対し、「短時間勤務」「残業免除」「フレックスタイム」「始業・終業の、繰り下げ、繰り上げ」「企業内託児所の設置」の五つのうち、最低一つを実施することを義務づけているが、「短時間勤務」と「残業免除」が、最も有効と判断。この二制度の導入を、企業に義務づけることにした。該当する社員が要求すれば、企業は、これを拒めず、〈父親〉も、対照にすることに。

厚労省の調査では、現在、従業員五〇〇人以上の企業では、九五％が、五つのうちのどれかを実施しているが、三〇人未満の企業では、三七％にとどまるため、まず、大企業に「短時間勤務と残業免除」を義務づけ、段階的に、全企業に広げていくことも検討する。

違反企業への罰則は設けないが、企業を個別調査して、

指導する。

また、育休は、一歳までの間に一度しか取れなかったが、二度、取れるようにする。

具体的には、「産後八週間までに育休を取った場合、その後再び、育休を取ることを認める。

分割取得を可能にすることによって、現在、1%以下の利用しかない（男性の育休取得）をうながすが、ねらい。

## 政府は、「少子化対策充実」を諒承

六月十一日、政府の社会保障国民会議は、「少子化・仕事と生活の調和分科会」（座長・阿藤誠・早大特任教授）を開き、「対策強化のため、国と地方、合わせて、一・五兆～二・四兆円程度の追加支出が必要」とした中間報告書を、大筋で諒承した。

報告は、「少子化が続くと、我が国の社会保険全体の持続可能性をおびやかすことになる。」と、警告。「緊急性の高い、保育などのサービスの充実を中心に、大胆な財政投入が、必要だ」が、論点の中心になっている。

## 〈専業主婦の夫〉にも育休を――

厚労省は、「〈専業主婦を妻に持つ夫〉も、育休休業がとれる」よう、「〈育児・介護休業法〉を改正する」方針を固め、六月十二日、報告書を出す。

「夫が育児に参加するほど、第一子出産後も妻が仕事を続ける割合が高く、夫婦で、二人目、三人目の出産を考える割合が高い」という調査結果に基づき、短時間勤務や、残業免除制度の義務化と併せて、育休・介護休業法改正案に盛り込み、来年の通常国会への提出を目指す」と、発表した。

現行法では、事業主は、「従業員が育休を希望した場合に認めなければならない」が、労使で合意すれば、「専業主婦（夫）がいる家庭の従業員を、対象外にできる」ため、事業所の七五%が、この規定を適用している。

しかし四〇歳以下の男性正社員の三割が、「育休を利用したい」と考えている実態を踏まえ、除外規定をなくして、男性の育休取得を促し、女性の子育ての負担軽減にも、つながりたい。

育休は、原則、「子どもが一歳になるまでに一回」取れる。

## 休日も「小児科診療」を！

育休を取ると、雇用保険から休業前賃金の五割が「育児休業給付」として出る。政府は、〈現在、〇・五％にすぎない、男性の育児取得率〉を、「二〇一七年までに、一〇％に引き上げること」を目指している。

## 日本で初めて。〈四一歳の女性市長〉誕生

四月末の市長選で、岡山県倉敷市に、史上最年少、「四一歳の女性市長」が誕生した。

伊東香織さん。総務省のキャリア官僚出身。〇三年から約四年間、倉敷市に出向。総務局長などを歴任。県内初の、市長公募債発行などで手腕を発揮。その後、総務省に戻っていたが、「人の話を聞くのが好きで、自分の考えも、はっきり言う」性格と、フットワークのよさに、市民二万二〇〇〇人が署名。地元から出馬を要請され、当選。

「子育てするなら倉敷で」を掲げ、さっそく、妊婦健康診査の公費負担拡大を打ち出した。

〈倉敷の営業本部長〉として、魅力を発揮したいと、〈カウルつきバイク〉に乗る行動派。市民の好感度も急上昇中。「女性市長ブーム」のハシリになるか……。

年末年始や休日には、グンと増える子どもの病氣。埼玉県加須市では、二〇〇三年度から実施していた十二〜三月の、「日曜・祝祭日と年末年始（一月一日は除く）」の午前九時〜正午診療」を、例年より一か月早めて、十一月から実施する。

加須市は、各医療機関に、一日あたり二万円を支給してきたが、市外の患者も多かったため、今年度は、近隣の騎西、大利根、北川辺の三町と分担して、一旦二万二千元に増額。一市三町以外の子どもでも、受診できる。

## 「改正・性同一性障害者法」が成立

心と体の〈性〉が一致しない人が、戸籍の性別を変更する際の条件を緩和した〈改正 性同一性障害者性別特例法〉が、十日の衆議院本会議で、全会一致で可決、成立した。

これまでは、子どもがいる場合は性別を変更できなかったが、改正後は、子どもが成人していれば、変更が認められる。

# 会と催し



## 札幌で女性の人権フォーラム

洞爺湖サミットを目前にした七月四日、G8に抗議する意味も含め、サミットにも、オルタナティブな運動にも、「女性の人権やジェンダーの視点が軽視されている」ことに抗議する〈女性の人権フォーラム〉が、札幌で開催され、国内外で活躍している一四〇人が参加。アイヌ女性二人の発言を皮切りに、女の人権を多角的に語り合った。

口火を切ったのは、二人のアイヌ女性。北海道ウタリ協会札幌支部の高木喜久江さんは、「アイヌ民族を『専従民族』とする六月六日の国会決議に感動したが、明治以来の強制的同化政策に対する日本政府の謝罪は、なく、むなしさが残った。国会決議をしたからには、アイヌの言葉、文化、差別の歴史を、学校で取りあげてほしい」と発言。

同じ札幌支部の事務局次長、多原良子さんは、アイヌの伝統的衣装で登場。「アイヌ民族は、日本からの移住者や開拓者の男性に、性の対象とされ、民族差別と性差別の、

複合的な差別を受けてきた。それを実証するために、二四一人のアイヌ女性の実態調査を行なっている。その過程で、今まで沈黙し、耐えてきた状況を、より具体的に認識し、国際会議で訴えている」と、高木さんの訴えを、さらに具体的に主張。

これらの発言に勇気を得て、〈みんなのひろば・ハンマダン〉を主宰する朝鮮人二世の金時江（キンシガン）さんは、「私は北海道で生まれ、五八年間暮らしているのに、選挙権がない。この痛みを知ってほしい」と訴えた。

障害者を代表して〈ベンチレーター使用者ネットワーク〉代表の佐藤きみよさんは、「生まれつきの障がいのため、人工呼吸器を使いながら、自立して生活し、フィリピンで生まれた子を養子として育てている。障害があってもサポートがあれば子育てもできるが、今の障害者自立支援法では、子育ての支援体制がない」とアピール。

〈共生社会をつくるセクシユアル・マイノリティ支援全国ネットワーク〉の原美奈子さんは、「セクシユアル・マ

イノリティは、学校でも家族の中でも差別されるが、差別されても、訴えるところがない。」

〈働く女性の全国センター〉代表・伊藤みどりさんは、「いま問題になっている〈貧困〉は、ずっと以前から女の問題。女の約七割は、第一子出産後、仕事をやめている。〈女の貧困〉を可視化し、ネットワークをつくりたい。」

〈全国シエルトーネット〉共同代表の近藤恵子さんは、「DV防止法は、二度の改正で改善されたが、レイプやセクハラ加害者処罰は十分でない。包括的な性暴力禁止法をつくりたい。」

沖縄で〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉の活動を続けている高里鈴代さんは、「沖縄は、島全体が米軍の駐留地。米軍の撤去が必須条件だが、〈被害を訴えられる支援〉を続け、加害者の上官の責任も追及している」と、多年の体験に立つ発言。

北海道の〈女性自衛官の人権裁判を支援する会〉の七尾寿子さんは、「自衛隊の中で頻発する女性自衛官の被害を訴え、女性自衛官が労働法などを学び、セクハラを訴えることがでえきるシステムの確立が必要」とアピールした。

第二部では、国際的な問題提起が展開され、アフリカの

アクション・エイド・インターナショナル理事会議長の、ノエリン・カバリンさんは、「サハラ以南のアフリカの、HIV感染者は世界の六七・八%。その六一%が、女性。アフリカの女性は学校に行けず、早くから労働に従事し、早婚が多いから。女性の問題を解決しなければ、エイズの感染拡大も防げない」とアピール。

また、アジア女性労働者委員会事務局長のルレア・ジャヤセーランさんは、「グローバル化によって、女性労働者の八割がインフォーマルな仕事に追いやられた。賃金が低く、職場環境は劣悪。貿易の自由化で、農村の女性は土地を追われ、人身売買にも遭っている。やむなく移住する人びとも多い。G8は、アジア諸国の債務猶予などをして、状況を変えてほしい」と訴えた。

〈日本に移住してきた女性のための、エンパワーメントセンター・カラカサン〉共同代表の西本マルドニアさんは、「人身売買」という言葉も知らず、日本に行けば、よい仕事があると信じて来日してみたら、仕事は、ほとんど売春がらみ。日本人の男性と結婚したら、毎日毎夜のDV。同じ人間なのに、なぜこんな差別を受けるのか」と告発。

〈移住労働者と連帯する人身売買禁止ネットワーク〉の、

大津恵子さんは、「改正DV防止法で、職務関係者が国籍を問わず人権を尊重する項目が入った。日本は、最大の人身売買受入れ国。包括的な人身売買禁止法が必要」と迫った。

また、「反差別国際運動」事務局次長の原由利子さんは、「搾取的移住・人身売買に関するNGO共同提言書」を、世界各地のNGOや研究者と、まとめ、七月三日にG8首脳に提出した」と報告。

最後はカバリエさんが、アフリカダンスを紹介。全員で踊って、実り多い一日を終わった。

## 「ふえみん」第五三回全国大会

二年に一度の「ふえみん（婦人民主クラブ）全国大会、第五三回大会が、七月十二日、東京で開かれ、今回から、大会代議員のほか、個人会員も議決権を持つことになり、全国から約百人が参加。活動報告の後、活動方針を協議、決定した。

活動報告では、「9条世界会議に、チケット販売の管理や、女性シンポジウムの内容構成で協力。盛会裏に意義深い会議を終え、9条改悪の流れにくさびを打ち込めたのでは」と、

建設的な報告。「男女平等・自立社会をめざす活動」では、女性労働者の六割近くが年収二百万以下など、女性の貧困化対策や、大阪の橋下知事による、大阪府立女性センター（ドーンセンター）縮小化はじめ、各地の、男女共同参画政策へのバックラッシュに抵抗している活動はじめ、全国各地での「ふえみん」の活動報告で盛り上がったが、「あごろ」同様、財政難対策も問題になり、「ふえみんの会」での購買推進が計られた。

最後に、新役員として、代表委員、共同代表に、設楽ヨシ子さん、村田孝子さんが、原案どおり、可決され、「平和憲法のもと、安心して生きられる社会をめざし、取り組んで行こう」との大会宣言を採択、閉会した。

その後、代表委員会が開催され、運営委員十三人が決定。戦後、一貫して民主的運動を続けてきた女性団体らしい全国大会に、参加者全員が満足して、散会した。

## NO！ 原子力空母 全国集会

八月に、米海軍横須賀基地に配備予定だった原子力空母、ジョージ・ワシントン号は、五月に火災事故を起こし、配備

は九月末に延期となったが、横須賀市民はじめ市民の反対は強く、七月十九日、「原子力空母の横須賀母港化を許さない全国集会」が、神奈川県横須賀市で開かれ、横須賀港を一望する公園に一万五千人が集まった。

地元代表の宇野峰雪さんは、「日本でも、かつて（原子力船むつ）が建造されたが、放射能漏れ事故を起こし、青森を中心とする全国的猛反対で解体された。横須賀に原子力空母が来れば、東京湾の魚も汚染される。海を汚すな!」と強く訴えた。

弁護士の上東正彦さんは、「三浦半島には活断層がある。地震があれば、首都圏三千万市民が死の灰を浴びて、百万人以上の死者が出る。」と告発。参加者は、「空母配備は、市民の安全とアジアの平和を脅かす」とのアピールを採択、抗議デモを展開した。

## 「憲法をめぐる情勢と〈九条の会〉の課題」

### —— 小森陽一氏の講演から

〈調布憲法ひろば〉では、毎年夏に泊まり込みで、学習と親睦を深めるための合宿を行っています。今年は、八月

二十四日、小森陽一さんをお招きしてお話をうかがいました。挨拶の後、すぐに主題に入った小森さんは、やや早口でとぎれることなく、憲法をめぐる情勢を鋭く展開してくれました。

### 二〇〇八年の憲法をめぐる状況

五月に「9条世界会議」が開かれ、四〇か国から一五四名が参加。九条が世界に広がったことを実感できた。また、朝日新聞の世論調査で、「憲法を変えない方がいい」という人が六六%。九条に限れば八〇%。二〇代でも七割が、「変えない方がいい」との結果だった。象徴的なのは、読売新聞の世論調査結果。十五年ぶりに「変えない方がいい」が多数派に。

小森さんは、突然ここで参加者に質問。「十五年前の九三年に何があったか?」と。端から一人ずつ答えさせられたが、十人ほどが答えられず。「庶民の力は、歴史を記憶し、忘れないことです。」と小森さんを嘆かせることに。

十五年前の九三年は、「小沢の乱」で、自民党が分裂し、非自民八党派連立細川内閣が成立。この年、小選挙区制が導入された。今の若い人は、小沢一郎を、野党党首として





しか認識してないが彼は、ずっと、「自民党の、中心的人物」だった。彼の派兵恒久法構想は、一貫して変わっていない。九条の解釈改憲を重ねても、自民党政権のままで、できないと判断し、別政権を作ることにより、実現しよう。だから、民主党が政権を取ったらそれをやるだろう。「政界再編」は、アメリカから与えられた小沢の使命だから。派兵恒久法は、解釈改憲より恐ろしい。どこまでもアメリカと共に（軍事）行動するものだ。

読売新聞が憲法試案を発表したのが〇四年五月。世論調査で六五%が「憲法を変えたほうがいい」との回答に、危機感を募らせた加藤周一さんらを中心に、九人が呼びかけ

人となって「九条の会」を結成。〇四年六月一〇日に記者会見をしたが、ほとんど報道されなかった。それならと、「九条の会」のメンバーが日本中を回り、講演会を行い、人びとに直接訴えた。〇五年には全国で二〇〇〇の「九条の会」が出来、現在は七千を超えている。世論が「憲法を変えないほうがいい」に変わっていったのには、「九条の会」が果たした力が大きいのは、確かだ。

去年七月の参院選で、この世論が、自民党を追い込み、安倍首相の政権放り出しにつながった。大事なものは、この世論は、メディアに左右されたものではなく、人びとが自分の意思で示した固いものだということ。

「変えない方がいい」という世論を、  
「変えてはならない」にするために

いま起きている問題を、歴史的にしっかり押さえ、よりゆるぎない草の根の意識を確かなものにしていくためには、「明文改憲勢力が、九条改憲で、どのような国にしようとしていくのか」を明確にする必要がある。

自民党の憲法草案のねらいは、九条二項の削除と「自衛軍」保持の明記。自衛軍になると、何が起こるか？

まず、「戦争放棄」のタイトルが「安全保障」と変わり、戦争を前提にしたものになっている。また（自民案）では、九条三項には「国際社会の平和と安全を確保するために、国際的に協調して行われる活動及び緊急事態における公の秩序を維持し、又は国民の生命、若しくは自由を守るための活動を行うことができる。」と書かれている。

第一番目の国際的に協調して行われる活動とは、数か国が協調して行うように受け取られるが、国連憲章では、国連加盟国の軍隊であれば、たとえ（日本）一国でも、軍事行動がとれる（四二条）ようにし、安保理が必要な措置をとるまでの間、アメリカの戦争に加担することができる（五一）条）ことになる。

第二番目、三番目は、緊急事態における公の秩序を維持するため、また国民を保護する（国民保護法がすでにできている）ために、国が必要とする行動に対して、市民が、国民の責務である公の秩序に反した場合には、軍事に関する裁判を行う軍事裁判所で裁かれる（自民案七六条三）ことになる。

「公の秩序に反する」とは、国民の要件とされる、帰属

する国や社会を、愛情と責任感と気概をもって守る責務を放棄したと見なされる場合Ⅱ（国がやるうとして、ことへの反対運動すべてが該当）。つまり、自民党憲法草案は治安維持法体制が組み込まれた憲法体系である。

結局のところ、九条二項の改憲は、日本軍をアメリカの世界戦争の道具にすることに、ほかならない。

これまでのアメリカの戦争は日本のカネで行なってきたが、今後は「日本の人口（自衛隊）を使う」ということだ。

## 二二世紀の世界と日本国憲法九条

「六カ国協議」によって朝鮮戦争を終わらせることが、東アジアのみならず、世界の平和構築に寄与することになる。日本国憲法九条が世界的に認知された今、私たちが九条を護り抜けば、そこから展望が開けるはずだ。

最後に、小森さんは、「九条と二五条は一体であること」を知らせていくなど、日常的な活動を通して九条を考えていくことが大事。あらゆる日常活動が九条につながる」と、話を締められました。

（調布憲法ひろば）世話人 三宅征子

## NUECC主催、

### 男女共同参画のための研究と実践の

### 交流推進フォーラムに参加して

毎年八月末に開かれる恒例のこの会議に、私は、八月三〇日、自校の女子高校生を引率して国立女性教育会館で行われた、「女性の理系進学を考える」分科会に参加した。

この分科会には、埼玉県（SSH）（スーパーサイエンス・ハイスクール）に指定されている女子校二校、浦和第一女子高等学校理科活動を専門的に行なっている生徒二名と、私が教職に就いている川越女子高校の理科活動専門グループ八名が、「女子高校生にとつての理系進学とは」のテーマで呼ばれた形だった。

生徒と現役理系大学院生のプレゼンのほかに、高校の理科教員、理系の大学研究者、現在研究中の早稲田大学の大学院生が、パネリストとして、「女性の理系進学をめぐる問題点」について意見交換を行なった。

我が校は、平成一八年に、（SSH）の指定を受けてから、女子高校生への理科教育のあり方を、研究してきている。その一環として、SSG（スーパーサイエンスグルー

プ）と名づけられた生徒たちが、放課後や土日を利用して、課題研究を最終目的に活動を行なっている。

SSHは、日本が科学先進国であり続けるために、高校の理科教育を改善することを目的とした研究事業だ。

我が校は、文部科学省が期待する「女性研究者を育成する」だけでなく、「次世代へ学問を継承する存在としての、女子高校生の育成」を目標としている。教育職を目指す生徒の多い本校の生徒にとつて、科学を楽しみ、科学を伝える力を身につけることは将来の理系育成を支えることにつながるのではないかと考えている。

事実、八名の本校生徒のうち、二名はすでに「理系の学問を身につけた文系人間」になることを目指している。

このフォーラムで、先輩研究者の話から、「研究を続ける場合のモデル」を示され、将来の姿をイメージすることができ、安心感を覚えた生徒もいた。

現在の女子高生は、一昔前の「女性の理系進学にはハードルが高い感」は、持ち合わせてはいないが、だからといって皆無とは言えず、漠然とした不安を持っているからだ。

しかし、目標をしつかりと持つて研究が続いている大学院生のメッセージやパネリストの言葉の中に、「文系、理

系を問わず、結局は、きちんと自分の将来を考え生きていく日々の生活こそが未来をつくっていくこと」も、教えられたようだ。実り多い一日だった。

(埼玉県立川越女子高校理科教諭 佐藤ひな子)

## アジア連帯講座

### チベット反乱と北京五輪―中国はどこへ？ 中華民族主義の鼓吹と弾圧の強化に抗して

九月六日、東京文京シビックホールで、香港「先驅社」の、丁言實さんを招いて公開講座が開催された。

#### オリンピックと大国意識

中国政府は、オリンピックを成功させることによって、その大国性を世界に威示しようとした。オリンピックの開催前は国内に対して民主的ポーズを示したにもかかわらず開催期間中には、すべてのデモ、抗議行動の申請を認めなかった。庶民は、政府に対して様々な不満を抱いている。

しかし、台湾、チベット、ウイグル等の問題に対しては、不満を表面に表さず、中国政府寄りの主張をすることも、

しばしばある。その根には錯綜した民族主義が絡んでいる。中国の主流メディアは、三月にチベットで発生した抵抗運動を、「亡命政府ダライ・ラマが背後で操っている」と報じた。民衆の中にもそう感じている者も多い。

残念なのは、中国国内の左翼、毛沢東主義者、それ以外のラジカルな人たちも、今回の問題を中国政府対ダライ・ラマの構図で捉え、その背後にあるのはアメリカ帝国主義と見なす人たちがいることだ。この対立構造では、中国政府対ダライ・ラマの問題の本質は解けないし、チベット問題を軽視してしまうのではないだろうか。

#### 少数民族の自決権のために

もう一つ例をあげよう。中国政府は、チベットその他の少数民族地区で、民族自治を実施していると言う。だが、チベット自治区の行政の長は、チベット人だけれど、中国共産党チベット地区委員会の最高指導者は、一貫して漢民族だった。中国では自治体の権力よりも、党の権力のほうが強い。

今の国家主席の胡錦濤は、一九八九年、ラサで大きな抵抗運動があった際に、チベット自治区党委員会のトップと

して、民衆の抵抗に苛酷な弾圧を加えた。また、三月十日は、一九五九年に、ダライ・ラマが中国からインドへ亡命した記念日に当たり、ラサの僧侶が平和的なデモ行進を準備していた。中国当局は、僧侶を、お寺から外へ出さない方策を実行したため、あのような反乱となった。

中国共産党が、このような弾圧を行うイデオロギー的根拠は二つある。一つは、チベットその他の少数民族と漢民族を、一つの中華民族として統一したいという考えである。

もう一つは、下から上へのさまざまな力を国家システムのなかでいっさい認めないスターリニズムである。初期の共産党綱領には、各民族の自決権が明記されていたが、毛沢東が権力を握っていく過程で自決権が後退し、歴史の中に埋め去られていった。このようなチベット問題について、私たちの立場は二つある。一つは、自決権をまず認めることだ。分離独立して新しい国をつくる権利も、逆に統一を選ぶ権利も「自決権」に含まれる。もう一つは、漢民族、チベットや台湾などの人びとが、民族や国境を隔てることなく政治的な自由と社会的平等を共に求める取り組みをするべき、という立場である。

## 基本的人権と自由の不在

最近中国政府は、「調和のある社会を作る」と、やっきになって呼びかけているが、現実には、この対極にある。

今の中国に基本的人権、自由はない。報道の自由もない。民衆が自分たちのメディアをつくることもできない。結社の自由も制限され、自立的な労働組合づくりや政府に批判的なNGOを創設することも、きわめて難しい。

個人的に物事を考えることは政府に批判されない点は、毛沢東時代よりわずかに進歩している。だが組織的な活動は弾圧対象となり、民衆の抵抗を組織する壁になっている。

## 都市労働者階級の現実

都市の労働者たちは、国有企業に勤めていた者と、地方から出稼ぎに来た人たちから成っている。一九九七年から国有企業は民営化が本格的に進められ、その過程で抵抗運動も起きた。

二〇〇〇年に、黒龍江省大慶や遼寧省遼陽で、また、二〇〇四～〇五年にかけては、四川省重慶市で民営化反対の闘争があった。政府はこれらの運動を、すべて粉碎してしまった。

出稼ぎ労働者が都市に集まって、すでに二十年余りになる。広東省には多くの工場があり、少なくとも毎日一件のストライキが起きている。しかし、中国ではストライキを法律で認めていないため、労働運動としては拡大しない。労働組合が何なのか、知らない人たちもいる。自立的な労働組合の結成を認めさせることが急務であろう。

### 知識人内部の論争と限界

また十年ほど前から、知識人の中に自由主義を信奉する者たちと、新左派と言われる人たちと、二つの流れが生まれた。前者は、言論と結社の自由等を主張し、その一方で中国のWTO加盟と政府の経済政策(新自由主義)も支持している。後者は、たとえば、民族主義新左派、毛沢東主義者、社会民主主義者など、幅広い層を指している。

新左派の主流を占める民族主義新左派は、政府の新自由主義には反対している。外資が中国民族資本のライバルとなることを危ぶみ、民族資本の発展を主張する。

さらに、中国資本主義発展の矛盾にしたがって新左派の中に新しい流れが登場しつつある。革命的な左翼を目指す知識人で、外資が中国内で荒稼ぎすることに反対し、だか

らといって中国民族資本の発展を支持するわけでもない。この流れは少数派だが、非常に若い人たちだという特徴がある。かつての体制に反対し、新しい自立的な社会主義の形成を目指している。

これらの知識人内部の論争から、未来の方向はまだ像を結んでいない。

### 労働契約法による労働者の実態

二〇〇八年一月、胡錦濤体制が一つの法律に則した労使関係の形式を目指して、労働契約法を施行した。

だが、これは、労働現場の状況と一致していない。

この法の施行にあたり政府が期待した労働者の権利を守る以前に、多くの労働者の労働条件が切り下げられて、解雇される事例も生じている。

どれだけ民主的な法律ができたとしても、中国では自立的な労働運動、労働組合の結成がなければ、法を実現することは困難である。

### 労働組合とストライキ

現在、外資系企業ではストライキが生じているけれど、これらは非合法の山猫ストだ。厳しい状況下で労働組合の結成を要求するストライキが、二〇〇六年に香港に接する開発区の日本の企業で行なわれた。さらに、二〇〇七年には、山東省のデンマーク企業で、ストライキを通して労働組合を結成した。しかしその後、これを指導した六名は、解雇されてしまった。

労働条件改善のためのストライキは、バラバラに生じて長続きしない。自発的な労働者の闘いを、どのように組織化するのが、きわめて重要になっている。

#### 農民の状況と今後

中国の農民は、一九八〇年代初めまでは、政府を信頼していた。

しかし九〇年代に入って、政府は農民からの徴収を強化したため不満が高まり、農民反乱が起きた。

現在は、農業で生活を維持することは厳しく、多くの農民は、都市に出稼ぎに行く事態になっている。それゆえ、農民の反乱は起きていない。

胡錦濤体制になって以来、農業税が廃止され、農村にお

ける義務教育が実現した。そのために、多額の資金が投資されたが、これが現場まで本当に降りているか否か、疑問符が付く。

近年、資本主義的な大規模農業が実施されつつあり、今後、中国にも、資本主義における農業の危機が発生するだろうと危ぶまれる。

#### 中国の民主主義の実現は可能か

この危機を脱し、中国社会が発展していく方向は、どこに求められるだろうか。

政府、官僚の一部や民族資本家が、民族主義を未来への宣伝に利用することはあるだろう。しかし、政府、資本家から自立した大衆の組織的な取り組みなしには、真の民主化はありえない。政府の実権派は、自由・民主主義を標榜しても、大衆闘争と手を結ぶ可能性はない。なぜなら、官僚の既得権を脅かす民主主義を実現することは、ないからだ。

一九八九年の天安門事件を分岐点として、知識人の考えは保守化している。経済発展の過程で、政府は、知識人に手厚い手当てをしたからだ。例えば、大学教員の給料を引き上げ、政府に逆らえないようにした。

今後、知識人が民主化運動を引っぱっていくことは難しく、最も厳しい現実を生きる労働者と農民の、断固とした闘争に、期待の芽を託せるかもしれない。

私たちに何ができるのか？

中国には言論の自由はなく、情報は統制されている。新しく登場してきた若い人たちには、歴史的経験も、国際的情報もない。香港では、まだ自由な言論が認められているけれども。

日本には自由な経験もあり、左翼の伝統も思っている。これらを中国内に新しく登場してきた新世代に伝えていくことが、中国の外にいる私たちの重要な役割である。

ぜひ皆さんと情報を交換しながら、共に活動を担ってほしいと思う。  
(山下一夫)

## 韓国・朝鮮人元BC級戦犯者問題の早期解決求めて

戦時中に植民地だった朝鮮・台湾から「俘虜監視員」などとして動員され、戦後日本の戦争責任を肩代わりさせられる形で処刑されたり服役させられたBC級戦犯の問題を

今年八月、NHKがETV特集とBSハイビジョン特集で取り上げ、反響を呼んだ。九月七日、麻布の「在日韓人歴史資料館」で、そのビデオを観、当事者の李鶴来さんから、関係者の話を聴く集いを開催した。

NHKのドキュメントは、戦後六三年を経た日韓の、元BC級戦犯のいまを丁寧に伝えていた。

一昨年（〇六年）韓国政府の強制動員被害真相糾明委員会がこれまで公式に調査することもなかったBC級戦犯者問題の調査と検討を行い、「被害認定」した結果、韓国社会で、戦後長く誤解され、当事者や家族が苦しんできた偏見からようやく解かれ、韓国のメディアも力を入れて取り上げ、韓国社会での名誉回復が進んできた。

日本国内でも、先の通常国会に、朝鮮・台湾出身のBC級戦犯者・遺族（朝鮮一四八人＋台湾一七三人＝合計三二一人）を対象とする「特定連合国裁判被拘禁者等特別給付金法案」が、戦後初めて民主党から提出され、公式に、韓国・朝鮮、台湾のBC級戦犯者問題を解決しようとする案が示された。

表に出て発言できる当事者としては、ほとんど唯一一人になってしまった〈同進会〉会長の、李鶴来さん（83歳）は、



今年六月に、韓国で初めて合同慰霊祭を行うことができたのを喜びつつ、一刻も早く、同法案が可決されて、日本が、国としての措置を明確に取るよう強い期待を表明した。

NHKのドキュメントを制作した渡辺考ディレクターは、「いったい誰のため、何のために死んでいかなければならないのか？」という李さんの言葉が鍵だと思う、と述べた。長くこの問題を研究し、李さんらを応援してきた内海愛子さん（早稲田大学大学院客員教授）は、「刑が軽く、早く釈放された人たちは、逆に、出所後に大変な苦勞をした。その生活を支え、ともに苦勞した妻たちの存在も忘れてはならない。スガモブリズンの中で勉強し、反戦平和を誓ったグループがあつたことなども含めて、立体的にとらえるようにしたい」と、今後の課題を語った。

折よくちょうどこの秋、内海愛子著『キムはなぜ裁かれたか』（朝日選書、一五七五円）が刊行された。内海さんが長年にわたる研究にもとづいて、韓国・朝鮮人B・C級戦犯問題を、わかりやすく説いた書だ。ぜひお読みいただきたい。法案制定を求めて国会提出する請願署名の協力も、呼びかけている。総選挙後の国会で決着がつくことを期待したい。

（「同進会」を応援する会・世話人 有光 健）

## 中央区で九条講演会

### 「イラク派兵違憲判決を力に

### 海外派兵恒久法に反対しよう」

《東京・中央区九条の会》は、〇七年六月に発足。今年は九月八日（月）に、日本橋公会堂の大ホールを会場に、講演会を開催しました。

講師は、「九条の会」事務局員で、憲法問題に詳しい一橋大学の渡辺治教授。テーマは「憲法9条のちから」。

「今の日本国憲法、とりわけ九条は、反動攻勢の中で、相次ぐ解釈改憲、特別立法の制定などによって、権力側からボロボロにされてきたけれども、今なお大きな歯止めとなっていること。それだからこそ権力側は、アメリカの強い要請を受けて、策を弄しつつ、最後の砦を突破しよう」と躍起になっている」といった経過が浮き彫りにされました。

ここで、重要なのが、今年四月の名古屋高裁での自衛隊イラク派兵違憲判決の確定。渡辺教授も強調していました。が、「イラク特措法はじめ、政府側がこれまで主張してきた論理に照らして、なおかつ違憲だ」と言い切ったところが、すごいですね。「相手の土俵に乗って、そこで勝つなんて



そして政府は上告もできず、これで確定なんて、涙が出るくらいの痛快事でした。

形式的には政府側の勝訴。中身は完全にこちら側の勝利。完全に「実」をとったわけで、こういうのって、「肉を斬らせて、骨を断つ」とでもいうのでしょうか。政府側は、上告もできない腹いせに、「違憲といっても傍論だ」「こんな関係ネエ」などと悪態をついていましたが、よほど、

口惜しかったのでしよう。

もうひとつ重要な指摘は、「海外派兵恒久法」への取り組みです。これは、憲法9条があっても、いつでも、どこへでも、アメリカと一緒に戦えるようにしようという「立法改憲」ですので、憲法9条

の乱暴な蹂躪です。せっかく名古屋高裁で、イラク派兵違憲判決を確定させたのですから、この意義を、早く大きく広げて、世論を力に、民主党も一枚噛んだ（恒久法のたくらみ）を、つぶしましょう。

それには、風雲急を告げる情勢下で、「いつあっても、おかしくない」とされている総選挙は、チャンスではないでしょうか。日本国憲法は、国民主権を明記しています。国民が主人公です。主権者である、私たちひとりひとりの意思をしつかり示し、憲法を暮らしに生かして、平和と民主主義を守り抜きましょう。

そういう思いを強くした講演会でした。

（東京・中央区九条の会呼びかけ人・事務局員 田所明治）

## 日本軍の虐殺は「平頂山」から始まった 戦争をしないだけでなく、軍隊を持たずに

### 感動の証言

「黒い布が外されて機関銃が現れた。その機関銃を扇のように私たちに向けて、機銃掃射した。それで多くの人が

倒れた。多くの人が裏の山に登ろうとしたが、その人たちも撃たれて、ボールのように転げ落ちた」。

九月十三日、本郷の東京大学弥生会館（一条ホール）で開かれた「撫順——加害と再生の地から、現代と未来を考えるシンポジウム」は、強制連行、従軍慰安婦問題など、中国人の戦争被害者を支援する団体が主催したもので、「平頂山事件」の被害者である王質梅さん（八七歳）が証言した。タイトルの「加害」とは、一九三二年九月十六日、当時満鉄が経営していた撫順炭鉱の守備隊（日本軍）が、隣村に住む三〇〇〇人の村民を虐殺したとされる「平頂山事件」のことであり、「再生」とは、九六九人の日本軍の戦犯が、一人も処刑されることなく帰還できた「撫順戦犯管理所」を指す。二か所とも撫順市にあることから、「撫順」をキーワードに、日本と中国の友好・和解、ひいてはアジアの平和について考えよう、というのが開催趣旨だった。

平頂山事件で生き残ったのは一〇〇人前後で、現在存命しているのは十人にも満たないとされる。王さんは、そのうちの一人で、長春に住んでいる。

事件当時、王さんの家は、病気がちで撫順炭鉱を失職したばかりのお父さんと、専業主婦のお母さん、それに八歳

の弟さんの四人暮らしで、王さんは十一歳だった。

王さんは、七年前の事件を、昨日のこのように、しっかりと話した。「事件前日の九月十五日の深夜、皆が寝静まった頃、外で、『殺せ、殺せ』という声があった。私は怖くて、庭の貯蔵庫に隠れた。翌朝、大刀会（抗日義勇軍）が村を通ったことを知った」

前年九月に、関東軍が満州事変を起こし、翌年三月には「満州国」を宣言したことにより、当時の中国東北部では、中国側の抗日運動が激しく展開されていた。

当然、日本による侵略のシンボルとして、撫順炭鉱は、標的にされた。十五日の襲撃で、日本側に五人の死者、七人の負傷者が出た。撫順炭鉱の守備隊は、翌朝、大刀会の通過を平頂山の村民が日本側に通報しなかったとして、平頂山村へ報復を決めた。

王さんは、高ぶる感情を抑えるように、時折、ハンカチを握り締めた。

「父親に『伏せろ』と言われたので、そのようにした。私の隣に八歳くらいの男の子がいたが、泣き叫んだため、銃殺された。その子の脳みそと血が飛び散った。軍靴の音が近づいていたが、私は歯をくいしばって、声を出さない

ようにしていた。しかし、背中を刺された。それでも声を出さなかった」

日本軍が去り、王さんは、逃げ延びることができたが、その日が、王さんと両親、弟さんとの永遠の別れとなった。

### 否定できない事実

王さんの証言と全く一致するが、日本軍(守備隊)の報復の内容は、虐殺行為そのものだった。まだ死んでいないと見ると、銃剣で刺し、赤ん坊を刺したまま、放り投げたという話まである。

数日後、事件を隠すため、日本軍は、ダイナマイトで事件現場を爆破した。長い間、遺骨は地中に埋まったままだったが、事件から四〇年ほどたった、一九七二年になって、中国政府の手で掘り起こされ、現在は、虐殺されたままの状態で「平頂山惨案遺址紀念館」の中に保存されている。

掘り出された遺骨は、虐殺された全体の人数の一部にすぎないが、三〇〇〇人の犠牲者数は、遺骨現場からの推計や、「申報」「大公報」など、事件直後の中国側メディアの報道、一九四七年に撫順県政府が行なった「犠牲者調査」の結果などを根拠にしている。もちろん、犠牲者を低く見る歴史

研究家もいるが、「南京事件」のように、事件そのものがなかったとする説は、見当たらぬ。

虐殺を指揮したのが誰か(撫順炭鉱守備隊長は、川上精一大尉だったが、事件当時、川上は討伐に出かけていて、撫順にいなかったという説がある)という論争はあるが、事件自体は、誰も否定できないものだ。

にもかかわらず、戦前はともかく、戦後も、一貫して日本政府は事件を認めず、中国政府への謝罪を行なってこなかった。一九九六年八月、日本の若手弁護士が中心となり、平頂山事件の被害者三人を原告に、日本政府を相手に謝罪と損害賠償を求める裁判を東京地裁に起こした。

その背景としては、その二年前、当時の永野茂門法務大臣が「南京大虐殺は、でっちあげだ」と、アジア太平洋戦争の侵略性を否定する発言を行い、中国をはじめとするアジア諸国から強い反発を招く事件があった。裁判は二〇〇六年五月、大日本国憲法下においては、公権力が行使した問題には責任は問えないという、「国家無答責」の壁により、原告の敗訴が最終的に確定したが、その後も、訴訟弁護団のメンバーや、裁判を支援してきた市民らでつくる「中国人戦争被害者の要求を支える会」などが、被害者の支援と、

日本政府への謝罪を求めて活動を継続してきた。

「戦争をしない」だけでは

集会では、王さんの証言を受け、「平頂山事件から何を学ぶべきか」というパネル討論に移った。

憲法9条擁護の立場で全国を講演している伊藤塾塾長の伊藤真さんの発言は、説得力があった。

「侵略戦争は絶対にいやだ。侵略戦争には反対である。

これはとても大切だが、当時(戦前)の日本人は、侵略戦争だと思っていなかった。どんな戦争も『正義』を語って行われる。どんな名目でも戦争はしないという位置づけにしなければいけない。侵略戦争をしないだけでは足りない。軍隊は市民社会とは全く異質で、価値観が異なる。軍隊、戦争というものの本質を、平頂山事件から、学ばなければいけない。たとえテロを撲滅させるためであっても、軍隊を持たない。軍隊を持つことは、決して正義の実現にならない。アジアの安全保障の方向もこの事件から学ぶべきだ」

元日本軍兵士で、撫順戦犯管理所に収容されていた高橋哲郎さんが、「正義の問題を大声で言う」と、しらけるという空気が日本にはある。国家が行なった戦争を、具体的に

事実を子どもたちに知らせていくことが大事だ」と話した。

それをひきとり、平頂山事件を研究している撫順市社会科学学院院长の傅波さんは「平頂山大虐殺の現在の生存者は六人。その一人の莫德勝さんは二〇〇五年に亡くなったが、裁判の敗訴を聞いたとき、病床で莫さんは怒っていた。「なぜ、一言謝ってくれないのか」と。「平頂山事件は、満州事変以降、日本が中国人を虐殺する出発点と言える。平頂山事件の解決と、日本政府が被害者に謝罪すること、は、中国と日本の真の和解の出発点になる」と発言した。平頂山事件の謝罪として「支える会」などが具体的に求めているのは、平頂山事件の現場に、謝罪の「碑」や「陵苑」を作ることである。

それさえできない日本の現実に、愕然とする思いだが、実は今回の裁判を通じ、被害者を含む中国側の「市民」と日本側の支援者との交流が深まるという副産物が生まれた。裁判には負けたが、日中の絆は確実に強まった。

それを象徴するのが、二〇〇五年に発足した「平頂山事件幸存者対日訴訟撫順市民声援団」の存在である。日本側の市民組織「平頂山事件の勝利をめざす実行委員会」の活動と、中国側の市民組織が連帯し、共同して平頂山事件の

全面的解決を追求するという、他に例をみない日中の活動が進んでいる。平頂山事件の裁判を通じ、「官製」でない市民組織が中国にできた。この動きは、南京大虐殺事件における南京大虐殺祈念館の支援・共同活動、遺棄毒ガス事件、強制連行・強制労働事件などでの中国側大学関係者による



シンポジウムの前日、日本側の暖かい歓迎に表情も緩んだ王質梅さん

研究と、日本側弁護士への支援・共同活動へと広がっている。最近では、遺棄毒ガス弾被害者たちに関する日本医師団の医学的調査活動について、中国側病院・医師らによる協力関係が生まれているという。

今回の王さんの来日に際し、こんなエピソードがあった。王さんが長春を出発するとき、夫から「日本では殺されるかもしれないから、社会科学院の傳波さんから離れないように」と言われた。しかし、丸の内や秋葉原を歩いて、王さんの心配は危惧に終わったどころか、日本側の暖かい歓迎で「もっと日本にいたいと別れを惜しんでいた」という。平頂山事件裁判から学んだことは、本当に大きい、と実感している。  
(福田和男)

## 日本のマスメディアの状況と憲法

「許すな！憲法改悪・市民連絡会」主催の第三五回市民憲法講座が、九月二七日に文京区民センターで開催された。講師は弁護士の日隅<sup>ひずみ</sup>一雄さんで、元新聞記者としての体験も交えて、「日本のマスメディア状況と憲法」というテーマをわかりやすく紹介された。

「日本のジャーナリズムは、政府や企業などによる、さまざまな圧力によって規制されています。日隅さんが四月に出版した『マスコミはなぜ「マスゴミ」と呼ばれるのか、権力に縛られたメディアのシステムを俯瞰する』（現代人文社）を中心に、メディア規制立法の動き、二〇一〇年に法案提出される「通信と放送の融合」がはらむメディア規制、表現規制の危険性を指摘し、最後に現状の改善への展望を述べられた。

まず、日隅さんから、参加者へ二つの質問がありました。

(1) 電力会社が原発推進支援の広告を出していることに  
対して、どう考えますか？

(2) インターネットの有害情報対策については、どう考えていますか？

この二つの質問を通して、日本のメディアが世界のメディアと大きく異なっていること、日本では当たり前と思っていることが、世界では非常識なことがわかってきました。また、国民はマスメディアに対して不満を持っているが、なぜマスメディアが駄目になったのかを、新聞記者としての体験談を通して、わかりやすい説明をされた。

これらの複雑な関係を判りやすく解説したものが、「マ

スコミにかかる特異な圧力システムの全容」です。

(1) 「一業種一社制」を不採用。(先進国では「一業種一社制」が採用されている。)

(2) 「クロス・オーナーシップ」の採用。特定資本が多数のメディア(新聞社、テレビ局、ラジオ局など)を傘下にするのは、先進国では認められていない。日本では大手五社に独占されており、大きな弊害が出ている。

(3) 「独立行政委員会」がない(戦後、委員会がつくられたが、日本が主権を回復して間もなく吉田内閣の圧力でこれが廃止された。先進国では、すべて持っている。)

戦後、政権交代がなかったのはマスコミが総務省の監督下にあり、大きな圧力を受けているためである。)このような問題に対して、「システムの改善への展望」が述べられています。

1 系列の解体や、広告業界の一業種一社制度の採用は、ただちには困難である。

2 早期に独立行政委員会を実現する(現在、民主党が政府に働きかけをしている)。

### 3 読者の、日々のバックアップや批判の重要性

独立行政委員会については民主党が設立を求めているが、政権交代した後でもこの姿勢を貫くか、それをしっかりと見ていく必要があります。

もう一つは、裁判員制度も、今後大きな問題になる、と警鐘を出していました。

二〇〇三年に裁判員制度が決まった時に、マスメディアに対して二つの制約事項がありました。一つは「偏見報道を禁止する」ということであり、もう一つは「裁判員に接触してはいけない」ということです。これに対してメディアは反対したが、最終的には偏見報道の禁止規定だけをなくすという、不自然な形で妥協しました。

沖縄の密約を告発した西山太吉さん（元毎日新聞記者）は、政府にとって都合な情報を公開したため、国家公務員法違反で起訴され有罪が確定しました。

最近の米国の資料では、その密約の存在が、認められています。政府は頑なにこれを否定し続けています。

わが国にはまだ規制の少ない週刊誌をはじめとする雑誌ジャーナリズムや、急速に広がっているインターネットを

活用したメディアがある。

現在、放送とインターネットに関する業法が一本化されようとしており、その新法が二〇一〇年に成立すると、放送だけではなくインターネットを利用したマスメディアに対しても、総務省が直接、免許を許認可することになる。

独立行政委員会がない状態でこの法案が成立すると、政府に反対するようなインターネットのサイトは認可されないようになると考えられます。

インターネットでは、各種のフィルターをかけることで、簡単に情報が操作される恐れがあります。中国政府は検索ソフトの最大手であるグーグルに強い圧力をかけて、特別なフィルターをかけています。

独立行政委員会については、民主党が（財界も応援している）設立を求めているので、民主党と接触する機会がある時には、これをしっかりとつくってほしい、と訴えることが大切だ、と話していました。

今回は、とても有益な話を聞かせてもらいましたが、私たち市民としては、今後も情報の共有化、市民メディアなどで拡げていくことが非常に大切だと思います。

（コスタリカに学ぶ会 泉田守司）



## 「九条の会」事務局主催学習会

### 「名古屋高裁判決と派兵恒久法」

はじめに

二〇〇八年九月十三日(土)、水田町にある星稜会館で、「9条の会」事務局主催学習会「名古屋高裁判決と派兵恒久法」が行われました。

この学習会は、四月十七日の名古屋高裁判決から、ちょうど五か月がたち、加えて福田首相が突然の辞意表明をし、自民党総裁選の真ただ中という、絶好のタイミングで行われました。

講師は、自衛隊イラク派兵差止訴訟において法廷で証言をした小林武さん(愛知大学教授)、海外における自衛隊の活動を取材し、記事にし続けてきた半田滋さん(東京新聞記者)、日本の政治状況と改憲問題について、切れ味鋭い分析をしている渡辺治さん(一橋大学教授)。この問題について最適の三人ということで、会場には、数多くの人が駆けつけ、熱気に包まれました。

### 「生きている9条と平和的生存権」

小林武さん

小林武さんは、自衛隊イラク派兵差止訴訟において、二〇〇七年十月二五日の証人尋問で出廷し、また四月十七日の名古屋高裁での違憲判決を生で聞いたという立場で、報告を始めました。

小林さんは、政府の自衛隊イラク派兵は、憲法9条1項に違反するという判決がでるとは「考えられないこと」であつたといいます。主文の控訴棄却をきいた時は、「ああ、やっぱりそうか」という思いがしたとも言いました。しかし、その後の判決理由のところ、自衛隊のイラク派遣が憲法違反であることを述べると、そのとき法廷では嗚咽が起こり、判決を読み終わると、拍手、拍手。お互いが抱擁するという状況になったそうです。その感動は、法廷外で待つ人にも伝えられ、法廷の内外で感動の渦がおこりました。小林さんは、「歴史はこうして動くんだな」と思い、「歴史が大きな頁を、ひとつめくっている」現場に居合わせた感動を、優しい語り口で、私たちに語ってくれました。

名古屋高裁判決の主要点は、次の四点です。

①控訴人(原告市民)の訴え(違憲確認。差し止め・損害賠償の請求)は、すべて棄却。

②空自のイラクでの活動は、9条1項違反。

③平和的生存権は具体性をもち、裁判提起の根拠となる権利。

④控訴人の精神的苦痛は、平和的生存権の侵害に近い。  
次に、名古屋高裁判決が確定（五月二日）したこと、意義について述べました。

第一に、9条に関わる訴訟で、違憲審査史上、初めての判決であるということです。違憲判決自体は、過去に二度出ています。ひとつは、一九五九年の砂川事件判決（東京地裁、「伊達判決」）です。しかしこれは、のちに最高裁で破棄され、原審に差し戻され、確定しませんでした（なお、「伊達判決」を受けて、当時のマッカーサー駐日大使が、外相に最高裁への跳躍上告を促す外交圧力をかけたり、最高裁長官と密談したりと、露骨な介入をしていたことが、二〇〇八年四月末に、米国公文書の調査から明らかになりました）。

もうひとつは、一九七三年の長沼訴訟判決（札幌地裁、「福島判決」）です。「福島判決」では、「自衛隊の存在が違憲である」という判決が出されましたが、これは札幌高裁で覆され、確定はしませんでした。ですから、名古屋の弁護士団はこの判決を受けて、国家の側が、何か「非常措置」を

取ってくるのではないかと警戒しましたが、それは理由のないことではなかったのです。

名古屋高裁判決確定の第二の意義として、裁判所、政府、立法府への強い影響力を持つことが挙げられます。とくに今回の判決は高裁判決であるので、特別な意味合いをもつものと思われます。

最後に、名古屋高裁判決をもたらしたものについて、第一に、永年にわたる憲法を守る、民衆運動の努力があったこと、第二に、原告の団結、弁護士団の力量、学者の協力があつたこと、第三に、裁判官に人を得たことを挙げました。とくに第三の点については、証人尋問の時の、青山邦夫裁判長の優しい人柄をしのばせるエピソードが印象に残っているそうです。

また、この裁判官たちについては、「形式上、国に勝たせて、実質的に市民側に勝たせるということで、上告の道を封じた」という、実に巧みな政治的ポーズだという受け止め方があるが、そうではなく、判決文を読むと、徹頭徹尾、法律判断に徹した裁判官であつたと、小林さんは指摘します。「法律家としての信念の貫徹が、こうした判決をもたらしたのである」と。そのような点で見ていくと、「全

国の人びとの努力が、名古屋で条件が整って、違憲判決を押し出したのである」と、小林さんは総括しました。

この判決についての政府の反応として「暴論でしょ」「そんなの関係ねえ」などと言って、判決を軽く見る風潮があります。さらに、総裁選で石破氏は、「違憲だから、やめるというのは無責任だ」と発言しました。こうした論理は、憲法よりも政治の必要、公権力の必要を上においている論理であって、立憲主義の立場からは許されないと、小林さんは、厳しく批判しました。それと同時に、「傍論における違憲判決であっても、政府は違憲審査権を持つ裁判所の判断を、誠実に遵守・実行する義務を負っている」ことも、付け加えられました（憲法99条）。

### 「自衛隊海外派遣が呼び込む憲法9条液化化」

半田 滋さん

半田滋さんは、『東京新聞』の記者として、自衛隊の活動について豊富な取材をし、詳細な記事を書き続けてこられた経験をもとに、今回の講演をされました。

まずは、自衛隊が行なっているインド洋での、洋上給油活動についてのお話からでした。

それがもつ意味について、一九九一年に湾岸戦争が終わり、ペルシャ湾に掃海艇が派遣されて、イラク軍がばらまいた機雷を除去するところから始まった自衛隊の海外活動は、これまで「国連や国際機関の要請」のもとで行われてきました。それに対して、インド洋での活動は、日本の「独自の判断」による自衛隊海外派遣であるとされています。この点がこれまでの活動と大きく異なる点であることを指摘しました。

では、なぜインド洋での洋上補給活動が始まったのかといえ、二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件の犯人を、アメリカが「アルカイダである」と決め付けたことに端を発します。「そのアルカイダを支援していたのがアフガニスタン支配していたタリバン政権である。タリバン政権をやっつけば、アルカイダの資金源を断つことができる、だからアフガニスタンを攻撃しましょう」ということで、アメリカは「自衛権の発動」として戦争を始めました。それに対して、イギリスは、「集団的自衛権の行使」としてそれに加わりました。

日本は、二〇〇一年十一月に「テロ特措法」を大急ぎで成立させ、自衛隊の艦艇五隻を送り込み、協力を始めました。

それは「アメリカの戦争を支援する立場であった」と、日本政府は説明しています。

半田さんは、これは「集団的自衛権の行使」にあたるのではないか、これが特段、問題にならずに、すつと流れていくところに、また問題があると鋭く指摘されました。

自衛隊による給油活動を開始した直後の二〇〇一年十二月には、タリバン政権は、ほとんど崩壊し、二三日には、カルザイ暫定政権が発足します。

タリバン政権が崩壊したので、アメリカの「自衛戦争」は終わったことになります。

その後、アメリカやISAFがやっていることは、タリバン政権を攻撃することではなく、タリバンの残党狩りです。それが、非常に残酷なので、「戦争状態」になっています。

日本が当初やろうとしたアメリカの「自衛戦争の支援」というのは、もうすでに、終わっているはずですよ。ところが、洋上補給の相手国は、どんどん広がっていきました。

これについて、日本政府は「海上阻止活動を行なっている艦艇に対する洋上補給である」と、説明を変えています。

そしていま、取締りの「成果」のためか、あまり不審な船舶を見かけなくなりました。そこで日本政府は、「海上

治安活動に対して、洋上補給を行なっている」と、再び説明を変えています。つまり、一つの法律で説明が三回変わっていることになります。これは法治国家としていかがなものかと、半田さんは疑問を呈しました。

「しかも、いま、これだけ燃料が高くなっている最中、なぜ日本だけがタダで給油しなければ評価されないのだろうか」と疑問を投げかけます。

活動を行うこと自体に価値があるのであれば、洋上補給は有料でもよい。他国がアメリカやイギリスから補給を受ければ、おカネを支払う。なぜ日本だけが、「無料のガソリンスタンド」にならないといけないのだろうか――。

いま、日本政府は、その説明をしていません。

続いてアメリカは、二〇〇三年三月二〇日に「イラク戦争」を開始しました。紆余曲折を経て二〇〇四年二月から、陸上自衛隊は、給水活動や道路・施設の復旧、医療活動を行う「人道復興支援」を始めました。

半田さんは、サマウワに取材に行つて、違和感を覚えたことがあると言います。サマウワというところは、ビルが立ち並び、日本でいう中堅都市くらいの所でした。レストランもあるし、インターネットカフェもある。なぜ、ここ

に自衛隊が行って、「人道復興支援」をしなければならぬのか、と疑問に思ったそうです。

また、空自による空輸活動も取材しましたが、中身は、最初と大きく変わっていました。当初は、陸自もサマーワにて「人道復興支援」をしていたので、それを支援する活動を行っていました。ところが、陸自が引き揚げた後、空自がやったことは、米兵の空輸でした。その米兵の活動といえば、イラクの「治安維持」を行っているので、その活動は「人道復興支援」とは言えません。空自は、「人道復興支援」とは言えない活動をやらされていたことになります。

半田さんは、さらに、この活動を続けていくなかでの、自衛隊の変化について解説されました。

サマーワに行っていた陸自は、決して安全な場所でも活動していたわけではありません。宿营地も、テント張りでした。そこに二年半の間に十三回、二二発のロケット弾や迫撃弾などによる攻撃を受けました。そのうち三発が、宿营地の中に落ちた。隊員の中に死傷者が出てしまい、自衛隊が「撤収」しなければならぬ状況をつくらないために、宿营地を要塞のように変えていきました。それには七〇〇

億円かかったと言われています。

宿营地の外に出なければ死傷者を出すこともありません。そのために、現地のイラク人を労務者として雇いました。

しかし、彼らに支払う給与がないので、当初は、駐屯地に講師を呼んだ時に支払う「謝金」を適用して、イラクの雇用にあてていました。のちには、使えるものをどんどん適用してイラク人に支払っていきました。使えるものは何でも使っていました。

武器の使用基準も、変わっていきました。

一九九二年に自衛隊がカンボジアのPKOに行ったときは、自分の身に危険が迫った時に、「正当防衛」、あるいは「緊急避難」として、自分の判断で武器を使用することになっていました。

「自分の判断」としている理由は、上官の命令で武器を使用したら、「武力の行使」になってしまうからです。

一九九八年にPKO協力法の武器使用基準が緩和され、上官の指示のもとで適正に武器使用することによって憲法の趣旨に沿うようにしました。

さらに二〇〇一年のテロ特措法によって、武器使用基準が緩和されます。こうして今では、軍隊の武器使用基準と、

ほとんど変わらなくなっています。自衛隊の人たちも、「大體のことはできる」と言っています。

こうした自衛隊の海外活動経験の積み重ねと「米軍再編」とによって、二〇〇六年十二月に、自衛隊法が、改定されました。そこでは、自衛隊の海外活動が本来任務に「格上げ」されました。それにもなつて、自衛隊を、いつでも海外に出せるように派兵恒久法がつくられようとしています。そうなったとき、派兵恒久法で出来ないことが出てきたら、次は憲法改定となります。「そういう点で、事実が先行して、憲法が邪魔者になるという図式が、すこしずつ姿を現してきているのが現在であると言えるのではないか」という、まとめでした。

### 「今日の情勢と派兵恒久法を語る」

渡辺治さん

渡辺治さんは、サブタイトルに「福田政権崩壊と、改憲・派兵法のゆくえ」を掲げ、福田政権崩壊直後の混乱している時に、冷静に今後の改憲や派兵恒久法の行方について、分析されました。今回の福田政権崩壊も、昨年の参院選における自民党の歴史的大敗の余波によるものであるとして、講演のテーマとして、次の三点を大きな柱にしました。

(Ⅰ) 安倍政権の改憲強硬路線は、なぜつぶれたのか？

(Ⅱ) なぜ、派兵恒久法が出てきたのか？ その意図と、ねらいは何か？

(Ⅲ) 福田政権の辞任、総選挙で派兵恒久法はどうなる？

ここでは、(Ⅱ)と(Ⅲ)を中心に報告することになります。まず、(Ⅰ) 安倍政権の改憲強硬路線がつぶれた原因については、次の四点を挙げました。第一に、改憲反対運動の盛り上がりが世論を変えたこと、第二に、安倍政権は、国民をバカにして国民的合意形成を軽視したこと、第三に、安倍改憲言説に保守支配層内で動揺と不安が広がったこと、第四に、民主党が離反してしまったこと、を挙げました。第三の点については、安倍政権の「戦後レジームからの脱却」論に対して、後藤田・宮澤・野中ら、保守政治家の不安や、保阪正康、立花隆ら、保守知識人の懸念が広がり、「安倍の改憲は許さない」という雰囲気がつくられていきました。第四の点については、憲法改正を行うためには、各議院の総議員の三分の二の賛成があつて、初めて発議できるので、自民党は、二〇〇〇年以来、民主党の抱き込みに努力してきたのに、安倍政権が改憲手続法を強行したことによって、民主党がひねくれてしまい、離反してしまいました。しかも、

参院選で自民党が大敗したことを受けて、民主党も、おいそれと改憲に乗れなくなった、と説明しました。

次に(Ⅱ)派兵恒久法の意図とねらいについて。

「派兵恒久法については、二つの狙いがある」と渡辺さんは言います。第一に、アメリカの要請と苛立ちに応えるためです。

これまでの特措法方式には二つの限界があります。

一つはアメリカの要請に迅速に対処できない、という点です。個別案件ごとに法律をつくるのに時間を要し、また時限立法であるために、期限も限定されており、テロ対策特措法のような期限切れを起こさないためにも、恒久法が必要なのです。

特措法方式の限界のもう一つは、米軍支援の内容が限定されているという点です。これでは、米軍に対する有効な支援ができないので、それを打破するためには、やはり恒久法が必要であり、改憲も必要になってくるのです。

第二に、恒久派兵法は、民主党を改憲協議に巻き込む、当面唯一の梃子であるという点です。二〇〇七年の参院選で、民主党は、安倍政権と対決するために「構造改革反対」などを掲げたために、保守政党としての責任を逸脱してい

るとして、アメリカと財界は、民主党に圧力をかけてきました。

それに対して小沢は、「世界」二〇〇七年十一月号(岩波書店)での論文で、「国連の決議のもとであれば、自衛隊を海外に派兵し、武力行使もできる」と主張しました。

また、十二月に新テロ法を自民党が出したことで、民主党は対案を出しましたが、その二五条で、民主党は、アメリカと財界、そして自民党に対して「派兵恒久法はつくるべきだ」という重要なメッセージを出していました。これを受けて、福田前首相は「派兵恒久法なら、民主党との関係を修復することができる」と考えたのです。

だから、派兵恒久法の内容も、これに沿ったものとなります。つまり、第一に、米軍の戦闘作戦行動に対し迅速な派兵ができるような内容になるということです。これは、石破試案第二条第三項が土台になって、国連がかかわる場合も、かわらない場合も、自衛隊派兵を、正当化できるようになっています。

第二に、武器使用基準の緩和も含めて、後方支援活動が一気に拡大するような内容が盛り込まれます。従来は、できることを法律の中に書き込んでいたが、そうではなく、

できないことを法律に書き込む。それ以外のことは、全部できるようにするネガティブリスト化です。労働者派遣法を改定した時と同じことをやろうとしています。

最後に、(Ⅲ)「福田政権の辞任、総選挙で派兵恒久法はどうなるのか」という点について。

福田政権は、構造改革でも、派兵恒久法でも、行き詰まっています。このままでは、派兵恒久法だけとつても、恒久法はおろか、新テロ法でも民主党案に乗れない。新テロ法の延長も、公明の反対で、できない。そうかといって、このまま手をこまねいては、アメリカの圧力、財界の圧力が強くなってくる。そこで福田前首相は、新しい看板のもとで衆院選を乗り切り、この問題を突破しようと思いました。

しかし、構造改革と派兵恒久法は、衆院選では十分に議論されないだろうと思っていたが、総裁選のようすをみると、「どうもやってくるな」という感じが渡辺さんは、したそうです。石破さんが「派兵恒久法は必要」というと、他の候補もそれに同調してくる。だから、自民党の方からこの問題を言ってきた、衆院選で争点になる可能性が出てきました。いずれにしても、衆院選後に、派兵恒久法は大

きな問題となるだろう、というのが渡辺さんの見解です。では、その後、派兵恒久法はどうなるのか。渡辺さんは、次のように展開を予想します。

まず衆院選で自公が多数を取った場合は、参院での民主党を切り崩し、テロ新法を一年延長し、その上で、新しい民主党（総選挙で民主が敗れば小沢は党首を辞めているだろうから）と協力をして、派兵恒久法を通して、改憲に道筋をつけるだろう。

一方、自公が国民の批判をくらって多数を取れなかった場合はどうなるか。これは二つあります。民主党は単独で政権を取ることが難しいと思われるので、一つは、社民・共産と手を組んで多数を取る場合、もう一つは公明と手を組んで多数を取る場合の二つが考えられます。後者の場合、自公政権が多数を取った場合と、同じ状況になります。前者の場合、小沢は決断を迫られることになります。社民・共産は、「改憲反対」「消費税反対」「派兵恒久法反対」を唱えてくるので、かれらと連立を組むことは、手足を縛られることになるので、このような状況がつくられると、かなり事態は、変わってきます。だから民主党は、基本的には公明と手を組んで、政権を取ると考えられます。この場



合、民主党の新テロ法対策をベースにして話が始まります。

ただし、これには二つの欠陥があります。

それは、①自衛隊の派兵は紛争停止合意がないと派兵できない。②給油活動については国連決議がないとできない。この二つの欠陥があります。これは使い勝手が悪く、アメリカの反応も良くありません。しかも社民・共産は反対するとすると、民主党は、この法案を通すために自民党と協議に入るでしょう。だから、「私たちの監視がないと、自公政権の場合も、民公政権の場合も、派兵恒久法制定に近づくことになる。」と指摘しました。

「これをつぶすために、衆院選において、まず派兵恒久法が争点になるかどうか、次に派兵恒久法や改憲に反対する政治勢力がどのくらい優位な形で前進し、民主党も、イヤだけど、彼らと手を組まなければならぬ状況をつくれるかどうか」——それにかかっていると、まとめました。

### 三つの講演を聞いて

「はじめに」でも書きましたが、この学習会は絶好のタイミングで開かれました。福田前首相が安倍元首相と同様に政権を放り投げ、自民党総裁選が行われているその最中

に、派兵恒久法は？ 改憲は？ 総選挙は？ と、その行方が気になるなかでの開催でした。これらの問題について今後どうなっていくのだろうと、皆が強い関心を持ちながら、この学習会に参加したのではないかと思います。

小林さんは、「名古屋高裁の判決だけで政治が変わるのではない」ことを指摘しました。「憲法裁判運動の成果と政治の舞台での主権者としての活動とが結合しないと、政治は変わらない」として、「今後行われる総選挙において、私たちがどのような行動をとるのか、それが問われている」とおっしゃいました。

最後の渡辺さんも、同様に、「派兵恒久法制定への流れを食い止めるためには、社民や共産などの政治勢力が、どれほど議席を伸ばすのが課題である」とおっしゃり、「この名古屋高裁判決を生かすのも、殺すのも、私たち一人ひとりの一票次第である」というように、私は受け取りました。

この原稿を書いている現時点においては、衆議院の解散・総選挙は、まだ行われていません。新聞報道などによると、金融危機や株価の暴落などによって、自民党の政治家からは、総選挙よりも景気対策を優先すべき時であるとの話も出ていて、総選挙は、この学習会のころに想定されていた

ほど、早くはなさそうです。

それでは、この間に、私たちは何をすべきでしょうか。渡辺さんが質疑応答のところでおっしゃっていたように、まずは派兵恒久法についてお互いに勉強し合うところから始めなければならないでしょう。そして、その問題点を共有することによって、派兵恒久法成立を阻止する大きな力に変えていかなければなりません。それが改憲を阻む力にもつながっていきます。

それと同時に、自衛隊イラク派兵差止訴訟の名古屋高裁判決についても、お互いに学び合い、それを活かすことも考えなければなりません。

名古屋高裁判決では、「平和的生存権」は、「全ての基本的人権の基礎にあつて、その享有を可能ならしめる基底的権利である」ということができ、単に憲法の基本的精神や理念を表明したに留まるものではない」と語っています。

さらに、「憲法9条に違反する国の行為、すなわち戦争の遂行、武力の行使等や、戦争の準備行為等によって、個人の生命、自由が侵害され又は侵害の危機にさらされ、あるいは、現実的な戦争等による被害や恐怖にさらされるような場合、また、憲法9条に違反する戦争の遂行等への加

担・協力を強制されるような場合には、平和的生存権の、主として自由権的な態様の表れとして、裁判所に対して、当該違憲行為の差止請求や損害賠償請求等の方法により救済を求めることができる場合がある」と判断しました。

こうした判決を、私たちが十分に理解し、まずは周りの人びとに語り広めていき、その上で国に対して、この判決を尊重するように訴えていくことが重要ではないかと思えます。

#### おわりに

最初の三名の先生方の講演は、それぞれわずか四〇分間しかなく、あつという間の学習会でした。もつといういろいろ聞きたかった、とも思いましたが、それは今後、各自が勉強することに任せられたことになります。お互いに、派兵恒久法成立阻止、改憲阻止のために頑張っていきたいですね。

ただ、改めてこうしてまとめてみると、自分自身の勉強にもなり、新たな発見もたくさんありました。このような機会を与えてくださったことに感謝します。また、拙い報告を読んでもくださった読者の皆さんにも感謝申し上げます。

(静岡県立高校教員・伊藤和彦)

## 浅沼稻次郎没悼集会

### シンポジウム「今、憲法問題を考える」

浅沼稻次郎社会党委員長が右翼青年の凶刃に倒れたのは、一九六〇年の一〇月一二日だった。四七年目の昨秋に、平和憲法を守る勢力の再結集を目指して、旧社会党のメンバーが中心になって追悼会が復活した。このときは、土井たか子前社民党党首・元衆議院議長、村山富市・元総理、横路孝弘衆議院副議長、江田五月参議院議長らが、代表呼びかけ人となったが、今年は実行委員会が主催者となっている。国民投票法による凍結期間が過ぎ、改憲の動きがピークになる二〇一〇年に、「今年と来年と引継ぎ、浅沼没後五〇年を迎えたい」というのが、実行委員会の計画である。今年の追悼会はパネラーに、土井たか子(元衆議院議長)、野中広務(元内閣官房長官)、横路孝弘(衆議院副議長)、大谷昭広(ジャーナリスト)、コーディネーターとして宮崎学(作家)と、異色の顔ぶれを揃えた豪華なシンポジウムが企画された。

あいにく国会開催中ということもあり、横路氏は参加できなかったが、社民党の保坂展人衆議院議員も加わって、それ

ぞれが一家言を持つ強固な個性による熱気ある議論が展開された。土井たか子さんも野中広務氏も、議員は引退したものの、まだまだ意気盛んである。さすがにこれだけの顔ぶれが集まると、コーディネーターの思惑どおりに討論が組み合せて進むという具合には、なかなかないものである。

注目の野中氏は、「憲法は、時代とともに変わっていくと思うし、『自衛隊の活動を、厳格に専守防衛の範囲に限るよう憲法を改訂すべきだ』と考えている」と、自らの憲法観を述べた。その上で、「現在の改憲勢力は、自衛隊を海外にまで派兵し、かぎりなく戦争に加担できるように憲法を変えようとしているが、そうした改憲には、断固として反対する」とも言明した。「戦争だけは二度と起こしてはいけない。それが戦争を経験した世代の務めだ」という氏の信念に、疑問の余地はない。必ずしも、賛成できないことな点であろう。最後には、「再び日本を戦争に巻き込もうとする米国へ追従するような昨今の改憲の動きには反対する」という点に、議論は収斂できたように思う。「反改憲のウイングを大きく広げる」という主催者の企図は、十分達せられたと言えるだろう。

(牧 梶郎)

あぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐら

## 貧困社会をなくそう。

### 9条と25条は車の両輪

いつの頃からだろう、日本が戦争を、  
またもや始めたのは？

古くは、朝鮮戦争・ベトナム戦争・  
湾岸戦争。そしてアフガン・イラク戦  
争。(直接日本が戦場になつてはいな  
いが……)

一方、国内で、静かな戦争が進み  
つつある。何人も命が奪われている  
……。

幕張メッセ初日、五月四日(日)は、  
一万二千人(満杯で入りきれなかった  
人、三千人)。六日までで二万二千人。  
三〇有余の分科会・自主企画も、立ち  
見。会場に入りきれない会も多々あり。  
その時は、参加団体のグッズ販売・活  
動紹介ブースめぐりです。私からのお

土産は、9条写筆と9条カップラメ  
ンです。

〔印象に残った発言〕

・土屋・元日弁連会長

「世界有数の予算を持つ自衛隊と9  
条のジレンマを解消しよう。」

・イラク元兵士

「9条はイラクでも通用する。」

・イラク従軍の、元米兵

「米国に徴兵制度はないが、〈貧困と  
いう徴兵制〉がある。」

・雨宮処凛

「日本でも、自衛隊が勧誘するのは、  
貧困層の青年である。」

憲法前文がエンジンなら、憲法9条と、  
男女平等の24条・25条健康で文化的  
な最低限度の生活・27条(勤労の権利)  
は、車の四輪のようにセットです。

(尾花沢市 菅野真治)

## 〈この私〉としたことが……

自他ともに「しつかり者」と信じら  
れている私が、みごと「オレオレ詐欺」  
に、ひっかかりました。

「彼女に子どもが出来てね……」と、  
次男からの電話。送金を承知したもの  
の、あまりの驚きに、次女に電話をす  
ると、「エッ、お兄さんなら、いま、  
ここにいるよ」。

……それにしても、聞きしにまさる  
巧妙さでした。私以上に「しつかり者」  
が揃っている〈あこらメイト〉の皆様、  
くれぐれも、ご用心を……。

(九州 A)

## 「鬼籍に入る」とは……

女子大生にアンケートしたら、「長男の嫁になること」と答える者が多かった……と、「朝日」の「天声人語」で紹介。「近頃の女子大生も、なかなか冴えてる」と、感心しました。

こんな、冴えてる例、ご存じでしたら、教えてくださいね。暑さしのぎに……。

(埼玉 山川真知子)

## HPを訪問しました

HPを訪問しました。本当にすごいですね。いい本を沢山出版しているのですね。恥ずかしながら、先日まで「あら」の存在を知りませんでした。

私は年が明けると間もなく還暦を迎えます。しかし、精神年齢は労働運動、反戦活動を精一杯行っていた、三〇代です。よく言われます。学生さんと議論しているみたいだと。

今は、沖縄通いをしています。ウチ

ナーの目から見たヤマトの実情を知るため。それと、後輩たちに平和を維持する難しさを学び、伝えるため。そう遠くない将来、移住を考えています。

本当は会員登録したいのですが、今の私の経済事情では難しいのでお許しねがいます。どうしても読みたい時だけ、単発購入させていただきます。

編集部の方皆さん、本当にご苦労様です。

(船川均)

## 麻生内閣誕生は？

ついに麻生内閣での国会が始まりました。所信表明演説が「国権の最高機関の指名……かしこくも御名御璽をいただきます」で始まり、椅子から落ちそうになりました。

時代錯誤！

どうなっていくんでしょうね、まったく。  
(東京都港区 いちだまり)

## おすすめ

■(DVD)



『土屋公献——平和と人権を守る』

弁護士

余生をば

どう生きようと勝手なり

ならば平和に命捧げん

弁護士法一条には、弁護士は人権と社会正義を守ると記されている。日弁連の会長も勤めたことのあるベテランの土屋公献弁護士にとっては、人権と平和を守ることになる。自分の死を見据えながらも、人権と平和を守

るとは、どのようなことを言うのか、

それは、なぜなのか。平和に固執せざるを得ない土屋弁護士の生きざまに迫る。

価格3600円＋税送料400円

◆ご希望の方は、シユール大学まで、  
どうぞご連絡を。

(TEL 03-5155-9801、

Email:univ@shure.or.jp)

\*

## ■第五福竜丸展示館企画展

原爆ドームと第五福竜丸

——市民が守った平和遺産

広島原爆ドームとビキニ被災のマグロ船・第五福竜丸が、全国的に展開された市民活動によって保存されるまでの経過が、写真や新聞記事などによって、紹介されている。

日時 12月21日(日)まで9時半～16時  
月曜休館(11月24日は開館)

主催・場所とも 東京・第五福竜丸展

示館(新木場) TEL03-352

118494

### 【編集後記】

◆世界を、日本を、襲い、人びとを不安におとしめている金融危機を、「私たちが憤ましかに、清貧な暮らしを選択する、またとないい好機」と、とらえようではありませんか。私たちが地に足をつけ、落ち着きを取り戻し、思考することをはじめたとき、平和憲法が、かけがえのない、必要不可欠な存在であることを心から実感できるでしょう。

(綿津)

◆大きな成功を収めた「9条世界会議」ではあるが、当初、全体像が見えないなか、本号を編むにあたり、多くの方がたのご尽力を得た。ことに、「9条世界会議」で事務局長をつとめられた川崎哲さん、日本実行委員会事務局の松村真澄さんにはお世話をいただいた。

「あいらメイト」はもとより、「あいら」に初めてご寄稿くださった、皆さまに多くのことを学ばせていただき、感謝。

「報告」反サミット運動、「窓」名古屋高裁4・17判決など、お若い研究者、弁護士の方々の力作にもご注目を。

三万人が集った「9条世界会議」を跳躍台として、次の憲法運動をどのように構想していくか、また皆さまと誌上で語りあいたいと思っている。(光)

◆こんなにもすばらしい320号になったのは、「お書きになったすべての方がすばしかったから。そして、9条がすばしかったから」と、つくづく思います。感謝で、いっぱいです。

厳しい経済難。廃刊を迫られている(あごら)ですが、三十六年間、ともし続けてきた〈不戦の灯〉を消しては、いけないと、この号を編みながら、改めてしみじみ思いました。

(千)

## へあごらは、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……

心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。

どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

## 〈BOC〉の登録もどうぞ……

一九六〇年に生まれたへBOC＝バンク・オブ・クリエイティビティは、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上へあごら会員の方に限ります。

### 連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九―四 中公ビル  
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014  
Eメール XLV05467@nifty.com ちたちboc@mb.infoweb.ne.jp  
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

---

あごら 320号 「9条世界会議」に参加して

- 編集 あごら新宿 ●発行 2008年10月20日 ●印刷 藤田印刷(株)  
●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F  
●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com  
●定価 本体1,700円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部
-



9784893061751



1920036017003

ISBN978-4-89306-175-1  
C0036 ¥1700E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,700円+税

## 平和と平等を追求する 『あごら』近刊シリーズ

〈女の壁〉にチャレンジした女たちⅠ

どうなる? 「後期高齢者」

「裁判員制度」って、必要なの?

企画・編集・翻訳…  
何でもご相談ください

創業1960年 —  
女性専門職集団

**BOC**

各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

男女共同参画の

BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を  
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版